

【完結】 聖女(俗物)が10日で駆け抜ける世界救済(現場猫案件)

sugar 9

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

著しい報連相の欠如によって10日で世界を救うことになった転生聖女によるハイスピードマッチポンプ世界救済。

なお駆け抜けた後には大量のモクモクが漂う模様。

毎週更新・一クール小説杯参加。毎週日曜23時更新、全12話予定。

目次

1日目	ヨシ！で始まる世界崩壊カウントダウン	1
2日目	お前ら声出せ	12
3日目	どうしてこんなになるまでほつといたんですか？	24
4日目	誰も報告をしていないのである。	40
5日目	細部は練ってないけどまあヨシ！	50
6日目	休暇は大事と存じます	60
7日目	やせ我慢は身を滅ぼす	71
8日目	土台は念入りに	81
9日目	後は流れで	92
10日目	序 現場主義	105
10日目	破 どうして	117
9 9日目	急 ヨシ！！！！	134

1日目 ヨシ！で始まる世界崩壊カウントダウン

既に、その竜に残された力が幾ばくもないことは誰の目から見ても明らかだった。

その身を包む鈍く黒色に輝く鱗は既にその多くがひび割れ、砕け、ところどころが剥がれ落ちていた。翼に至っては片方が根元から失われており、世界を恐怖に陥れた邪竜というその威容はもはや失われていると言えるだろう。

しかし、それでもその邪竜は眼前にて傷1つない姿で佇む少女を睨みつけ、それが己の存在意義であるとしても言わんばかりに咆哮する。邪竜の住処である荒野にて、並の者ならばそれを聞くだけで恐怖のあまり生きることが諦めるであろう咆哮が響き渡る。

だが、邪竜と相對するその少女はそれに対して眉1つ動かすことはない。

たった1人で邪竜と相對するよりも、城でドレスを着て佇む姿の方が似合うであろうその美貌と、薄暗い夜明け前においてもわずかな光を照り返して美しく輝く金色の髪。煤で汚れた雪のように白い肌は、しかし傷らしい傷は見受けられず、彼女が身にまとっている白を基調に金の装飾が施された美しいローブも汚れてこそいるがほつれ1つ見られない。相對する邪竜と比べれば、多少の苦戦こそあったとしてもその戦いが一方的なものであることが伺えた。

「これで、終わりっ!!」

鈴を転がすような、それでいて勇ましさも感じさせる声とともに、少女の手に携えられた豪華な装飾が施された杖から眩い光がほとばしり、一筋の光線となって邪竜の胸を貫いた。無敵の防御を誇った邪竜の鱗はいともたやすく貫かれ、邪竜の胸に人間一人が通り抜けられるような程度の穴が空く。

邪竜は天を仰ぎ、咆哮とは異なる痛々しい叫び声をあげ、力なく地面に倒れ伏した。

「……はあ」

少女はしばらくの間、決して油断することなく倒れ伏した邪竜に対

して杖を構えていたが、邪竜の眼から光が消えていくことを確認すると、ようやく力を抜いて杖を下し、その場に座り込んだ。

恐らくだが、ここから邪竜が復活することはない。多分そう、きつとそう。少女はそう判断した。

「疲れたあ……」

少女、セーラ・アーベラインは宝石のような翠色の瞳に疲労の色をにじませてため息をついた。先程までの凜とした佇まいは無く、どちらかというと日々の激務に疲れ切った労働戦士のそれであった。

聖女、セーラ・アーベラインは転生者である。

恵まれた容姿、卓越した才能、その他もろもろの運命力を持ちながら転生者特有の俗物の性根を持って生まれた彼女は生まれ持ったその力を思う存分にブンブン振り回した。時には騎士団の鼻つまみ者であった女騎士を救い、時には没落しかかっていた令嬢を救い、時には稀代の天災と言われ世間から廃された魔女を救い続けた。性別に偏りがある気がしないでもないが、その間にその他大勢を救い続けているため全体的な統計を見ればファイファイファイになるはずである。

が、そんな一人で振り回すには過ぎたものをちやほやされたいという俗の極みな欲望の赴くままに振り回し続ければどうなるのか。大いなる力には大いなる責任が伴うとは誰が言った言葉だったか。気が付けば彼女は、国どころか世界を救った救世の聖女として祭り上げられるようになったが、そのちやほやの100倍の責任を背負いこむ羽目になった。

そこからは、もうちやほやがどうだの言っっていられないブラックな日々が始まった。来る日も来る日も（セーラ主観では）取るに足りないザコをプチプチして回る日々。感謝されることは良いのだが、割とバカにできない割合で罵詈雑言を浴びせられることもある。何故もつと早く助けてくれなかったのかとか、私はこんなに苦しい暮らしをしているのにそんな良い暮らしをするとはとか、例え世界線レベル

で変わってもヤバいクレーマーというのは変わらずいるものである。
1つの悪意は99の善意を帳消しにする。

セーラは思う、しんどい、もうちやほよとかいいから休みが欲しいと。

セーラは決断した。

これだけ人間が魔物に被害受けてるんだから魔王の1人や2人いてそいつ倒せば解決するだろ。解決してくれと。

その執念の末に見つけ出したのが、今セーラの目の前で軀と化したドラゴン、邪竜エンデである。両端に†をつけたくなる名前をしているが、その正体は魔晶核^{コア}というなんかすごい勢いで世界各地に魔物を生み出すジェネレーター的な存在が良い感じに自己防衛のために鎧として竜の姿をまとった存在である。

このトカゲさえやつちまえば、少なくとも魔物の被害から人々を守るために東へ西へ休みなく飛び回る日々からはおさらばできるはず。

セーラはそう判断し、必死の思いで邪竜を探しだした。当然、実質ラスボスのため方が一にも仲間を巻き込まないために探索から討伐まで全部ワンオペである。

「これで、やっと……」

全身が暖かくなるような達成感に浸りながら、目の前に倒れ伏している邪竜を改めて見据える。流石に諸悪の根源なだけのこととはあり、彼女がこれまで相対してきた魔物の中でも最大級の難敵であった。

今は輝きを失っているが眼光だけで人を殺せそうな巨大な眼。一本一本が巨漢の兵士に持たせる剣に流用できそうな爪牙。どんな魔物ですら容易に消し飛ばしてきた彼女の魔法をもってしてもかなり持ちこたえて見せた鱗。今なおなんか光り輝いている体内の魔晶核っぽい部分。

「……ん？」

今なおなんか光り輝いている体内の魔晶核っぽい部分。

「待って待て」

セーラが大慌てで魔法で以て邪竜の身体を切り開く、生前の耐久度が嘘のようにスッパリ切り開かれた邪竜の腹部にあったのは、「自分

!! 2秒後に爆発いかせていただきやす!!」と言わんばかりにビカビカ輝く魔晶核であった。

「待て待て待て待て!」

セーラのスペックだけは無駄に恵まれた頭脳が高速で思考を回す。改めて魔晶核を観察すると、先ほどの光線で部分的に消し飛ばされている。恐らくは欠けてもなお魔物を生成し続けようとした結果、暴走を起こしているのだろう。その結果どうなるのかはあまり考えたくない。

防御魔法で魔晶核を覆って爆発を抑え込むという手段も考えたが、何せ相手は世界各地に無尽蔵に魔物を生成し続けた化け物ジェネレーターである。如何にセーラがチート転生者とはいええぶっつけ本番で爆発を抑え込めるか分からず、ミスれば少なくとも周囲が地獄から消滅するレベルの爆発が起こりかねない賭けに出れるほどセーラは強心臓ではない。

正攻法ではリスクが高いならば、取れる手段は数少なくなってくる。

その中でも比較的現実性が高く、尚且つ失敗してもある程度は被害が抑えられそうな方法。

「なんとか、なれっ!!」

杖を振りかざすと、魔晶核がセーラの魔法によって包まれる。

それは、時間停止魔法。意志を持った相手には時間経過や強靱な精神力などで突破されてしまうが、それ以外なら外部から干渉を受けない限りほぼ無制限に止められる術式である。これで、魔晶核を爆発する寸前で止め続けられれば、ひとまず爆発することはなくなる。

そして、流石にその爆発しかけの核弾頭のようなものを放置するわけにもいかないため爆発の周囲の地面を隆起させ、さながらマトリョーシカのように何重にも覆い隠す。

幸いここにはセーラ以外誰にもいない、臭い物には蓋をするに限るのだ。

気が付けば、爆発しかけの魔晶核を覆い隠す形で、小高い山のようなものが出来ていた。これでは見張りでも置いておけば、知らな

いうちに大爆発する、といった危険はなくなっただろう。ゆくゆくは処理する必要が出てくるだろうが、それはその時の自分に任せればいい。

「……………ヨシ!!!」

故に、セーラは一旦問題をおいておくことにした。目についた問題にいちいち気を揉んでいると秒で精神が病むと言うのはこの過酷な魔物絶滅道中で得た学びだ。

それよりもまずは休みである。何もなくてよくなる、という事は流石にないだろうが、少なくともこんな戦場に身を置くことが常とはならなくなるだろう。早い話がぬくぬく快適な文化的な生活である。何と甘美な響きだろうか。

もう3ヶ月連続野宿生活とか、実力的に自分以外の味方連れてくと多分死ぬからワンオペで寝ずの番をしながらの魔界探検とかもしなくてよくなるのである。

そう考えれば、全身を蝕むこのとんでもない疲労など片腹がポンポーンペインである。セーラは弾む足取りもそのままに帰路に就いた。

――――

「ええ、ではそのように。お疲れさまでした」

「は、はい！ お先に失礼いたします。聖女様！」

緊張している様子の隊員が自身の書斎から出ていくのを確認した後、セーラは少し姿勢を崩して深く椅子に腰かけ、思いきり伸びをした。疲労感で比べれば言うまでもないが、魔物をプチプチしていた時代には使わなかった筋肉を使っているため全身からパキパキと心地よい音が伝わってくる。

(あー、今日も今日とていい感じに働いた)

人間が1日にできる限界の仕事量が1000だったとして、一番忙しかった時期が1000で、大体500くらいの日々。

それが、今の彼女、セーラ・アーベラインの日常である。

爆発しかけの魔晶核を臭いものに蓋をする的解決策で封じ込めて

早2年、未だに仕事は少くない量舞い込んでくるが、それでもゆとりのある生活を送っていた。魔晶核を封じるために自分の魔力を分割して分身として召喚する『個エインによる軍勢』を常時発動しているため今の彼女の実力は本来の半分程度しかないが、何せ魔物退治の依頼がないため何も問題はない。

『ハイリガー・バタリオ聖女の大隊』なる名前と若干引くレベルの忠誠心以外は完璧な美女軍団を侍らせて緩く仕事をこなす日々はおおよそ苦痛とは程遠い。こういう環境に置かれがちなあんな主人公やこんな主人公はなぜこれをさも当然のもののように受け入れられるのか、セーラには到底理解できない。

エインヘリヤルには「何かあつたらすぐ連絡するように」と指示を飛ばしており、何の連絡もないという事は特に問題ないという事だろう。

(ああ、幸せだなあ)

既にこの生活が始まってから2年以上たつが、それでも噛み締めた事無いこの幸せ。自分以外誰もいない書齋であるのを良いことに口角をフニャフニャにしてニヤけるセーラ。転生して美少女になっていなければ完全に終わっていた絵面である。

そんな彼女のにやけ面を横面から殴り飛ばすように、書齋の窓ガラスを割って何かが飛び込んできた。

「なんっ……!?!」

あまりの勢いにセーラは書齋の椅子からふっ飛ばされ、地面にへたり込む形になる。

飛び込んできた勢いで照明が破壊され、セーラの部屋が暗闇に包まれる。ヒト型の何かを確認する間もなく防御魔法を展開するセーラに対して、それはゆっくりとした動きで立ち上がった。

「ようやっと、見つけました」

その声が聞こえるころには、セーラも暗さに順応してきたのか、月明かりに照らされたそれを目視できるようになる。

そこにいたのは、何て言うか、丁度セーラが闇落ちしたらこんな感じになりそうだなあとという見た目の、セーラの髪を黒くして瞳を赤くした感じの美少女だった。顔だけはまさにセーラとうり二つであり、髪と瞳の色、あとは着ているものを除けば、両者に違いらしい違いはほぼ無いと言えるだろう。

セーラと、それは、しばし言葉もなく相對する。

主従が始めて相對するときの、へたりこむ主マスターに対して月明かりを逆光に従者サレヴァントが見下ろす運命的な何かを感じさせるあの構図である。

「ひよつとして……エインヘリヤル、ですか？」

「いかにも、私は貴方の分身です。セーラ」

不安げな表情を浮かべるセーラに対して、あくまでそれ、エインヘリヤルは従者という立場を取ろうとしている。エインヘリヤルはしばし目を伏せた後、どこかかしまったような様子でセーラに話しかける。

「良いですか、落ち着いて聞いてください。間もなく時間停止魔法が解け、魔晶核の暴走反応が再活性化状態となります」

「……はい？」

セーラはエインヘリヤルの言った言葉が今一つ飲み込めない半分、内容の理解を本能のレベルで拒否している半分で、普段の聖女ムーブをしているときには決して出さない間抜けな声を出す。

「暴走……というところ？」

「文字通りです。セーラが魔晶核に仕掛けた時間停止魔法を、魔晶核から放たれる負の魔力が徐々に侵食し、間もなく時間停止魔法が解かれる状態となっております」

「……具体的にどれくらいですか？」

「約10日後です」

「もつと早く言ってくださいよー！」

そこまで言っただけでようやく事態が飲み込めたのか、セーラは部下には決して使わない若干激しめの口調でまくしたてる。

「言いましたよね!? 何か変化あったら連絡するようになって！」

「それなのですが、できなかつたのです。セーラ」

「はい!？」

エインヘリヤルは沈痛な面持ちを保ったまま喋り出す。

「魔晶核の魔力は予想以上に強大だったようで、監視のために魔晶核の付近にいた私も気づかぬ内に負の魔力に侵食されていました。聖女としての神気で負の魔力を無意識下で弾くセーラに、負の魔力に侵食された私の伝言魔法は届かなかつたのです」

「えっ……大、丈夫なんですか?」

「問題ありません。確かに私の身体を構成するセーラの魔力は既に大部分が負の魔力に染まっておりますが、セーラの為にある私の心までは失っておりません」

早い話が、マジで闇落ちしていたのである。サラツと語られた重めの事実に対して、セーラは事情を鑑みずに詰めるような真似をしてしまったことに罪悪感を覚え、俯いた。

「そう、ですか。大変だったんですね。すみません……」

「いえ、セーラが気に病む必要はありません」

「いや待ってください。それにしたっていくら何でも遅すぎませんか? ずつと見張ってたならもつと早い段階で気づけますよね?」

「……………」

顔を上げたセーラがエインヘリヤルの方を見ると、そこには露骨に顔を反らしたエインヘリヤルの姿が。

「……漏れ出ていた魔晶核の魔力に染められ、伝言魔法も使えないと

気づいて退避したときにですね」

「はい」

「確かに異常事態ですけど、侵食速度的にすぐにどうこうという話でもなさそうだったので、少しくらい好きなことをしても良いかなーと思っまして」

「はい」

「少々寄り道をしていたら今日到着となりました」

「…………どのくらいですか？」

「……………1年ほど」

「バカーーーー!!」

セーラは勢いよくその場に突っ伏した。

――・――・――

時間停止魔法解除までの予測日数 10日

今日から記録を書いておくことにします。1分1秒が惜しい現状ですが、落ち着いて整理する時間が欲しいためです。

先程、エインヘリヤル戦 犯から告げられた魔晶核にかけた時間停止魔法が解除されつつあるという報告ですが、ひとまず信じることにして行動することにしました。確認するにしてもこの世界にはワープのような便利な魔法が地味になく、どんなに急いでも1日かかります。私がしっかりとした手続きを踏んで外に出るにはそこそこな手間がかかる事、若干ヤンデレの気配がある私の部下に黙って外に出るとその後数日は拘束されることを考えると、無断外出というカードは切るべき時を考えるべきでしょう。

ちなみに、当のエインヘリヤルには私の部下に見つかっていない混乱を避けるためにいったん私がいる街の外に出てもらいました。

冷静に考えれば普通に全部私のせいなので申し訳なさも無くはないですがこれくらいすることは許されるはずですよ。

まず、頼もしいを通り越して多分私より有能な方々で構成されている大隊員の方々を直接使うのは難しいでしょう。彼女たちは私に若干怖いくらいの信頼を寄せてきてくれてはいますが、流石に『諸悪の根源である邪竜なんですけど実は倒しきれなくて心臓部を爆発する寸前で留めておいたんです！ ただ留めてた魔法がキャパくてあと10日ほどで解けて再び大爆発起こすみたいです！ テヘペロ！』とかいったら流石にどうなるか余り考えたくないです。エインヘリヤルのこと何も悪く言えませぬ私。

次に、私自身の力です。エインヘリヤルに分割していた私の力を元に戻すべく魔法を解除しようとしたのですが、これも無理でした。原因は言うまでもなく、エインヘリヤルが身も心もバツチリ邪竜産の負の魔力に染まっていたからです。光と闇が合わさっても対消滅起こすだけでした。ははは、笑えねえ。なーにが私の心は染められておりませんか、身も心もバツチリ堕ちてるじゃないですか。

一応、時間をかければどうにか出来ないこともなさそうですが、全力が戻ってもどうこうできるといふ確信がない以上、他の方法も模索した上で取り組んだ方が良いでしょう。すぐやるべきことがない時にコツコツ進める感じで良いでしょう。

私の実力は時間停止魔法を使って魔晶核の暴発を食い止めた時のおよそ半分となっており、時間停止魔法をかけなおしても上手くいくとは思えません。まあ仮に全力を出せたとしても現状で時間停止魔法が侵食されてしまっている以上、何らかの耐性が付いているとみるべきでしょう。

他にも、魔晶核をどうこうする解決策は無くはないですが、確実に、と言えるものはありません。ミスったら世界が終わりかねない以上安直に試すのは怖い所ですよ。

現状覚えておくべきことはこんなところでしょうか。落ち着くた

めに書いたんですが思ったより現状が糞過ぎて辛くなってきました。ちよつと吐いてきます。

落ち着きました。途中隊員の方に見つかって死ぬほど焦りました。どうにか事なきを得ました。

何にせよ、これまであらゆる事態を純粋な暴力で解決してきた私から純粋な暴力が奪われた現状、私はうんちなので1人で事態を收拾に向かわせるのはほぼ不可能です。明日はどうにかして上手い事私の部下の皆さんを自然な形であと10日で世界滅亡の危機にいい感じに立ち向かう方向にもつていけるように動きましょう。

今日は夜も遅いですしこんなところでしょうか。睡眠は諦めてどうやって自然な感じで部下の方に世界が滅亡に向かっていると気づかせるか考えながらエインヘリヤルに割いた魔力を取り戻すための術式の構築に当てましょう。この感じ懐かしいですね。

時間停止魔法解除までの予測日数 9日

部下の皆さんが何やら沈痛な面持ちで私のやらかしをなんか全部邪竜のせいにして報告してきました。

なんで？

2日目 お前ら声出せ

——なら、一緒に行きましょう。あなたが本当にやりたいことを見つかるまで、私をあなたの居場所にしてください。

かつて、セーラにかけられた言葉は、今思えばセーラ自身にとつての救いであったのかもしれない。

聖女の大隊第一席、ミナト・フォン・デア・フォーゲルワイデはそう考える。

女である自分が嫌いだった。戦場に身を置く上で、女であるという事は庇護される立場に立たないかぎり邪魔でしかない。女であるというだけで、常に自分を軽んじられて生きてきた。実力としては申し分ない、という自覚はあった。事実、女性としては初めて、騎士団の部隊長にまで上り詰めるという榮譽に預かることはできた。

だが、剣の強さで上げられるのはそこまでだった。そこから先は、女性だからという理由だけで軽んじられる日々だった。剣などまともに振ったことすらないだろう下卑た笑みを浮かべる上流階級の男共には護衛という名目でありもしない方が一の事態に備えて付き従わなければならぬ日々が続いた。戦場からは離れ、武勲を上げる機会も減っていき、ただ見目麗しい飾りとして付き従うことを強いられる日々。それは、血反吐を吐く思いで鍛え上げた剣の腕よりも、手入れなど最低限しか行っていないにも関わらず輝きを保つくすんだ金色の髪が、戦場には似つかわしくない雪のような白い肌が評価される日々であった。自身の容姿が優れていることを心の底から憎んだ日々だった。

はつきり言ってしまうえば、1秒だって長くそのような場所には居たくなかった。だが、女の身で、それほど高くない身分の家の出でありながら部隊長の身分にまで至った彼女は、彼女と同じく女の身でありながら騎士の道を志す女性たちにとつて希望であった。

彼女達を裏切りたくない。その一心で、彼女はいつしか何故騎士に憧れたのかも忘れ、名を上げる事に執着するようになった。慣れない食事や舞踏会に呼ばれることも増え、そういった場での所作にも慣れ

始めた頃。

特に何か決定的なきっかけがあるわけではなかった。だが、かつて自分が憧れたものからは乖離しつくした自分の姿から無意識に目を背けながら生きた結果、精神が摩耗しつくしていたのだろう。

最後に剣を振ったのがいつだったか分からなくなった時だろうか、成りあがるためならば身体を許すことも覚えた時だろうか、

それとも、かつて自身に憧れてくれた少女が、自分に失望の目を向けるのを見てしまった時だろうか。

いずれにせよ、それらがつもり重なった結果、彼女の精神は一度根元から折れた。

そうして彼女は、かつて戦場で生き死にを共にした剣で以て、自身の顔に消えない袈裟斬りの傷跡を刻み付けた。

その傷跡が出来てからは面白いように呼ばれる機会が目減りしていった。

毎日のようにあつた護衛の任務は週に1度程度になり、それも使つてやってるのだからありがたく思えと言外に示すようなものばかり。それ以外の時間は、誰でもできるような雑務ばかり。

騎士として、国に命を捧げるといふ誓いが働き、命を投げ出すまでは至らなかつたが、それも結局国など関係なく、ただ死ぬのが怖いだけであることに薄々感づいてからは、もはや仕事すらもまともに行えなくなった。

そして、最後にたどり着いたのが、聖女部隊だった。かつて世界を救ったとされる聖女の生まれ変わり。彼女を庇護し、支えるために女性のみで構成された部隊。目に見えてお飾りの為でしかない部隊の副隊長。それが厄介払いとしてミナトが行き着いた先だった。

「あなたがミナトさんですね。私はセーラ、セーラ・アーベラインと言います。何かと至らぬ点もありますが、よろしく願います」

当初の聖女部隊のために用意された、小さく薄汚れた部屋。かつては物置として使われていたであろう小部屋。そこでミナトは、セーラと出会った。

薄暗い部屋には似つかわしくない、煌びやかに輝く金色の髪。この世には希望があると信じて何一つ疑っていないことが伺える翠色の瞳。

花が咲くような笑顔で、少女、セーラはミナトを出迎えた。

城内の聖堂のそばにある小さな部屋。仮にもかつて世界を救ったとされる聖女の生まれ変わりに用意したというには質素が過ぎるその部屋は、教会ですら彼女が聖女の転生などとは信じていなかっただろうことを如実に示していた。彼女が聖女の生まれ変わりであると信じた一部の者の中に有力な貴族がいなければ、そもそもこうして部隊を設ける事すら許されなかっただろう。

腹芸が未だに不得手なミナトですら、彼女がほぼ期待されていないことなど何も喋らずともわかるのに、目の前にいる自分より頭2つは小さい少女はそんなこと気づいてすらいないと言わんばかりに部屋の掃除に励んでいた。

「最初の仕事はこの部屋の掃除です！ 手伝ってください！」
「……はあ」

正直、あの時のミナトに、セーラという存在は眩しすぎた。

彼女は優しかった。当初は数人程度しかなかった、それも厄介払いされるような評価しか受けられなかった女性達を聖女部隊としてまとめ上げ、理不尽な現実打ち砕かれそうな人々に対して救いを振りまきながら、仕事の大小に問わず成果を上げ続けた。

そして、彼女はあまりにも強すぎた。神話や聖女というものはミナトは国教だから信じている程度でしかないがもし本当にいるとしたら彼女みたいな存在なのだろうという程度には強すぎた。無限に等しい、少なくともミナトは今日にいたるまで底を見たことがない魔力を非常に高い練度で操る彼女は、軍を持ち出してなお痛み分けて撃退

するしかない魔物との戦いにおいてすら苦戦らしい苦戦をすることがなかった。

行く先々で、人々を救いながら任務をこなしていき、彼女に賛同した者が次々と彼女の傘下に入っていく。その中には国が様々な事由から排斥した実力者も含まれており、圧倒的な実力を持つ彼女だけにとどまらず、彼女が率いる烏合の衆のはずの聖女部隊も同時に大きくなっていった。

聖女部隊というある種の蔑称で呼ばれていた彼女が率いる軍団は、いつしか聖女の大隊と呼ばれ、国有数の精鋭部隊として、聖女の生まれ変わりという旗印の下、多大な支持を集める事となっていた。

当然、彼女の実力を知ることになった国側にとって、彼女は目の上の瘤となりつつあった。権力にまるで興味がなく、無償の救済をバラ撒き、無遠慮に支持をかき集める彼女によって国内の勢力図は滅茶苦茶になり、権力者の中には彼女を憎む者も少なくなかった。当然、彼女に取り入ろうとする者も少なくなかったが、ミナトも含めて聖女の大隊の中でも統率役に近い立場の者は優秀ではあるが様々な理由から国から排斥された者も少なくなく、気が付けば聖女の大隊は国の指揮系統から独立した部隊となっていた。

邪魔が入ることもあった、それは、魔物によるものだけではなく、彼女の活躍を良く思わない人によるものも多かった。

それでも、彼女は止まらなかった。遍く全てを救うため、害意にも悪意にも屈することなく、ミナト達の先頭に立って正義の道を歩み続けた。

それは、正しく救世主が遍く全てに救いを振りまくおとぎ話の領域であり、そんなおとぎ話の中で正義の味方であるかのように聖女の下で戦う事は、ミナトがいつか憧れた騎士そのものであり、いつしか彼女の心の傷も少しずつ癒えていった。

しかし、そんなある日、ミナトは見てしまった。

魔物との戦い、不慮の事故を装った一部の反聖女派が差し向けた部隊との交戦を経た日の夜の事。

誰もいない野営地の外れで座り込み、何かに疲れたような憔悴した

顔で夜空を見上げるセーラの姿を。

そこには、普段の彼女が持つ輝きはどこにもなく、年相応の少女がいるだけだった。

「つミナト、さん？」

彼女は何かに怯えるかのように体を揺らして反応した後、取り繕うかのようにいつも通りの笑顔を浮かべた。

「どうしましたか？ 眠れないんですか？ ミナトさん」

「い、いえ……」

ミナトは、戸惑いながらも、ここで見なかつた振りをしてはならないという強迫観念に似た衝動に任せてセーラの隣に腰かけた。髪色や白い肌くらいしか共通点はないが、共に容姿が優れていたこともあり、並ぶと姉妹のようだと言われることは、ミナトにとって小さな自慢であった。

「……見ましたか？」

「……はい」

普段の底抜けに明るい彼女から発せられたとは思えない沈んだ声色だった。普段と違いすぎるセーラの声に何と言えば良いか分からず、ミナトはただ頷くことしかできなかった。

「そうですか……」

2人の間に何とも言えない空気がしばし流れた後、ゆっくりとセーラがしゃべりだした。

「たまに、思うんです。私は本当に聖女なのかって」

普段ははきはきと喋るセーラにしては珍しい、口から漏れ出したかのような喋り方だった。

「誰かを助けるのは好きです。皆の為に頑張るのもまあ好きです。けど、私は本当にそれだけで、力が無ければ、魔物の前に立つ勇氣なんてきつと出なくて」

「え……」

そこにいたのは、少なくともミナトから見ればどこにでもいる、1人の少女だった。少なくとも、国のために日々戦う気高い聖女然とした普段の彼女からは想像もできない姿だった。

「魔物を倒していたら、私を殺そうとする人が出てきて、私のやっつてることって、本当に正しいのか分からなくなってる……」

ミナトは、ただ唾然と、聖女でも何でもないただの少女のように喋る目の前のセーラを見つめていた。

それが、酷く追い込まれているかのように見えて。ミナトが守らなければならぬ無辜の民と同じように見えたのだ。目の前の少女は、その気になればミナトなど魔法1つで吹き飛ばせるにもかかわらず。

ミナトは思わず、セーラに横から抱き着いた。ミナトはセーラと比べて二回りほど大きいため、覆いかぶさるような形になる。

「えっ……？」

「む、昔、母にこうされると安心したのを思い出したので……」

「はあ……」

しばし、2人はそのまま動かなかった。夜だからか音らしい音は無く、2人の呼吸音だけが聞こえる。

「……あ、あの、そろそろ」

「っ、す、すみません」

セーラの声で正気に戻ったのか、ミナトは慌てて離れる。改めてセーラの方を見れば、そこには若干顔を赤くしたセーラの姿があった。

「えっと、ありがとうございます」

「い、いえ、そんな……」

普段の底抜けに明るいセーラの姿とあまりにも乖離があるからだろうか、ミナトは何やら見てはいけないものを見てしまったような気分と同時に、セーラは聖女の生まれ変わりでも何でも無い、たまたま聖女の力を持って生まれてしまったただの善良な少女であることを自覚した。

「その、できればこのことは皆さんには内緒でお願いしますね」

「は、はい、承知しました」

だからだろうか、目の前の少女を守りたい、庇護したい。そういつた無礼にもほどがある欲求が首をもたげてしまったのは。この瞬間

の彼女は自分だけのものなのだという優越感を持ってしまったのは。

これでセーラが本当に聖女を頑張って演じるただの美少女で、（あー、もうヤダ疲れたしんどいチーズ蒸しパンになりたい）とか思いながらボーっとしてた俗物でなければ、素敵なおロマンスの1つでも始まっていたのかもしれないが、現実には残酷である。

――――

「……冗談はよせ」

「あいにくだが、私はこんなつまらない冗談を言う趣味は持ち合わせていないよ」

セーラがいる時には基本的に和やかな空気が漂う会議室、そのセーラがいない会議室には、2人の女性しかいないにも関わらず、重苦しい空気が漂っていた。

聖女の大隊を構成する部隊をそれぞれ率いるリーダーによって構成される「円卓」。その第一席を務め、階級の上下はないが実質的なリーダーとして様々な業務をこなすミナト。

そんな彼女と相対している乱雑に首のあたりで切りそろえられた赤髪と薄汚れたコートをまとった女性は、かつて天災の2つ名で知られ、いくつもの禁忌指定術式を構築したことで知られる真正正銘の天才、テレジア・アルムガルトであった。

彼女自身の魔力量は平均と比べても低く、単体の戦力的には何ら脅威でないにもかかわらず、様々な凶悪な術式を作り出すその頭脳を恐れられて国から追われる身となっていた女性である。

2年前、セーラは邪竜エンデの討伐に成功した。魔物を生み出し続ける無尽蔵の魔力炉である魔晶核を心臓に持つそれは、人間の力でどうにかできるようなものではなく、はるか昔から人類は幾度となく挑

んでは敗れていった邪竜である。

それを、セーラは倒してしまった。それも独力で。彼女にとっては、目の前で飢えに苦しむ子供を救う事も、はるか太古より人類の脅威であった邪竜を倒すことも同じことなのだろう。

だが、帰ってきた彼女は、異様な程に弱っていた。テレジアが調べた限りでは、彼女の魔力量は、かつての半分ほどになっており、十二分に絶対的な強者の域には居るものの、かつてのような全てを力で救えてしまうほどの実力はなくなっていたのだ。

邪竜と戦う際に何かされたのではないか、邪竜がもつ負の魔力によつて癒えない傷を負ってしまったのではないのか。大隊内からそのような声が上がることは何も不思議ではなかった。

いくら彼女に問いただしても何でもない、大丈夫だの一辺倒だが、そこで領けるほどミナトは楽観的ではなかった。

今の彼女には万が一があり得る。そんな彼女を表に出すわけにはいかないというのが、実質的な組織のリーダーであるミナトの考えだった。

幸い、魔物を生み出す魔晶核はセーラによつて破壊され、今後魔物が生まれることはもうない。魔物は討伐すればするだけ数を減らす一方であり、セーラのような都合の良い救世主の存在はもう求められない。セーラの身を危険にさらす必要はどこにもないのだから。

「邪竜エンデは死んでいない」

だからこそ、テレジアからの報告は、ミナトには信じがたいものであった。

「どういうことだ。邪竜エンデはセーラによつて討滅された。」

「そうだね。確かに世界中で魔物の生成は止まり、セーラも出張らなくてよくなった。だからこそ邪竜の顎が残っていることが私は疑問だったんだ」

「あれは邪竜が断末魔として発した負の魔力が残留しているだけだろう」

「私もそう思っていた。だがそれにしては残留した負の魔力の減衰の速度が異様に遅い。何ならあの地自体が負の魔力を発しているとし

か思えないくらいだ」

邪竜の顎、セーラとエンデが戦う中で隆起した地面によって構成された岩山である。かつてない戦いにさらされた影響か、今なお邪竜特有の負の魔力が色濃く残る場所であり、生き残った魔物が負の魔力に惹かれて集う今や数少ない危険区域である。

現状唯一、魔物との戦闘が行われている土地であり、ここでの戦闘は聖女の大隊と、一部王国の精鋭部隊のみで行っており、この件はセーラには知らされていない。言うまでもなく、また独断で動きかねないセーラのことを案じてのことである。

「そうして邪竜の顎を掘り返した結果、見つけたのがこれだ」

そうしてテレジアが懐から紙片を取り出し、ミナトに見せる。魔力を込めてかざせば目に映る景色をそのまま転写することができる、簡単に言ってしまうえば写真機のような機能を持つ紙片だ。

その紙片には、薄暗い洞窟のような場所の中で紫色に輝く繭のようなものが映っていた。

「これは？」

「邪竜の顎の内部にあったものだ。何かを中心に時間停止魔法が周囲の空間ごとかけられている。負の魔力で構成されていた術式だから恐らくエンデが発動したものだ。反撃でもなければ、とてもセーラに有効とは思えない時間停止魔法をだ。反撃ではなく何かを守るために発動したと考えるのが自然だろう。確かに外からの干渉には弱いが、内部のものを保護する上では悪くない選択肢だからね」

テレジアは畳みかけるかのように喋る。

「勘違いしがちだが、エンデは厳密には竜ではない。エンデの意志は魔晶核の意志であり、あの竜の姿は魔晶核が自身を守るために負の魔力で構成した肉体だ。存在そのものが災害といっても過言ではないエンデが守る物など一つしかない」

「魔晶核、という事か」

「その通り。恐らく魔晶核に損傷を受けたエンデが死を装って一時的に身を隠すために魔晶核を時間停止魔法で覆い、邪竜の顎という隠れ蓑を作り、自身を守るために魔物をそこに呼び寄せているんだろう」

「……なるほど」

ミナトは1つ深く息を吐きだす。

「魔晶核の破壊は可能か？」

「セーラのせいで勘違いしがちだが、そもそもが災害のような扱いを受けていた存在だ。人間の手でどうこうできるような存在ではない」「それもそうか……エンデが復活するという見込みはあるのか？」

「まあ、復活するためにあんな殻に閉じこもったのだろうか、言うまでもなくあの中は時間が止まっている。エンデは現状何もできないはずだ。寄せ集めた魔物に時間停止魔法を解除させてそれを依り代にして復活。とかの方が考えやすい」

テレジアからの報告を聞き、ミナトは再び考えるような仕草を見せる。

テレジアは何かを察したかのように問いかける。

「……またセーラに何も言わないつもりかい？」

「どういう意味だ」

どこか棘のある口調で返すミナトに対して、テレジアは諭すように喋る。

「邪竜の顎の存在を報告しないことを決めた時にも思ったが、君はセーラのことを深窓の令嬢か何かだと思っているのか」

「……………」

黙り込んだミナトに対して、テレジアはため息をついた。

「別に君が彼女のことをどう思っていようが私の知ったことではないが、セーラが気づいた時には甚大な被害が生じていた。なんて事態にはしないで欲しいね」

「……わかってている」

「ならいいんだ。また何かあったら報告する」

そう言っつて、テレジアは会議室を出ていき、室内にはミナトだけが残った。

しばらくミナトは会議室に設けられた窓から見える景色を眺めていた。そこからは、町の景色が一望できる。現在テレジアがいる建物は、働きをいよいよ無視できなくなった国がセーラ達聖女の大隊に対

して用意した館である。ちよつとした城程度の大ききがあり、かつての小さな物置から始まった聖女部隊の頃を考えれば想像できないような待遇だった。

何かを欲しがるといふ事がほとんどないセーラに対して、大隊員が総力であの手この手を駆使して建設した施設である。セーラ本人はこれをプレゼントで渡され、重いかいいう次元じゃなかったため若干引いていたがそんなことはミナト達の知る由はない。

「……平穏な日々一つ保てないのか、私達は」

力なく呟かれたミナトの言葉を聞いている者は、ここにはいない。

時間停止魔法解除までの予測日数 9日

大隊員の方々曰く、†邪竜エンデ†が私との戦いでやられる間に時間停止魔法で魔晶核を保護し、それを覆い隠して魔物を呼び寄せる邪竜の顎なる小山があり、それを今まで私に隠していたこのことで、この過ちをただすためなら命を捧げることも厭わない所存とのことです。いやそれ私が作ったヤツウ!!

流星に私のやらかしてハラキリなんてされたらたまったものじゃないので遠慮していただきました。本当にヤンデレの気さえなければ完璧な人達なんですけどね。

何にせよ、本日の目標だった『大隊の皆さんをいい感じに世界がヤバい事に気付かせる』という目標は達成しました。流星に皆さんもあと9日で大爆発起きて世界がヤバいことまでは気づいていなかったつばいですが、気づいてもらえたのならあとはこっちのもんです。

良くない事態もあります。こちらにも魔力が半分になっている理由を要求してきやがったのです。100%こっちの落ち度なのできやがったとか言つちやダメですね。ごめんなさい。

流星に、『みんなの言う邪竜の顎に分身として置いといたらバツチり身も心も闇堕ちしました！ちなみに元に戻すのダメそうです！』とか言つたら全部崩壊するのでダメですし何かそれっぽい理由を考えないとですね。辛い。

とはいえ、こちらに関しては昨日から考えてきたため私に良い考えがあります。説明が要求されている現状を考えると明日にでも決行しないとイケないため後でエインヘリヤルを呼び出すことにしましょう。

さて、正直あとはもう頭の良い方に考えてもらいたいところですが次なる問題はやらかしの後始末です。

正攻法での攻略は無理となるとあとと思いつくのは封印とか、周囲の空間ごと別次元に飛ばすこととかですが、時間停止魔法をいったん解除しないとそういった類の干渉を受け付けないため、一旦時間停止魔法を解除しないとイケないのが怖すぎます。何しろ本当に爆発しそうな寸前で止めたため、解除して魔法が適用されるまでに大爆発！

とかになつたらシャレになりません。ほんと誰ですか時間停止魔法とかいうその場しのぎにも程がある魔法使ったの。私ですよクソが。

いずれにせよ、様々な方法を模索するにもどうにかしてエインヘリヤルを吸収して本来の実力を取り戻す必要があるでしょう。

何かこういう書き方すると悪役みたいですね私。人造人間とか吸収してそう。どうでもいいです。

とりあえず書いておく事はこんなところでしょうか。術式の構築に戻ります。

3日目 どうしてこんなになるまでほつといたんですか？

幸せに生きる方法は、考えることをやめて生きる事だ。だが、考えることをやめてしまえばたちまち喰われる世界に生まれてしまった場合にはどうすれば幸せに生きれるのだろうか。

少女、メア・シユナイダーにとって、自室より外側は常に油断ならない場所だった。

名家に生まれた。その時点で、彼女は世間一般的に見れば、十二分に恵まれているのだろう。少なくとも、生まれてこの方明日食べるものを不安に思いながら眠りについたことはないし、明日が来ることを疑ったこともない。

だが、目の前で落ちていく抛り所を眺めるのは、果たして幸せと言えるのだろうか。

メアが生まれた家は、それなりに長い歴史があった。その中でも、メアは神童としてもはやされて育てられた。

望むものは可能な限り与えられた、厳しいが、金に物を言わせた有意義な教育も受けられた。

だが、愛されていたかと言われると、確信をもって答える事は出来なかった。どうしてもメアには、自身に寵愛を向ける両親や家の者が、自分を通してその向こうにある富や栄誉に向いているとしか思えなかった。

事実、まだ学園に通うような年で、メアは半ば強引に家督を継ぐことになった。親からは無駄に気取った言い方で家督を与えることを言い渡されたが、その時点で、彼女は家の方針を実質的に取り仕切る立場にいたため、一刻も早く樂をしたいという勝手な親の考えは透けて見えていた。

家長としての仕事は、概ね順調だった。神童ともてはやされて育ったその才は本物であり、国内での権力争いが活発だったことも幸いして、メアが継いだ時には全盛期の5分の1ほどしかなかった領地も、

全盛期をやや追い抜くほどにまで大きくなった。

親への感謝もないわけではないが、忙しい日々の合間を縫って会いに行っても、聞かされる話といえばあの家はどうか、この家はどうかと欠片も興味もない縁談の話ばかり。名家と縁を結ばなくとも今の地位があるのにそれしか方法を知らないのか、少しでも何かやってみる実感を得たいのか、

やることといえば、メアがたった一代どころか数年で築き上げた規模こそ大きいが領地として権力争いで落ち目の貴族から取り上げて間もない故に脆い土地でメアから許された範囲での贅沢三昧。

自身はただ、機械的に最も良い効率で家を発展させるだけ。そこに達成感らしい達成感は無く、ゆくゆくはメア自身何のためにこんなことをやっているのか分からなくなりつつあった。

セーラの存在を知ったのは、そんな時だった。

神話にて人類に救済をもたらしたという聖女の生まれ変わり、そんな少女をリーダーとした新設部隊の設立。隊員はかつての女性の出世頭にして今やすっかり落ちぶれたミナトを筆頭に、様々な所から引き抜いてきた見目だけは良い女性だけの烏合の衆。どこからどう見ても厄介払いかプロパガンダ目的の部隊だった。

大方、当時落ち目だった教会とつながりの強い者によるものだろう、上手くいくとは思えないが。

それが、聖女を知った時のメアの感想だった。

だが、聖女部隊、というよりそのリーダーであるセーラは異例の速さで国内での立場を確立させたメア以上の速度で頭角を現した。

最初は偶然の連続か、もしくは箔をつけるための出来レースだと思っていた。しかし、聖女部隊が名を上げ始めた時に起こった魔物の大侵攻。本来ならば町一つを捨て、多くの兵を失って被害を最小限に抑えるはずのそれを聖女部隊のみで、被害らしい被害も出さずに抑え込んだ時に、状況は大きく動いた。権力者達は町を失わずに済んだ喜びよりも先に泡を喰ったような勢いで聖女に取り入ろうとするところから始めた。

メアがいの一番にコンタクトを取れたのは侵攻があつた場所とメアの領土が近かつたからという偶然と、国中に広めた情報網で以て聖女部隊の武功をいち早く知ることができたという必然が重なつた結果だつた。

「お初にお目にかかります、シユナイダー様。私はセーラ・アーベライン。故あつて聖女部隊の隊長を務めさせていただけいております」

「そんなに肩に力を入れなくても構わない。君たちがいなければ僕の領土は魔物の手に落ちていたかもしれないんだ、まずは感謝を言わせてほしい」

権力争いの場にはまず関わつたことがないだろう、見目だけは良い普通の少女。

それが、彼女の後ろに控えているミナトに叩き込まれたであろう付け焼刃の不慣れな所作で頭を下げるセーラに対するメアの印象だつた。

透き通るような翠色の瞳や、絹のような金色の髪。そんな見目麗しい少女が豪華な装いを纏つていれば、なるほど、偶像として祭り上げるにはもつてこいだらう。そう思える程度にはセーラは美しかった。

「君達に来てもらったのは他でもない。今回の侵攻を防いでもらつた礼がしたくてね。非現実的なものでなければ、可能な限り用意する所存だ。何が欲しいか教えてくれないかい？」

それは、ある種の測りだつた。目の前の少女は何で動くのか、何を重りにすれば天秤が傾くのか、単純ではあるが、人の動く動かないの根底に根差す損得の部分を知るための質問だつた。

「欲しいもの、ですか……」

セーラはきよとんとした表情を浮かべた後にしばし考えこむような仕草を見せた。一瞬ミナトの方へと視線を向けたが、ミナトは何も言わずに首を横に振るだけだつた。メアとミナトは互いに数少ない女性で明確な地位を持つている存在であつたため、それなりに知己の中ではあつた。ミナトが自傷行動に走つてから会う機会はめつきり減つたが、それでも、油断ならない人物である程度のごことは伝えられているのだろう。

「あつ、では部隊の執務室に使う家具を一通り頂けますでしょうか？
流石に人も増えてきましたし。昔の物ではガタが来てしまつて
いますので」

その願いは、メアの予想の範囲からは絶妙に外れた、俗物的な、し
かし妙にささやかなものだった。

「勘弁してくれ、そんな程度で済ませてしまつたら私が他の者から叱
責を受けてしまうよ」

「では最高級のものをお願いします」

「そういう事じゃなくてだねえ……」

これは扱いづらい。確かに戦力こそ大したものだが、理知的に考え
られない大きすぎる力など災いの種でしかない。

「まあ、色を付けて送らせてもらおう。数日中には届けさせるから
待っていてくれ」

「ありがとうございます」

セーラは、花が咲いた様な笑顔で頭を下げた。その笑顔が妙に眩し
くて、苦手なタイプだとメアは思った。

「ぐっ……ああクソ」

それから数年後のある日、メアは町外れの裏路地で壁を背にして座
り込んでいた。

何という事はない。腹事で一手間違えて、そこからずるずるとなし
崩し的に様々な他人との関係が悪くなつていき、それが帰り道に刺客
に襲われるという結果に至っただけだ。メアは確かに急速に自分の
家を発展させたが、それは言ってしまうえば一手間違えただけで詰んで
しまうような危ない橋も躊躇なく進んできたからこそそのスピードで
あつたのだ。

普段からそれなりに鍛えていたため幸いにも動けなくなるような
傷はなくここまで逃げおおせたが、街路に出れば追手にすぐに見つか
るだろう。

何よりも、メア自身がここから生き延びてやろうという気力がな

かった。

戻ったところで待っているのは何の感慨もない日々である。ならばいつそこで死んだ方が楽なのではないかという思考が先ほどから頭を離れない。

「はあ、疲れた……」

「あの、大丈夫ですか？」

「なんっ!？」

気が付いたら横にいた誰か、セーラに驚いたメアは思いっきり飛び退いた。

「せ、セーラ?」

「はい、セーラです。助けに来ました」

「そんな間柄じゃないだろう僕らは」

呆れたような表情でセーラを見るメアに対して、セーラはよくわかっていないのかきよとんとした表情を浮かべるばかりだった。

「助けるのに間柄が必要でしょうか？」

「君は違うかもしれないが、人は使えるエネルギーに限界がある。だからこそ、使う先を見極める必要があるのさ」

このまま行くとなし崩し的に助けられそうになる。このお人好しは絶対そういうことをする。そう判断したメアは立ち上がった。

「とにかく、もうほっといてくれ。僕はもういいんだ。色々疲れた」

「っダメです!!」

「っ!？」

次の瞬間、少なくともメアは絶対に聞いたことのない口調のセーラに外出用の服の袖を捕まれ、メアは引き戻された。

聞きなれないにも程があるセーラの逼迫した声にメアは思考が完全に停止し、されるがままに引き戻され、セーラに両腕をつかまれ、その場に抑え込まれた。

「し、死ぬのはほんとにダメです。ほんとに、ダメなんです」

「……セーラ?」

そこにいたのは、数秒前までそこにいた、圧倒的な力で全てを傲慢に救う聖女などではなかった。死に怯え、命を追われているメアの隣にいるのはどう考えても場違いな普通の少女がいた。絹のような金色の髪も、宝石のような翠色の瞳も、全てがその瞬間だけは輝きを失い、何かに怯え切ったただの少女がそこにいた。

「……とにかく、死ぬとか私の目が黒いうちは許しませんので、そのつもりで！」

「あ、ああ」

しかし、それも一瞬の事であり、メアが瞬きをしてみれば、先ほどの彼女はどこにもおらず、いつも通りのセーラがそこにいた。メアはセーラに手を引かれるがままに歩き始めた。

その瞳は何だ。何が君をそこまでさせたんだ。

その一瞬のセーラ表情によってメアの中に芽生えた好奇心は、メアにとって初めての熱を持った感情であり、後にメアが家を飛び出して聖女の大隊に加入するきっかけとなった。

――

何故だ、何故こうなった。

聖女の大隊随一の頭脳などと称されるメアだが、本人としては自身が知恵者である自覚や自負などは一切ない。

思考を巡らせるのは、観測した要素と要素を結び付け、区切り、全体を俯瞰する。そうすれば自然と解が見えてくる。

彼女にとって、策とはそういうものだった。

だからこそ、盤外からの一手は彼女にとって致命打となりうる。

「我が何者か、か……」

その背中から生えた負の魔力で構成された紫色の翼が羽ばたく。

何の防備もしていなければ並の者はそれだけで吹き飛ばされそうなほどの魔力の奔流が聖女の大隊を襲う。

「愚問。答えるに値しない」

それは、紛れもなく彼女だった。髪は黒く、瞳は赤い。彼女からはおおよそかけ離れた色合い。だが、きつと世界が白黒だったならば、外見上は彼女とその間に何の差異もないのだろう。それほどまでに2人の顔だちは瓜二つだった。

であるにもかかわらず、それが纏う雰囲気は、彼女の物とはまるで真逆だった。

「私は、私だ」

思いあがっていた。自分たちは彼女のために戦えるのだと。彼女の力になれるのだと。

彼女がいなければ、今頃路傍の石になっていたかもわからない烏合の衆であるにもかかわらず、煌びやかな称賛を浴びたから、鮮烈な戦場を駆け抜けたから、何かできるかもしれないと勘違いしていたのだ。

それらは全て、彼女の栄光を間借りしているにも関わらずだ。

「宣言しよう。大地を滅し、光を滅し、今より、私は世界を終わらせる」
その思い上がりは、最悪の形で結実することとなった。彼女の腕の中で力なく横たわるセーラと、瓜二つの何かという形で。

『……正気ですか、セーラ』

「え、何ですかそのリアクション」

夜警の者以外は皆寝静まった聖者の大隊の隊舎。ちよつとした城程度の大きさがあるその建物の最上階の最奥部という、隊員的には警備やセーラを敬つてのそれと思われるゆえに断りにくく、セーラ的にはいちいちアホみたいに長い廊下を歩いて地味に長い階段を降りな

ければ外に出れないため普通に不便な聖女の寝室。

魔道具を使えば問題なく通話ができるのでは？ という伝言魔法を使った通信が当たり前すぎたために気が付かなかったセーラは、町の外にエインヘリヤルの身を潜ませる際に通信魔法が込められた赤色の宝石を渡しておいたのだ。

無事問題なく起動した宝石経由での通話にて、宝石から聞こえるエインヘリヤルの声には多分の呆れが含まれていた。

「そんなにダメですか？ 光聖女VS闇聖女 く光と闇の果てしないバトル〜」

『もうやめてください、そのサムいB級映画みたいなタイトル聞かなくて頭痛くなってきました。めまいがひどいです。あと吐き気も』

「そんな言います？」

作戦はこうだった。

既に、セーラ曰くセーラよりもよほど有能である聖女の大隊は魔晶核が時間停止魔法に覆われて今か今かと復活の時を待っていることに気付いている。

だが、如何に彼女達が有能とは言えども、あの時間停止魔法が元々彼女らの大事な大事なセーラのものであり、エインヘリヤルもろとも負の魔力に染め上げられて解除寸前などは、セーラが絡めばIQが3になる彼女達に気付けるはずもないのだ。

とどのつまり、タイムリミットの宣言役が必要だ。

セーラはまず無理だろう。そもそも何で知っているんだという話であるし、芋づる式にやらかしに次ぐやらかしがバレて失望され、見放され、物乞いまで堕ちてちよつとお見せできない展開まつしぐらだ。少なくともセーラはそう判断した。

だからこそ、おあつらえ向きにバッチリ負の魔力に染まっているエインヘリヤルの出番である。

そう、エインヘリヤルは言うなれば、死に際に魔晶核が覚醒したことよって自身を守る衛兵として、そして何よりやがて己が宿る依り代として作り上げた魔晶核が最後に生み出した最大最強の魔物。魔

晶核が持つありったけの負の魔力を死に際にもぎ取った聖女の魔力（約半分）を使つて作り上げられた器に注ぎ込むことで生み出された闇の聖女。

彼女は宣言する。私を生み出したこの世界への宣戦として、今より7日後、一撃を以て世界を滅ぼすと。

そうして、一度は終わったかに思えた聖女と仲間達の世界の存亡をかけた最後の戦いが幕を開けるのである！ 劇場版とかでありそう。「良いじゃないですか。あなたを自然に登場させつつ、タイムリミットもバッチリ宣言できる完璧な作戦ですよ」

『思いつきり私にヘイト集中するじゃないですか！ 素直に自分のやらかしを反省して「私が悪かったです、こちらは私の分身のエインヘリヤルさんです」の1つ言えないんですか!?!』

「言える訳ないじゃないですか！ あなたミナトさん達をキレさせたらどうなるか知らないんですか！ 明日の朝日とかまず拝めませんよー！」

『だったらなおさら何でこんなになるまでほつといたんですか!』

「ごもつともですよ！ すみませんねえダメな聖女で！」

しばらくそんな感じで、言い争っていた2人だったが、そんな不毛な言い争いが続くはずもなく2人はひとしきり言い合った後に気まぐずい沈黙が流れていたが。

『……………あ』

「何ですか、名案でも思い付きましたか？」

『気が変わりました。良いですよ、その作戦で』

「はい？」

『私に、良い考えがあります』

いや不安しかねえよ。

セーラはそう思ったが、なんかこの案が通りそうな雰囲気だったので言わないでおいた。

心なしか弾んだ足取りで、その女性は聖女の大隊の本部の廊下を歩いていた。

薄茶色のウルフカット、切れ長の目、そしてさながら一国の王子であるかのような豪華な服装から、全体的に男性的な雰囲気を感じさせる彼女はれっきとした女性であり、聖女の大隊の第二席を務める傑物。メア・シユナイダーである。

ミナト、テレジア、そしてメアの3人が、聖女の大隊においてセーラの次に位の高い3名であり、実質的な隊の指揮はこの3名によって行われることが多い。

彼女が廊下を歩いていると、前方から見慣れた女性が歩いてきた。ミナトだ。

「もどつたよ、ミナト」

「ああ、おかえりメア。長期間の遠征で疲れているところすまないが――」
「話はテレジアから聞いている。時間はそう多く残されていないだろうか?」

メアが得意げな顔をしながら頭二つは大きいミナトの顔を下から覗き込むような形で見据える。ミナトは少しばつの悪そうな顔をした後に咳ばらいをして喋り始めた。

「なら良い。段取りは出来ているな?」

「段取りと言っても、やる事なんてテレジアが有効な手立てを見つかるまでの時間稼ぎだけだ。僕に出来る事なんて、手掛かり探すと、余計な茶々が入らないように場を整えるくらいだ」

「十分だ」

メア自身の主な役割は作戦立案であり、他勢力との交渉なども、メアの領分であった。

2人は早歩きで会議室に向かい歩きながら会話を進める。

「それよりも、調べるなかで気になる情報が出てきた。どうにも、黒教会が水面下で動いているらしい」

「……何?」

黒教会。

世界各国で秘密裏に暗躍している宗教団体であり、魔物による現在の世界の破壊を目的として活動していた。いた、というのも、彼らにとっての神や偶像に近い存在は当然、その魔物を生み出す邪竜エンデであり、ひいては魔晶核であった。

当然、その魔晶核がセーラによって打倒されてからというものの、彼らは神を失ったに等しいため、かつては世界全ての国に根を張っていたとされる彼らの活動も下火になり、ここ一年は報告らしい報告すら聞かなくなっていたため自然消滅した、というのがメアの出した結論だった。

「まだ残っていたのか」

「まあ、人はそうそう縋っていたものから離れる事なんて出来ないさ。僕らだって同じだ」

いうまでもなく、聖女の大隊と黒教会は幾度となく衝突してきた。黒教会からしてみれば、魔物を撃滅すべく動いている聖女の大隊、並びにセーラは不倶戴天の敵であり、幾度となくセーラを討つために直接的なものから搦め手に至るまで、ありとあらゆる手段を使ってセーラを陥れようとした。言うまでもなく、大隊員からしても塵一つこの世に残したくない宿敵である。

不快そうに眉をひそめながら、ミナトは問いかける。

「信じる物も失われて、奴らは何をするつもりだ？ 魔晶核がまだ残存していることを調べられるほどの力はもうないだろう」

「そこが問題だ。恐らく、彼らは聖女の影と繋がっている」「何だと!？」

メアの発言に対して、初めてミナトは驚きの声を上げた。

聖女の影。

ここ一年ほど、各地で目撃情報が挙げられている。聖女と瓜二つの姿を持つという謎の存在である。その正体、目的、能力に至るまで何から何までが不明な存在である。目撃情報が上がった場所からわずかではあるものの負の魔力の残滓が検出されたことなどから、関連性を疑ったテレジアの指示の下、ひそかに調査が進められている。しかし、現状明確な被害が出ていない故に脅威と断定し、行動に移すこと

も難しく、魔晶核に1人で戦いを挑んだ時のように突発的な行動を起こしかねないセーラにもまだ報告されていない。

「まさか、紛い物とはいえセーラを次の偶像として祭り上げるつもりか!？」

「僕としても不快極まるが、だとしたら筋が通る。聖女の影が負の魔力を持っているなら、継るくらいの見境なさはあるさ」

心なしか、2人の歩調が早まっていく。

「……わかった、腸が煮えくり返るが受け入れよう。で、隊はいつ動かす?」

「いや、邪竜の顎につけたローテーションを崩したくない。こちらからは最低限の人員を割いて、基本的には国側に動いてもらうことにする。もう騎士団側に届け出は出したから、来月にでも動き出すはずさ」

「だから、お前はそういう話をする時には私かテレジアに話してからにしると……」

「残念ながら、時間は待ってくれないんだ。ここから依頼するとして書面1つ作るのにいちいち伝言魔法を使って口頭で行うなどアホらしくて僕が耐えられない」

2人がそんな会話を行っていた次の瞬間、

重苦しい音と共に、地面が大きく揺れた。

「ぐっ!」

「っ何だ!？」

彼女らがいる聖女の大隊の本拠地はそれなりに大きな建物であり、黒教会の襲撃に備えて堅牢な造りとなっている。たとえば陸竜の群れが通り過ぎたとしても内部、特に彼女らが今いる会議室やそれに近い部分では揺れをかすかに感じる程度だろう。

そこが揺れたという事は、それだけのことがあったという事だ。

「ミナト様! メア様!」

2人が外に出て状況を確認するべく来た道を引き返していると、慌てふためいた様子で隊員が駆け寄ってきた。

「何があった?」

「聖女様が……聖女様が!!」

隊員はパニックになっっているようで、半分泣きながらミナトに縋りついていた。

「つまらん、私であるにもかかわらずこの程度か」
「……………」

外は、惨憺たる様子だった。建物自体の被害は少ない。巨岩でもぶつかった様なクレーターこそできていたが、それ以外に被害らしい被害はない。

だが、そこで起こっていることは別だ。

「セー、ラ……………」

そこには、ボロボロの姿で倒れ伏すセーラと、そんなセーラを見下すセーラによく似た何かが立っていた。顔だちこそセーラと瓜二つだったが、その髪は黒く、瞳は血のように赤い。見間違えるはずもないが、影と呼ばれるのもわかるような気がする。そんな見た目だった。

セーラの方は、普段から身に着けているローブがボロボロに引き裂かれており、ところどころから血が流れていたが、遠目から見ても息絶えているわけではないようだったが、苦し気に呻いていた。

それは、ミナトにとっても、メアにとっても完全に未知の光景であり、その光景を理解するのに数瞬の時間を要した。

「随分遅かったな、もうすぐ終わるぞ」

だからこそ、それがミナト達の方を向き、目の前の光景を何とも思っていないと言外に告げている無表情でそう告げた時に、理性の糸が焼き切れた。

地面が爆ぜる音がした。ミナトが地面を蹴る音だ。

次の瞬間には、既にミナトはそれとの間合いを詰め切っており、剣を振りかぶり今まさに振り下ろさんとしていた。

不快な金属音が鳴り響き、それが持つセーラの物によく似た杖と、ミナトの剣がつかばぜり合う。

「っ……………」

「冷静だな。もう少し喚き散らすものかと思ったが」

「全く、だ!!」

ミナトが剣を振りぬくと同時に、それは大きく跳び下がりに間合いを取った。

「随分といいタイミングで来てくれたね。影風情にしては上出来だよ」

「…………ああ、私の事か」

ミナトとメアは、倒れ伏したセーラを守るように背に控え、メアがそれに向けて話しかけた。表面上は笑っているが、その目は一切笑っていないかった。

それは何か得心したかのように頷いてメアの方を向いた。

「随分と余裕だな。国程度の囲いで随一の頭脳があれば出し抜けると思っているとも?」

「まさか。で、何の用かな? 力を見せつけるために来たという訳でもないんだろう?」

メアの問いかけに対してそれは、少し考えこむようなそぶりを見せた後に喋りだした。

「…………まあ、それもあるが、もう一つある」

それはそう言い終えたかと思えば、メアにも、ミナトにも一切気づかれることなくメアの背後に移動し、セーラを担ぎ上げた。

「なっ!？」

「…………何をやる気かな?」

「動揺を隠す必要などない。安心しろ、2日程借りるだけだ」

「黒教会の戯言を僕が信じるとも?」

「…………お前たちの信じる信じないは、私にはどうでも良い事だ」

それは背中から黒い翼を生やしたかと思えば、それを羽ばたかせて浮上し始めた。

「宣言しよう。今より7日後、魔晶核を開放し、世界を終わらせる」

「……何を言っている?」

「言葉通りの意味だ。ではな」

「っ待て!」

羽ばたき始めたそれに対して、ミナトが弾かれたかのように跳びかかる。しかし、既に時遅く、瞬きした後にはセーラを担いだそれは彼方へと行ってしまっていた。

「セーラ!!」

ミナトはセーラを取り戻すべく追いかけて始めた。今から追いかけたところで間に合うはずもないが、メアとしては先ほどまで即座に斬りかからず、メアにそれと話をさせる時間を作っただけで、普段のセーラに対するミナトの様子を知っているメアとしては合格点を上げても良いくらいだった。

「……外壁付近の隊員に連絡、もう見えているだろうが聖女の影を追尾しろ。無理に追いつこうとせず、向かった方角を逐一記録しておいてくれれば良い」

『しよ、承知しました』

メアはあくまで落ち着き払った様子で懐から伝言魔法が込められた宝石を取り出して隊員へと指示を飛ばした後、ため息をついた。

「……クソ」

彼女が取引の場では決して発したことがないであろうその声を聴いている者は、そこには居なかった。

「何でメアから黒教会が出てくるんですか聖女の影って何ですかあなたひよつとして裏切ってますん? 身も心も結構笑えないところで落ちてません? ねえどうなんですかねえ!!」

「知りません知りません知りません!!」

一方そのころ、人など誰もいないような僻地に降り立ったセーラが
エインヘリヤルの方を引っ掴んで前後にブンブン揺さぶっていたの
はまた別の話。

4日目 誰も報告をしていないのである。

喉が渴いた。

空腹は耐えられる。

いや、別にずっと耐えられるという訳ではないし、普通に栄養が足りなければ人は死ぬのだが、少なくとも飢えは綿で首を絞められるような感じというか、デフォルトで栄養失調な体調がより悪くなるだけのため、そこまで恐れはない。死に至るまでに猶予があるのも良い。

だが、水が無くなるのだけはどうしても耐えられない。飢えよりもはるかに素早く体を蝕み、気が付いた時には死が目と鼻の先まで迫ってくる。

何よりも、飢えの時とは比べ物にならない程本能が警鐘を鳴らしてくる。そんな状態になっている時点でどうしようもない状況になっていることなど明らかだというのに、そんなこと構いなしに本能は警鐘をけたたましく鳴らし続ける。何もできない状況でその警鐘を聞き続けるのは、こたえるものがある。

「……………」

その時もそうだった、元々そこまで裕福な家庭の生まれではなかった。いや、普通に貧乏な家の生まれだったと思う。少なくとも、ともに男女の区別が体に出始めた頃には私が身売りをしなければならぬ程度には、貧乏だった。だが、何もかも失って足やら手やらが欠けた状態で、物乞いになって死んでいく人が当たり前なこの辺では、十二分に恵まれたほうだ。

『大丈夫よ、きつと黒竜様が良いようにしてくださるわ』

それは、お母さんの決まり文句だった。

黒い竜様が現れて、今の世界を燃やし尽くして、新しい世界へと連れて行ってくれる。

それは、きつと素敵なおとぎ話なのだろう。

実際、友達も、その家族もみんな信じていた。

けれど、私はどうしてもそれを信じることができなかった。

そんなに都合の良い救いがあるなら、それをもたらしてくる存在がいるなら、何故私たちは今こんなに救いようがない状態になっているのかと思わずにはいられなかった。

だからだろう、あの日、黒竜様が倒されたと世界中に知れ渡ったあの日、お母さんも友達もその家族も、皆がお祈りに使う黒い炎に身を投じる中、私だけはどうしても怖くて炎に身を投じることができなかった。

そうして、天涯孤独の身となった私は、その日その日で小金を稼ぎながら、行く当てもなくさまよい歩いて今に至る。

1人でも、何とか生きれる程度には自信はあったけど、この辺りの人達は殆どが黒い炎に身を投げてしまい、辛うじて維持できていた治安が崩壊し、お金を稼ぐどころではなくなっていた。

そうなってしまうては、力のない私に生きる術などあるはずもなく、かといって死ぬ勇気も出ずに泥を嚼りながら生きる道を選んで、結果としてこうして、かつての家だった場所でただ死ぬのを待つだけとなった。

体中から水が出尽くしたのか、喉が張り付くような感覚がして、息がまともに出来なくなる。

頭が急に重くなって、周りが雪山になったかのように体が急激に冷えていく。

ああ、やつと終わるのか。体の奥の方から広がる鈍い痛みと、まともを考えられない頭で、いやに落ち着いた様子でそんなことを考える。

「……………」

そんな私を、あの人が覗き込んでいた。

未だに、黒竜様は信じられないけれど、もしこの世界に神様がいたらこんな感じなのだろう。

星空を吸い込んだような黒い髪、宝石のような赤い瞳。

私はきつと、あの人に会うために生まれてきたんだと思う。

「……本つつ当に心当たりはないんですね」

「はい……」

人の寄り付かない活火山。その中腹にある洞穴にて、セーラとエインヘリヤルは身を隠していた。正座をするエインヘリヤルをセーラは見下ろしながら、腕を組んで聞いた。だす。

「そもそも、聞いてなかった私が悪いですけど、1年もほつつき歩いてる間何してたんですか？」

「それは……ふらふらと、行く当てもなくさまよい歩いてました？」

「何で疑問形なんですか」

セーラは呆れるかのようなため息をついた後にエインヘリヤルと向き合いながら、考えるようなそぶりを見せる。

「何かあるでしょう、何で1年間もほつつき歩いてたんですか」

「本当なんですセーラ。本当にぼーっと行く当てもなくさまよい歩いていたら1年経ってたんですってば」

「……本当ですんね？」

「ほ、本当です」

じつと睨みつけるセーラに対し、エインヘリヤルは壊れたおもちゃのように激しく頷く。

しばらくそうして見つめ合っていた2人だったが、セーラがため息をついたことを合図に2人の視線が一旦離れた。

「……まあ、わかりました。では、何故メアの口から黒教会なんて言葉が出てきたのか心当たりはありますか？ 聖女の影というワードは、ぶらぶら歩いていたあなたを見て誰かがそう呼んでも不思議ではありませんが、そちらは流石に見過ごせません」

先ほどまでの、怒りながらもどこか冗談の気配もあった口調とは異なり、今度のセーラの声は真剣そのものだった。それもそのはず、魔物を、ひいては魔晶核を信仰する黒教会は、当然魔物を撃滅したセーラとは浅からぬ因縁があり、セーラはともかくとして隊員が命の危険にさらされたことも一度や二度ではない。

「そちらに関しても、正直何のことやら。確かに、道中おどろおどろしい廃村で何人か行き倒れを助けこせしましたが、とてもそのような邪

悪なものに属しているとは」

「……ちなみにその村にこのような紋章はありませんでしたか？」

そう言つて、セーラは地面にねじれた線のみで構成された歪な紋章を描く。魔晶核の破壊（仮）によつて各地で殲滅された黒教会から最近発見された、自身が黒教会の信者であることを示すための隠し文字のようなものだ。

「……ありましたね」

「ありましたか」

「ありましたね」

「多分それですねえ!!!」

セーラはその場に突つ伏した。

「……ダメでしたか？」

「ダ……メというわけではないんですけど……ないんですけど!」

流星に損得勘定で人助けをダメだと言えるほどセーラは割り切れてはいないが、それはそれとしてせつかくの因縁を断てるチャンスだったことにも変わりはない。

「……で、その助けた方々はどうしたんですか？」

「特に何も、治療をして、空腹の場合は食料を与えてあとは手近な町まで連れていき、あとはそのまま……」

「……~~~~~!!」

セーラは飲み込んだ、色々と言いたいことをまとめて飲み込んだ。これに関しては、エインヘリヤルのことを責める気は全くなかった。エインヘリヤルが持っているのはエインヘリヤルとして彼女が生まれた時点でのセーラの知識のみだ。それ以降にセーラが知つたものに関してはエインヘリヤルは知りようがない。たとえセーラが同じ環境に置かれていたとしても同じことをすると考えられたからだ。

「ふう、落ち着きました」

「セーラ、ストレスを飲み込んだことを落ち着いたというのはあまり良い事では」

「ちよーっつと黙つてて貰えませんかねえ!!!」

セーラは、そういつた後に頭を抱えた。

「どうすんですかこれ……もう2日空けるって言っちゃいましたよ」

「……信じましょう、ミナト達のことを」

「あなたシリアス顔すれば何言っても許されると思ってませんか？」

「そのような事は決して」

妙にキメ顔でそんなことを言うエインヘリヤルに対して、セーラは
ようやっと本当に落ち着いたのかゆつくりとため息をついた。

「……起こってしまったことは仕方ありません。とにかく、この2日
が勝負です。術式の作成と、作戦の準備を進めましょう」

「はい、セーラ」

そう言い終わった後、2人はそれぞれの作業を始めた。

「……エインヘリヤル」

「何ですか？」

「……絶対成功させましょうね。劇場版光聖女VS闇聖女 2人は聖

女でマックスHURT」

「……仕返しします？」

――――

「……進捗はどうだ」

「おいおい、寝ろと言っただろう。決行するときには先陣切るのは君な
んだからな」

「寝れるわけがないだろう……」

聖女の大隊の拠点に備えられたテレジア専用の研究室に、目元に色
濃い隈を作ったミナトが入ってきた。セーラに本当の意味で忠誠を
誓って以降、セーラの傍に仕えるにふさわしくあるようにと初めて自
分の見目にも気を使うようになったミナトとしては珍しい事だった。
テレジアもまた目元に色濃い隈を作っているが、自分のことなど棚に
上げてあきれた様子でミナトに話しかける。ミナトはどこか苛立つ

たかのような口調で返す。

昨日の一件にて、ミナトは魔力と体力の限りセーラを連れ去った聖女の影を追いかけ続けたが、当然、弱っているとはいえセーラを倒して連れ去って見せたような者相手に追いつけるはずもなく、魔力も体力も尽きた体を無理やり引きずって帰投した。

テレジアの役割が研究開発であるように、メアの役割が交渉であるように、ミナトの役割は戦場にて先頭に立ち、セーラの剣となり盾となる事である。そんな彼女に今できる仕事は、はつきり言ってしまう存在しない。英気を養う事こそが、最も重要な仕事といえるだろう。

それでも休めなかったことから、ミナトにとって昨日の一件がどれだけ腹に据えかねたことなのかがわかるだろう。

もちろん、テレジアとてミナトの気持ち分からないわけではない。セーラの真似事をした何かが負の魔力を纏い、ましてや黒教会の手先となってセーラを拉致したなどと、よくもまあそこまで癩に障ることができたものだと感じすら覚えるほどである。

「調査の方はどうだ」

「ああ、やっぱりあれは負の魔力を持っている。残存量と、セーラを打倒した出力からして、黒教会の奴らのように物にまとわせる形で使っているとは考えにくい。魔晶核や魔物と同じように、そもそも負の魔力を持って生まれたと考えた方が納得は行く」

「……それは本当に人間なのか？」

「まあ、十中八九違うだろうね。かと言って、候補らしい候補も挙げられない。正直情報不足としか言いようがない」

「そうか……」

テレジアがそういうしかないのならば、どうしようもないという事だろう。ミナトはそう思っただけで納得することにした。

「だが、正直あれが黒教会に従っているとも思えないのもまた事実だね。もしあんなのを手駒にしたなら、まず真っ先に邪竜の顎に行くだろう。黒教会の残党なら、あそこに何かがあってもなくても聖地だ何だと言って奪いたがるに決まっている」

「じゃあなおさらあれは何なんだ」

ミナトは片手で頭を抑える。そもそも情報が少なすぎる。相手はセーラを打倒できる存在である上に、戦闘を見ていた者からの情報も、あまりにも両者の動きが速くてろくに目視できなかつたというものばかり。本音を言えば今すぐにもでも隊を構成して打って出たいが、相手の天井どころか手札もろくに見えない以上、打って出る訳にもいかないだろう。

「いないと思ったら、こんなところにいたんだね……2人とも酷い限」
「メアか、どうだった」

2人が言葉もなく黙って、それぞれの作業に戻る中、研究室に入ってきたのはメアだった。余所行き用の豪華な装飾が施された軍服を纏っていることから分かるように、昨日の騒動を国側に説明してきた帰りであった。

「別に、そこまで難局という訳でもないよ。僕達は元々能力だけはある厄介者弾かれ者鼻つまみ者の集まりだ。聖女を奪われた今の僕たちは言うなれば聖女という飼い主をさらわれた狂犬のようなものだ。好き好んで噛みつかれに行く酔狂な輩なんて、今のこの国では生き残れない」

聖女が救った途端、正しくあることが求められるようになったこの国ではね。

そう言って、メアは手ごころな椅子に腰かけて2人を見据えた。

「当たり前だが、あと6日というあれが提示したカウントダウンは国民には伝えないことになった。正誤すら分からない情報なんてどうしようもないからね」

メアは足を組みながら滔々と語る。

「で、ここからが問題だ。伝えない以上、大規模に国側の部隊を動かすのは難しい。何せ事が急を要しすぎている。確実に終わらせる方法が見つからない限りは僕たちが動くしかない」

「……そうか」

「何、今国の中枢にいるのは聖女の勝ち馬に乗り慣れている連中が大半だ、邪魔が入らないと思えばそう悪い話でもない」

足を組みなおしたメアが、続けて喋る。

「聖女の影の情報も集めてみたが、こちらに関しては成果らしい成果はないね。辛うじてそれらしい情報が、辺境の町でとらえられた黒教会の残党らしき者が語った黒竜様の御子という言葉くらいだ」

「……エンデの子供？」

「とはいえ、これも確度の高い情報ではない。せいぜいが投げ所を失っておかしくなった狂信者の戯言止まり。それこそ、あの影が魔晶核の生まれ変わりなどでもなければあり得ないことだ」

「……いや、あるかもしれない」

テレジアが何かを思いついたかのようにそのあたりを歩き始めた。

「仮説に過ぎないが」

テレジアはそう前置きをしたうえで話し始めた。

「負の魔力には正の魔力を侵食する効果がある。さながら正の魔力を食らうかのように。だからこそ、負の魔力は通常の魔法に対して特攻ともいえる効果を持っており、それを物質にまとわせる技術の独占に成功していた黒教会は規模の小ささに対して大きすぎる影響力を持っていた」

テレジアは手元に、負の魔力が纏わされた結晶を

テレジアは聞かせる気があるのかないのか分からない早口でまくし立てる。

「恐らくだが、セーラと戦った際に、セーラの魔力を負の魔力で以て侵食したんだ。そしてそれをむしり取りながら戦い、それでもなおセーラに勝てないと察した時、死を装って自分自身である魔晶核を覆い隠し、そして端末を用意した。自身の復活に備えた尖兵とでも言うべき存在を、あいつが知る限り最も強い存在を写し取ってね」

「セーラの魔力が半減したことこの理由にもなる。魔力を根元から負の魔力に侵食され、それをそのままむしり取られたんだ。正常に魔力を回復できなくなってもおかしくはない」

ひとしきり喋り切ったのか、テレジアは今考えていることをまとめるためかその辺にあった書類の束を引っ掴み、凄まじい勢いでそこに

メモを取り始めた。こうなってしまうとテレジアがセーラ以外にはまともに会話に応じなくなるのは、ミナトとメアの間では共通認識だった。

メアは1つため息をついた後に、肩をすくめてミナトの方を向いた。

「どうする？ 僕達置いてかれちゃったけど」

「テレジアがこうなったという事は9割方当たりなのだろう。根回しの方は任せる」

「了解」

1人の世界へ旅立ってしまったテレジアを残し、メアとミナトは研究室を後にした。

「……けど、それだと何故わざわざエンデはセーラを連れ去ったんだろう？」

「何？」

「理論の分野は専門外だから分からないが、現状だとエンデのあの宣戦布告の意味が分からない。今もなお魔晶核は邪竜の顎で時間停止の繭に閉じこもっている」

2人はしばらくの間考えながら廊下を歩いていたが、ふとミナトが思いつくとともに驚愕の声を上げる。

「……まさか、セーラの魔力を全て奪い取るつもりか！」

「つあれは勝利宣言ってことか、流石に笑えないね……っ！」

魔力を半分奪い取る事が出来たという事は、もう半分も奪い取ることが可能であるという事。そうした先に生まれるのは、完全に負の魔力に染まり切ったセーラによく似た何かである。当然、打倒できる存在などいるはずもない。それに魔晶核が乗り移ってしまえば、世界など容易く崩壊させられるだろう。

ミナトの声に対して、メアが焦りの声を上げたことがその確実性が高いという事の証明でもあるだろう。

「私は今すぐ出せる部隊を連れて奴が消えた方角へ向かう。残りは任せた！」

「ああ、頼んだよ」

「言われるまでもない！」

そう言い残して、ミナトはすさまじい速度で走りだした。結果として、メアが1人、廊下に残される形になる。

「ふー……」

ミナトにあとは任せると言われたが、メアがここに来た時点で、メアは聖女の大隊が独立して好きに動けるよう根回しを終えていた。

とどのつまり、今のメアにはやることが無かった。

深いため息を1つついた後に、廊下の壁へ背を預け、その場に座り込んだ。

「セーラ……僕たちはそんなに頼りないのかい？」

やることが無いと、下手に賢いばかりに、余計なことを考えてしまふ。

何故僕たちに教えてくれなかったのか。

何故君は僕に助けて欲しいと言ってくれなかったのか。

何故君は誰かを助けるばかりで助けられようとしなのか。

「……ダメだ、考えるな」

まるで自分に言い聞かせるかのように、メアは首を横に振って立ち上がった。

とてもではないが、その聖女様、自分のやらかしをごまかすために東奔西走してるよとは言えない雰囲気である。

5日目 細部は練ってないけどまあヨシ!

少女にとって、あの人と一緒に歩いた旅路は、例え数日間の道のりであったとしても夢のような日々だった。

前を見れば、いつも美しいあの人が歩いている。

この人の近くにいれば、危険なことは何も無い。

少女にとっては、それだけでも人生の中で最も特別な時間となりえたのだ。

整った目鼻立ち、夜をそのまま切り取ったかのような漆黒の髪、夜空に輝く星のような赤い瞳、生まれてこの方神など信じたことのない少女が、いるとしたらこのような姿かたちをしているのだろうと確信するほどには、それは美しかった。

「……………」

彼女は、何かを喋るようなことは殆どなかった。ただ、もはや歩けない程に弱り切っていた少女を背負い、行くあてがあるのかないのかもわからない状態で、無人の荒野をただ歩く。

道中、異様な程に魔物が寄ってきたが、少女を背負う彼女は何事もないようにそれらを剣の一振りで薙ぎ払う。

「すごい……………」

少女にとつて、日常とは死と隣り合わせのものであり、遠出をした際に魔物と出会おうものなら、運が悪かったの一言で人生が終わる存在であった。

それが、抵抗らしい抵抗すらできずに塵と化していく、少女からしてみれば、夢でも見ているような気分であった。

少女はその短い旅路の中で、幾度となくその女性に問いかけた。何故そんなに強いのか、その剣はどこで手に入れたのか、何故そんなに綺麗なのか、何故助けてくれたのか。結局、彼女がその問いかけに答える事はなかったし、そもそもその旅路を通して、彼女が何かを喋るという事は終ぞなかった。

けれど、少女に不満はなかった。もちろん、彼女と言葉を交わしたかったというのは紛れもない本心ではあったが、言葉にせずとも優し

い笑みが、傷つけないように触れてくれる手が、彼女の優しさを言外に示してくれたからだ。

「……………」

「あ……町……」

そうして歩き続けて数日のうちに、少女の目に町が映った。少女がいたような、明日生きられるかどうかも分からないような荒んだ町ではなく、しっかりと人の営みを感じる事ができる町だった。少なくとも、真つ当にお金を稼ぐことさえできれば、生きていけるか分からない、などといった事態にはならないだろう。

「あっ……………」

「……………」

すると、彼女は背負っていた少女を降ろした。その意味を理解できない程、少女は鈍感ではなかった。

理由の分からない救済は、ここまでだという事だ。

「い、嫌です、私も連れて行ってください……」

「……………」

少女は彼女に縋りつくが、彼女は悲しそうな顔をしながら首を横に振るばかりであった。

少女には、彼女についていくための口実は何も無い。そもそも、何故自分が救われたのかもまるでわからないのだ。にもかかわらず、ここまで助けてくれた恩がありながらもっと寄せとねだり続けられるほど、少女は強くはなかった。

それでも、それでもなお縋らずにはいられない。それほどまでに少女にとってこの数日間の旅路は、得難いものであったのだ。

「……………すみません」

「え……………」

初めて少女が聞いた彼女の声は、そんな謝意を孕んだ声だった。彼女の美しい容貌にふさわしい、澄んだ声色だった。少女の顔に、初めて彼女の声を聞けたという喜びと、それが拒絶であるという絶望が入り混じる。

彼女は、自身の黒髪につけていた星座らしき意匠が施された赤い髪飾りを外すと、少女の髪に取り付けた。

「きつと、大丈夫です」

「え……っ」

困った様な笑顔を浮かべながら、彼女は少女の髪を撫で、そんな言葉を告げた。少女がその意味を尋ねようとした次の瞬間、強い風が吹き、思わず少女は目を瞑った。

次に目を開いたとき、彼女は幻だったかのように姿を消していた。先程まで少女の目と鼻の先にいたというのにもかかわらず、まるで全てが夢だったかのように少女は感じた。

しかし、少女の髪に付けられた髪飾りと、少女の手に握られたこれまでの旅路で幾度となく彼女によって振るわれた黒い剣が、これまでの旅路が夢ではなかったことを何よりも証明していた。

「……っー」

少女は、自分の腕ほどの長さのその黒い剣を抱きしめた。刃に肌が食い込み、血が流れるのも構わずに強く抱きしめた。そうすると、彼女のことを強く感じられる気がしたから。

黒い剣の影響か、少女の身体を明らかに痛み以外の何か負の魔力が蝕んでいくという感覚があった。しかし、それがより少女に強く彼女を感じさせた。

「……………はあ」

一体いつまでそうしていたのか、気が付けばあれだけ強く抱きしめて生まれたはずの切傷は塞がっており、少女の身体はかつてないほどに生命力に満ちていた。その由来が何であれ、彼女が与えたものは、間違いなく少女を生かしたのである。

「……………行かなきゃ」

そう言っつて、少女はその黒い剣を大切にそうに携えながら、町へ続く道を歩き始めた。

彼女と一緒にではない旅路に価値は見いだせないけれど、彼女が救ってくれた命をここで終わらせるのだけは、何があっても許してはいけ

ない気がしたから。

かつての少女のように、本当は救われたいのに誰からも救われず、救いの手を待っている存在もいるはずなのだから。

この後、1年とたたない内に、1人の少女によって、各国は陰ながらに深刻な損害を被る事になる。

弱者が虐げられることを、少女は決して良しとしなかった。たとえそれが必然なものであったとしても、それがかつて世界の脅威であった黒教会の残党であつても構うことなく少女は弱者を救い続けた。

かの黒竜を彷彿とさせる黒い剣を振るい、ひたすらに弱者を救いながら突き進む。

少女は語る。

かつて、私は剣など振れない弱者であつた。明日の生も不確かで、ただ死にながら生きるだけの弱者であつた。しかし、私は救われた。救う価値など、爪の先程も無かつたにも拘らずだ。ならば私も救おう。虐げられる弱者を、救う価値すら見出されなかつた真の弱者を救おう。それこそが、私が彼女に返せる唯一の恩なのだから。

その姿はかの聖女よりも鮮烈であり、救われた者からは敬意を、損害を被った者からは畏怖を込めてこう呼んだ。

黒竜の御子と。

「知りません、何それ……こわ……」

その後、完全に良心で救つただけであり、その後少女がどうなったかなど知りもしなつたエインヘリヤルはこう語つた。

――

時は流れて現在、エインヘリヤルが救つた少女、ノワールは、かつては黒教会の聖堂として使われていた小さな廃墟にいた。廃墟とは

いっても、使われなくなつてからさほど時間がたつていないこともあつてか、おどろおどろしさこそあれど内部は清潔に保たれており、既に国の捜査の手が入つた後だからか内装などはほぼ全て取り除かれていたため、雨風が凌げれば文句はないノワールにとっては申し分のない拠点だつた。

「御子様……1つ、お耳に入れたい事が」

「だから、それはやめろと……何ですか？」

やけにかしこまつて話しかけてくる男性、かつて行き倒れていたところを救つた男に対してノワールは眉をひそめながら問いかける。

かつて貧民だつたとは思えない程、ノワールの容姿は美しく、かつて痛み汚れていた髪や肌には今や傷1つなく、雪のように白い肌とわずかな月明かりを照り返して輝く銀色の髪は首にかかる程度で切りそろえられており、よく手入れがされていることが伺えた。

ノワールは、その手に持つたかつてエインヘリヤルが使つていた黒い剣とその体を流れる負の魔力で以て助ける相手を選ばずに救つてきた。ほとんどの者はそれ限りで別れる事となつたが、一部の者はノワールについていきたいと願ひ出るものもいた。最初の内は断るつもりだったが、1人よりも多くの者が救える、という言葉に惹かれ、なし崩し的に彼女を信奉する者達が彼女についていくこととなつたのだ。

「まだ確かな情報ではありませんが、かの忌まわしき聖女が、何者かによつて攫われたとのことですよ」

「……そうですか」

ノワールは男の言葉を聞き、考えるような仕草を見せたが、正直な所、ノワールにとつて聖女とは有り体に言つてしまえばどうでも良い存在だつた。助けた者の内のいくらか、かつて黒教会に属していた者が口々にかの聖女をさながら諸悪の根源のように語るため、ノワールは適当にそれに合わせているだけだ。

もちろん、救世の聖女などと声高と語られているのに、ならば何故私を救つてくれなかつたのか、と思わないでもない。だが、もし聖女に救われていれば、あの気高く美しいかの人に出会う事はなかつた。

ならばむしろ、救ってくれなくて感謝すらしている。それがノワールにとつての聖女だった。

「……よろしいのですか、聖女が連れ去られた今、かの国は浮足立っているものと考えられます。今こそ、黒竜の御子たるあなた様こそが、真の救世主であることを世に知らしめるべきかと」

男は、さながら激情を抑え込むかのように不自然なまでに落ち着き払った口調で滔々とそう告げる。ノワールは冷たい視線を向けながらも諭すように喋りかける。

「履き違えてはいけません。私はあくまで、救われない者を救うだけです。救世主などになるつもりはありません」

「ですが、我らのような脆弱な者の為に立ち上がったあなた様を、彼らはあるうことか聖女の影などとまがい物呼ばわりしているのですよ!？」

「誰がどう呼ぼうが構いません。私は、私のやりたいことをやるだけです」

語気を荒くしながらそうまくしたてる男に対して、ノワールは淡々とそう言ったかと思えば、何事もなかったかのようにその場を後にした。

「はあ……」

聖堂内に用意した自室。かつての黒教会がどういった組織だったのかを教えてくれる痕跡が伺える部屋に用意された簡素なベッド、かつてのノワールからすれば上等すぎるそれに身を投げた。

「何で、こうなつたんだろう……」

最初は、やりたいことをやれていたと感ずる。道行く先にいた誰か、かつての自分と同じようにあとは死ぬのを待つだけの誰かを助ける事が出来ていた。

しかし、徐々に自分に賛同する者が増えていった。正直、黒竜様なんて信奉していた者達に崇拜されるのはあまり良い気分がするものではないし、ましてや黒竜の御子などと呼ばれるなど、あまり良い気分がするものではなかった。

思い返すのは、もう1年ほど前になる自身を救ってくれたエインヘリヤルの事。ノワールは彼女の名前も出自も何も知らない、けれど、ノワールがこれまでに生きてきた人生の中で最も幸せな数日間。あなりたいと思ったわけではない。けれど、彼女に救われた命で何をすれば良いかを考えた先に今の自分があるのもまた事実だ。

だが、救えば救うほど、分からなくなる。結局のところ、ノワールは明日の生き死にも分からない貧民としての暮らししかしてこなかった。間違えても万物を救おうとするような聖人の思想など持ち合わせていないし、とてもではないが救いたくないような者もいた。黒教会の残党など、その最たるものだった。

しかし、かといって切り捨てることもまたできなかった。それは、救う対象を選ぶという事であり、かつてノワールが憧れた彼女の好意からは著しくかけ離れる行為だからだ。

「何故、私を救ったんですか……?」

ノワールのその声は、ノワール以外誰もいないその部屋に空しく吸い込まれていった。

「進捗はどうですか……」

「ダメです」

「……はあ」

一方、そんなエインヘリヤルは、国から遠く離れた山中に存在する洞穴にて、セーラと共に徹夜でのデスマーチに興じていた。

2人が行っていたのは、別次元へと負の魔力を送り込むための術式を込めた杖の作成である。

セーラが時間を縫って考えていた爆発寸前の魔晶核への対策は、魔晶核ごと消してしまうという方法である。これならば、魔晶核の爆発を抑え込めるかどうかなどという事は考えなくて良い上に、被害も何

事も無ければゼロで済む。まさに理想的な解決法といえるだろう。

しかし、この世界には転移魔法などといった便利な魔法が地味に存在しないことから分かるように、この世界における魔法は基本的に次元が云々とか概念が云々とかそういういった壮大な事は出来ない。唯一の例外が通常の魔力と負の魔力がぶつかった時に対消滅を起こす反応である。この対消滅はタチが悪いことに周りのものまで巻き込んで消え去ってしまう。これに魔晶核を巻き込んでしまおうという作戦である。

当然、そうなれば相当な規模の通常の魔力と負の魔力をぶつける必要がある。しかも、対消滅を起こすのはある程度の勢いで魔力同士がぶつかった時であり、そうでない時にはエインヘリヤルのように負の魔力が正の魔力を徐々に侵食していつてしまう。だからこそ人類は負の魔力に長年悩まされ、生まれつき持っていた神気で負の魔力を無意識下ではねのけていたセーラが無双できたのだが、それはまた別の話である。

そんなわけで杖を振ると同時にクソデカ正の魔力弾とクソデカ負の魔力弾を衝突させ、対消滅を起こさせる術式を杖に込めようという話なのである。しかし、そもそも正の魔力の負の魔力の関係自体がここ最近のテレジアの研究やエインヘリヤルの実体験を通じて初めて知ったことであり、どれくらいやれば魔晶核を吹っ飛ばせるのかもエインヘリヤルの目分量であるため、何もかもが手探りの状況である。

当然、そんな状況で進捗など芳しいわけもなく、しかも常時魔力を使いながらあれこれやっている状態のため、セーラは軽い疲労困憊状態にあった。

「セーラ、あなたは帰ってください」

「……………え？」

流星にそろそろ休憩を入れなければかえって効率が悪いだろうか。セーラがそんなことを思っていた時、エインヘリヤルがそんなことを言い出した。休憩ならまだ分かるが、帰れとはどういう事か、疲れからまともに頭が回らず、頭をかきながら間抜けな声を上げる。

「もうそろそろ2日経ちます」

「嘘ですよね!？」

エインヘリヤルからの無慈悲なデッドラインの宣告にセーラが弾かれたように外に出ると、嫌みかと言いたくなるほど眩しい太陽が向こう側の山の間からコンニチワと顔を出していた。エインヘリヤルはミナト達に向けていった。2日ほど借りるだけだと。その場で「まあ2日もあればやれるでしょう」と考えたエインヘリヤルによるその超適当なデッドラインが来てしまったのである。

「……うわぁ」

「わかったら早く出てってください、約束守らなかったら私が殺されます」

「……もう少し作業してから」

「ダメです。約束破ったら私は何されるか分かりません」

「誰のせいだと思ってるんですかガバガバ期限締め切りしおってからに!!」

セーラはその場に突っ伏して慟哭した。エインヘリヤルからはスルーされた。

もう少し粘ろうかとも思ったが、これ以上聖女に対して色々重い聖女の大隊を放っておいたら何をしでかすか分からないというのもまた事実。セーラはトボトボと洞窟の出口へと向かう。

「あ、セーラ、少し待ってください」

「はい?？」

「術式の構築に必要なのでこの結晶に魔力を込めてください。ありつたけ」

「鬼!？」

セーラを呼び止めてそんなことを言っただけのけるエインヘリヤルに、セーラは食って掛かるが、理屈はわかる。この後、より多く術式の構築に時間がかけられるのはエインヘリヤルだ。そして、当のエインヘリヤルは正の魔力を持たない。正の魔力と負の魔力をぶつける術式なのだから、正の魔力が無ければ始まらない。厳密には術式の構築自体は問題ないが、テストなどを考えれば、正の魔力があったほうが制作速度が上がるのは間違いないだろう。

「さき、グイっと」

「ん、んいつ……」

エインヘリヤルは魔力を込めるための結晶をセーラの頬にぐりぐりと押し付ける。完全に目が据わっているため、余計怖い。エインヘリヤルにとつては慣れない連日徹夜での作業は、知らず知らずのうちにエインヘリヤルをハイにしていたのだろう。

結論から言えば、セーラはその結晶にありったけの魔力を込めた。込め終わるや否や、「終わりましたか、終わりましたねでは帰ってくださいハリーハリー」と外に放り出された。

一瞬戻ろうかとも思ったが、洞窟の方を見れば入り口が崩落していた。恐らくは、彼女が戻ってこれないようにするためだろう。あれを吹っ飛ばすだけの魔力を使うなら帰る際の身体強化などに使う方が有益であり、通信用の魔法が込められた宝石も城に置いてきてしまったから声をかける事も出来ないだろう。

「はあ、帰りましょうか……」

セーラは疲労困憊で体力ヨワヨワの魔力スカスカの過去類を見ないクソザコ聖女となって帰路に就いた。

精鋭揃いの聖女の大隊を以てしても追いきれないほどの速度で、まあまあ時間をかけてたどり着いた広大な荒野を、セーラはここまですんで飛んできた方角だけを頼りに歩き始めた。

「…………おじやん。」

どうやって帰るつもりなのだろうか。知る者は誰もいない。

6日目 休暇は大事と存じます

「隊長、森林地帯が見えてきました」

「魔力感知器の感度を上げろ。経路が細分化されるだろうからな」
「了解」

ミナトは、えりすぐりの部下数名を率いて、忌まわしい聖女の影の手からセーラを奪還すべく聖女の影が飛び去った方向へと歩みを進めていた。既に2日程走り続けていたが、ポジションなどを用いて都度回復しているため、隊員に疲労の色は見られない。

大まかな進路は、ミナトが記憶している聖女の影が飛び去った方向を用いて推察しているが、流石にそれだけで追いかけるにはミナト自身も考えてはいなかった。

そこで使われているのが、負の魔力を感知する水晶だった。本来ならば魔物を探知し、負の魔力の残滓によって構成された経路などを探知して追跡するために使われるその水晶だが、現在魔物は基本的に邪竜の顎に向かうように動く傾向にあり、逆に言えばそれ以外の負の魔力の経路がある場合には何らかのイレギュラーである可能性が高いため、それを追うといった形で活用している。

「……………」

隊員の間には必要最低限の会話以外が交わされることはない。別に仲が悪いという訳ではない。むしろ、聖女という共通の価値観をもとに聖女の大隊の隊員は強い結束力で結ばれている。

だからこそ、口を開けば最悪の予想を言いかねない今の状況において、必要事項以外は喋らない方がそれぞれの為になるだろうことは、暗黙の了解であった。

「負の魔力の濃度が高まっています。近いかもしれません」
「全員スピードを落とせ、私が先行する」

探知を担当していた隊員が、若干の緊張を孕んだ声でそんなことを言った。

ミナトははやる心を抑えて隊員に指示を飛ばす。足音に細心の注意を払いながらの歩行に切り替わった隊の先頭を歩くミナトは、五感

をフルに活用して周囲の情報を一辺たりとも見逃さないように歩みを進めた。

最初に聞こえたのは、明らかに異常であることが窺える浅い呼吸音だった。

次に感じたのは、戦場に身を置いてすっかり慣れ切った血の香りだった。

そして、森林の中の少し開けた場所にて、浅い呼吸を繰り返しながら倒れている傷だらけのセーラと、それを覗き込むように佇んでいる銀色の髪の少女を見つけた。

――

喉が渴いた。

空腹は耐えられる。

いや、別にずっと耐えられるという訳ではないし、普通に栄養が足りなければ人は死ぬのだが、少なくとも飢えは綿で首を絞められるような感じというか、デフォルトで栄養失調な体調がより悪くなるだけのため、そこまで恐れはない。死に至るまでに猶予があるのも良い。

だが、水が無くなるのだけはどうしても耐えられない。飢えよりもはるかに素早く体を蝕み、気が付いた時には死が目と鼻の先まで迫ってくる。

何よりも、飢えの時とは比べ物にならない程本能が警鐘を鳴らしてくる。そんな状態になっている時点でどうしようもない状況になっていることなど明らかだというのに、そんなこと構いなしに本能は警鐘をけたたましく鳴らし続ける。何もできない状況でその警鐘を聞き続けるのは、こたえるものがある。

既視感を覚えるモノローグに身を蝕まれながら、転生して以来最大のピンチを迎えているのは、セーラであった。

「はあ……………」

彼女以外誰もいない荒野で、セーラは一人ため息をついた。

エインヘリヤルに締め出されて数時間、当初は魔力の回復を待つて滅茶苦茶な事をしてくれやがったエインヘリヤルを一発ぶん殴ってから帰ろうと思ったが、何だかんだ迫りつつあるタイムリミットに何しでかすかわかったもんじゃない愛の重い大隊の面々を放っておくという選択肢の方がよほど危険であるとして、少しずつでも歩きながら魔力の回復を待つことにした。

とにかく魔力がある程度たまつてしまえば、身体強化を行つてどんな距離だろうが一瞬で帰れる自信がセーラにはあつた。徒歩と比較したときのそれは、さながらジェット機であり、正直徒歩しか移動手段を持たない今の状態でいくら歩いた所で、誤差にすらならないだろう。

そうして歩き続ける事数時間、中々回復しない魔力、3日間飲まず食わずでの作業、ダメ押しとばかりに魔力を水晶に吸い取られて魔力がほとんど底をついたのが災いしたのか。

死ぬほど多忙な日々を送つていたとしても、基本的に格下との戦闘がほとんどであつたセーラにとって、闘いの日々であっても、危機というものは非常に縁遠いものであつた。

何が言いたいかというと、知らず知らずのうちに、かつてないほどにセーラは追い詰められていた。

「お……………」

突如、糸がぷつぷつりと切れたかのように、足がもつれたセーラはその場に倒れこんだ。気の抜けた声を上げたセーラは、呆然とした表情のままその場にうつ伏せに倒れたまま、動けなくなった。

セーラは立ち上がろうとするが、立ち上がろうとしても上手く踏ん張れずに再び倒れてしまう。

「えっ……………」

しばらくそんなことを繰り返した後に、セーラの顔が青ざめる。

あれ？ これひよつとしてそのまま死ぬ？

「はっ……はっ……」

呼吸が浅くなり、身体が小刻みに震えるのを感じる。

それは、転生してこの方感じたことのなかった死への恐怖。

「誰、か……」

乾いた喉からかすれた声を出しながら、地を這うようにして進む。

今や記憶として、セーラの転生前の記憶は殆ど残っていないにもか
かわらず、今なお色濃く残る自分が死ぬ瞬間の記憶。どんなに死にた
くないと願っても無慈悲に視界が暗くなり、寒く、鈍い痛みが全身を
包むあの感覚。

それは、セーラにとって唯一耐えられない物だった。自分のもとよ
り、他人に強いるのも本当は嫌だった。そうしないと自分が死ぬから
と思わなければ到底耐えられないそれを1つでも減らすこと。それ
がセーラにとって数少ない戦う理由だった。

嫌だ。ただでさえ死ぬのは御免なのにこんな死に方なんて冗談で
も笑えない。

自分のやらかしを隠すために一芝居打って、自分を心配してくれて
いるだろう優しい人々に嘘をついて、計画性もなく連れ去られたふり
をして自分の分身に罪を全部擦り付けて、結局対抗策は組めず終いで
締め切りに間に合わずにこうして荒野で1人行き倒れようとしてい
る。

順当では？ という思想が頭をよぎったが、それでも死にたくない
のは間違いないし、何よりも自分が死ねば世界が詰みかねない。その
一心で、喉の渇きや全身を襲い倦怠感に抗いながら立ち上がり、セー
ラは再び歩き始めた。

が、ありとあらゆる問題を暴力によつて解決してきたセーラから暴
力が奪われたセーラに気合いと根性で限界を突破するなどという芸
当ができるはずもなく、セーラの視界は急速に暗くなっていった。

(ま、ず……)

一応最後まであがいていたものの、セーラはそこで意識を手放すこ

ととなった。

「……………えっ」

次にセーラが目を覚ました時、そこはどことも知れない廃墟だった。おおむけの状態のまま視線だけで周囲を確認する。ボロボロの木材で構成された天井を見て廃墟だと断定したが、周囲を見ればしっかりと石造りの壁で囲われており、少なくとも雨風はしのげるだろう様子だった。

その反面、特に誰かがいるような様子はなく、生活の痕跡も見られなかった。誰がここまで自分を運んで来てくれたのかは知らないが、少なくとも目が覚めたら敵に捕らえられていましたなどという事はないだろう。

「いった……」

劣悪な環境で野宿をすることも少なくなかったセーラ的にも、流石に石畳の上にそのまま寝たことは無かったため、全身が痛むのを感じながら体を起こす。自分の身体を見てみれば、特に身ぐるみをはがされた様子もなく、かれこれ3日は着替えていない普段着代わりのローブを身にまとっていた。少なくともそこまで長い時間はたっていないのか、魔力はあまり回復してはいなかったが、これだけあれば帰る程度の事は出来るだろう。

兎にも角にも、ここがどこで、誰が自分を助けてくれたのかを調べなければならぬ。節々が痛む身体を魔術で治癒しながら、セーラは立ち上がった。

それにしても、

「し、死ぬかと思った……」

セーラは自身の身体を抱きしめながら、死ななかつたことへの安堵のため息を漏らした。自分のやらかしを隠すために誰にも秘密で行動し、徹夜作業を2日程したのちに帰る手段もろくに考えないまま帰路について野垂れ死にしかけるといふ間抜けにもほどがある事態を回避できたという事実が、セーラにとっては泣くほどうれしい事だっ

た。というか実際ちよつと泣いた。

「目が覚めましたか……」

「っ……」

すると、何の前触れもなくセーラのいる部屋に少女が入ってきた。この廃墟には似合わない白い肌と銀色の髪。セーラからしてみれば知る由もないが、ノワールというエインヘリヤルに助けられた少女であった。

だが、セーラにとって重要なのはそこではなくノワールが背負っていた黒い剣であった。

セーラにも見覚えがある、セーラが良く使っていた魔力で以て生成する白い剣。その2pカラーのような黒い剣を使うとしたら、セーラとしては心当たりなど1人しかいない。

(いやあれエインヘリヤルのですよね!?)

あの黒い剣にも、ノワール自身にも、そこまで強大なものではないが負の魔力が宿っていた。

訳が分からなかった。恐らくはエインヘリヤル自身も言っていた行き倒れていた人を救ったという話に出てくる人なのだろうが、それにしたって剣を渡す理屈が良く分からない。負の魔力が正の魔力を侵食するという事を知らなかったセーラならまだしも、当事者オブ当事者なエインヘリヤルが負の魔力100%の魔力生成剣を人に渡してどうなるかなんて予想できないはずがないだろう。

(え……ひよつとしてマジに裏切られてます?)

一瞬そんな考えが頭をよぎるが、目の前の少女が仮に黒教会の残党だとしたら今度は自分が何故生かされているのかが良く分からない。

セーラから見た黒教会は邪竜エンデとかいうヤベー奴を信仰しているヤベー集団である。当然邪竜エンデを倒そうとしている、とか属性的に正反対っぽいセーラは常に目の敵にされて襲われてきたため、悪い印象しかない。早い話が、セーラを人質にして聖女の大隊を根絶やしにしてやる! とかそういう理性が働く前に手が勝手に動いてセーラの首をキュツとする集団である。

「あなたが、助けてくれたんですか?」

「はい、行き倒れていたのよ」

セーラは恐る恐るといった様子で首をかしげながらノワールに問いかける。それに対し、ノワールは淡々と答える。

「……ありがとうございます？」

「何で疑問形なんですか」

「それは……何で助けてくれたのかわかりませんから」

ノワールは気に入らないとでも言わんばかりに鼻を鳴らしてセーラに近づいた。互いの息がかかる距離まで近づく。

「あなたが、私の憧れの方にとても、異様に、気味が悪いほど似ていたからです」

「あー……」

当然ノワールからしてみれば聖女とは黒教会の宿敵でこそあるものの、そもそもノワール自身が別に黒教会に入信しているつもりは微塵もなく、黒教会が聖女を目の敵にしていることは知っていても聖女がどういう者かもよく分かっておらず、顔すら知らないのだ。

（え、何ですかこれ、私試されてるんですか？ 泳がされてるんですか？ 怖い怖い怖い!!）

黒教会の残党が自分を助けただけでなく、恐らく彼女を助けたのであろうエインヘリヤルに似ているから助けたのだという。まるで聖女の顔を知らないと言わんばかりの論理。黒教会に限ってそれは絶対でありえないだろう。

実際ノワールは本当に聖女の顔など知らないしどうでも良いのだが、そんなことをセーラが知る由もない。

セーラはしばらくの間気まずそうに顔を反らした後に、聖女ロールをやる中で身についた人当たりの良さに特化した笑みを浮かべながらノワールに向き直る。

「そうでしたか。それでは、その方に感謝しなければなりませんね」

今セーラにあるのはせいぜいがここから帰るのに十分な魔力のみ。分かりやすく言えば、ここで狙いも戦力も何もわからない黒教会の残党とやり合う余裕はない。

故に、逃げ一択。ある意味当然の選択であった。

「これ以上ご迷惑をおかけするわけにもいきません。私はこれにて失礼いたします。このご恩は、いつか必ずお返しします」

「待ってください」

「……何か？」

そそくさと立ち上がり、その場を後にしようとするセーラだったが、それをノワールが呼び止めた。内心では滝のように汗を流しながらも、そこは伊達や酔狂でこれまで聖女をやってきたわけではないセーラ、表面上の笑みは崩さずにノワールの方を向いた。

「あなたによく似た人を、知りませんか？」

「……残念ですが」

「……そうですか」

当たり障りのない回答を返すと、それでノワールは納得したのかもはやいいう事はないと言わんばかりにセーラに向けていた視線を外した。正直、知ってどうするのか、セーラとしては非常に気になったが、いらない地雷を踏むリスクが大きすぎるため触れないことにして、そのままこの場を後にしようとした。

「これは、どういう事ですか？ 御子様」

そんなセーラの行く先を塞ぐ形で、その部屋の入り口に1人の男が現れた。黒髪を全て後ろに流し、冷酷そうな印象を与える鋭い目つきを丸眼鏡で和らげているその男、アレクシスは、ノワールに付き従う黒教会の残党だった。証拠に、若干汚れてはいるが、黒教会の幹部クラスが纏う法衣を身にまとっていた。

セーラは一目見た瞬間に確信した。こいつは残党だ。寝てる隙を見て首をキュツてやる（オブラートに包んだ表現）方の残党だと。

「……どういう意味ですか？」

「ふざけるのも大概にして頂きたい」

今にもつかみかからん勢いで額に血管を浮かべているアレクシスに対して、ノワールは本気で理解できていないのか、不思議そうな表情を浮かべながら首をかしげるだけだった。

「またいつものように行き倒れを拾われたのかと思えば、聖女を救う

などと、何を考えておられるのか」

「……聖女？」

「……っ」

ノワールが少々驚いた様な表情を浮かべながら、セーラの方を見つめる。

「我らが憎むべき宿敵！ 偉大にして深淵たるエンデを滅ぼした害悪そのもの！ この世界にとっての癌!! 毛の一本たりともこの世に残してはおけない塵屑！ 天罰が下り、無様に行き倒れていれば良いものを救うなど！ 正気の沙汰ではない！」

早くも抑えが効かなくなってきたのか、アレクシスは語気を荒げながら腰に帯刀していたサーベルを引き抜き、それでもってセーラを指す。次の瞬間には斬りかからんばかりの勢いに、セーラは思わず身構える。

「そう、ですか……」

一方、そんなアレクシスの怒号を受けて、しばらくの間呆然としていたノワールは、ため息をつき、セーラとアレクシスの方に向き直った。

「それでは、残念ですが、あなたとはここまでのようですね」

そして、そんなことを言つてのけた。アレクシスに向かって。

「………は？」

今度はアレクシスが呆然とした声を上げる番だった。先ほどまでの怒りはどこへやら、全ての感情が抜け落ちたような表情でノワールのことをじつと見つめていた。

「この方とよく似た、それこそ聖女のような方に、私は救われてここにいます。もしもそれをあなたが拒絶するなら、私はあなた方をこれ以上救う理由を持ってません」

「何を、言つて」

「さようなら」

そう言うと、ノワールはセーラの手をつかんで部屋を出た。

「ふう、ふざけるなあああアアアアアア!!!」

「走りますよ」

「え、ちよっ!」

部屋から、若干のタイムラグを伴って部屋から怒号が響き渡った。

今一つ、否、まるで状況を把握できていないセーラはノワールに手を引かれるがままに走る。内輪もめならよそでやってくれという気持ちでいっぴいだっただが、こんな聖女よりよっぽど聖女らしいノワールの前から逃げ出すと、本格的に大事なものを失う気がして逃げ出すことだけはしない状態であった。

「御子様! 一体何を考えておられるのですか!」

廃墟を出ようとするノワールとセーラの前に、先ほどのアレクシスが呼び出した、というよりは近くで控えていたのであろう護衛が現れて2人の道を塞いだ。

「すみません、邪魔です」

そんな護衛に構うことなく、ノワールは剣の柄で護衛を薙ぎ払った。護衛の身体がくの字に折れ曲がり、近くの壁に叩きつけられる。一応命こそ奪ってはいないだろうが、しばらく動けはしないだろう。

「ええ……」

「行きますよ、聖女」

とはいえ、ついさつきまで自分の部下だった連中にやる事では無くないか、と若干引いているセーラなどお構いなしで、ノワールは走り続けた。

――

「まあ……ここまでくれば大丈夫でしょう」

「はひっ……かひゅっ……くおっ……」

ノワールがセーラを引つ張りながら走り続ける事数時間。廃墟のあった荒野からはかなり離れた森林にて走り続けていたノワールはようやく止まった。廃墟を出た時には夜だったのに、今や日が昇りかけていることからもどれだけの長時間走り続けたのかが伺える。

ここで下手に抵抗しても面倒な事態になる予感しかしなかった

セーラは引つ張られるがままに走り続けたが、ノワールが人間を超越した速度で走り続けたため、セーラも自動的に魔力を使った身体強化をせざるを得ず、せつかくため込んだなけなしの魔力をほとんど使いきり、最後の方は殆ど引きずられるような形となった。森林に入ってから引きずられるような形だからかところどころで木に体を強かにぶつけた結果生傷まで出来ている。

ノワールが止まると同時にその場に倒れたセーラは今や顔面蒼白を通り越して青紫色になっており、呼吸のような何かを繰り返すともではないが民衆の前にはお出しできない聖女○となった。

「……何やってるんですか？」

「へあっ……待っ……息っ、出来なっ……！」

立ち止まってからようやくセーラの様子がおかしい事に気付いたのか、倒れたセーラを覗き込むような形でノワールが問いかけるが、息をするだけで精いっぱいの様子だった。

「……何をしている、貴様」

そのタイミングで、セーラにはとても聞きなじみのある、ミナトの声が聞こえた。

7日目 やせ我慢は身を滅ぼす

「……何を、やっている」

「……？」

傷だらけで、明らかにおかしい様子で倒れ伏すセーラと、それを覗き込む先日セーラを連れ去った聖女の影と同じ剣を持った少女。

ミナトに残った一握りの理性がその問いかけを放った。

当然、そんなことを知る由もないノワールは不思議そうな顔をしながらミナト達の方へと向き直る。

「すみません、どなたですか？」

だからこそ、当然、ノワールが放ったその一言はミナト達の理性を容易く焼き切った。

いの一番に駆け出したのはミナトだった。彼女の魔力が具現化したものである紫電がミナトの全身から迸り、地面にヒビを入れながら駆け出した。

仰向けに倒れていたセーラの視界の端に一瞬映ったミナトの瞳には、何の感情も浮かんでいないのにもかかわらず、それが特大の怒りの裏返しのように見えた。矛盾しているとしか言いようがないが、セーラには直感的にそう見えたのだ。

紫電を纏い振り上げられたミナトの大剣が、凄まじい速度で振り下ろされる。

常人ならば反応することすらできずに真つ二つにされるであろうその一撃は、ノワールによって辛うじて阻まれた。エインヘリヤルの特大の負の魔力によって構成された黒い剣を肌身離さず身に着けてきたノワールの身体は、既にかかなりの部分が負の魔力によって染め上げられており、半ば魔物のそれに近づきつつある臂力が無ければできない芸当だっただろう。

なお、「これを質に入ればそれなりのお金になるはずです」の意で黒い剣をノワールに渡したエインヘリヤルはそのような事を想定しているはずもない。

「あ、ぶないですね……！」

「何を、やっている」と聞いているんだ!!」

「ごつちのセリフです!」

流石にいきなり斬りかかれて平静を保てるほどノワールは戦闘経験が豊富ではなく、少々の困惑と多分の怒りと共にミナトを睨みつける。それに対して、ミナトはまるで聞く耳を持たないのか振り下ろした剣に込める力を強める。流石に大隊内においてセーラを除けば最強を誇るミナトの一撃を受け続けられるほどの膂力をノワールは持ち合わせておらず、怒り混じりの声を出しながらミナトの一撃を受け流す。

行き場を失ったミナトの斬撃が地面に直撃し、地面が裂ける。

「聖女様! ご無事ですか!」

「かつ……あつ……まつ……!」

(まず、い、まずいまずいまずい!!)

ミナトがノワールと衝突を起こす中、他の大隊員が弾かれたようにセーラの方へ駆け寄って傷だらけのセーラを助け起こす。

隊員からの回復魔法を受けながら、セーラは隊員に抱きかかえられてその場を離れる。必死に息を整えようとしながら、恐らくこの中で一番現在進行形で焦っているであろうセーラは思考を回す。命の恩人であるノワールに対して恩を仇で返すような真似など、ただでさえ小心者なのに今は魔力もなければ体力もない、鼻肩目に言つてカスであるセーラがそんなリスクを見逃せるはずもない。

早く声をかけたいのに、地獄のフルマラソン(引き回しの刑)を経たセーラの肺機能は一向に回復する様子を見せず、どんなに必死に呼吸をして酸素を供給してもまるで足りない、今の10倍はもってこいと言わんばかりに体が空気を要求してくる。

「待っ……あれ……止め、て……」

「ご安心を、あのような輩、我々だけで撃滅してご覧に入れます!」
(ちっつがう!!)

辛うじてプルプル震える指で今なおすさまじい剣戟を繰り返すミナトとノワールを指さしてからからに乾いた喉からかすれた声を出す。しかし、悲しい事にセーラを見た目上はぼろきれのようにされて

「アイツ セーラ様 キズツケタ ○ス」以外のことがほぼ考えられなくなっているため、セーラの思いが通じる事はなかった。

「やめてください！ 誤解です！」

一方、いきなりメンチ切られて斬りかかられたノワールはミナトの斬撃を受けて躲し、時に牽制の為に切り返ししながら、防戦に徹していた。先程までの挙動からして、セーラ、即ち聖女が彼女たちにとって何よりも大切な存在であることは、ノワールにも分かった。ならば、確かにどうもここまで連れまわす中で木々に体をぶつけたのか知らないが若干負傷させたとはいえ、セーラを助けた自分がこんなことをされる謂れはないだろう。

まさか聖女の大隊の面々がセーラがまともに傷ついている姿を見たことがなく、ノワールが今ブンブン振り回している剣が、セーラを連れ去った宿敵（誤解）と同じ物だとは夢にも思わないノワールは距離を取りながらミナトに呼びかける。

「ほざけ！ そんな汚らしい偽物を振り回しておきながら！」

「……は？」

当然セーラを連れ去った者と同じ剣を振り回す少女の言葉などミナトが信じるはずもなく、ミナトの剣から紫電が迸り、ミナトの叫び声と共にミナトが剣を突き出すと紫電がノワールへ向けて放たれた。

だが、偶然にもノワールの逆鱗に触れた。

「偽物、ですか……」

ノワールの黒い剣から負の魔力が黒い瘴気のようになりながら迸り、ノワールが軽く剣を振るだけでミナトの紫電がかき消される。

「チツ……！」

「偽物、ですか……！」

ノワールの語気が徐々に強くなっていく。誰彼構わず救う中で、当然、罵詈雑言を浴びせられた経験はノワールにもあった。余計なお世話だと手をはねのけられることもあったし、ノワールの力を目当てに取り入ってやろうという者も多くいた。勘違いだったとはいえ、黒教会の残党などはその典型だ。

それに対してノワールが怒ることはなかった。人間とはそういう

ものだと考えていたし、誰彼構わず救うという事はそういう事であると自覚していたし、何よりも、なりふり構わず生きようとするその姿はかつての自分自身と何も変わらないと感じていたからだ。

だが、^{フィンヘリヤル}彼女だけは、そんな路傍の石に過ぎなかったノワールを救った彼女を貶められることは、ノワールにとって初めての事であり、到底許せるようなものではなかった。

徐々に強くなつていくノワールの語気に応じるかのように、ノワールの黒い剣から迸る黒い瘴気が勢いを増していき、やがては黒い炎となつて剣にまわりついた。ノワールが一度剣を振れば、黒い剣はさながら生き物のようにのたうつてミナトへと襲い掛かる。

「そうだ、偽物だ。負の魔力の根源でありながら、聖女の形を真似る。それを偽物と呼ぶはず何と呼ぶ！」

対するミナトも伊達や酔狂で事実上の聖女の大隊のトップにいる訳ではない。彼女の魔力が変質した物である紫電を全身から放ち、黒い炎を払いのける。

ノワールは先ほどもまでの困惑は消え失せ、ミナトに対して蔑むような目つきで見据えながら剣を向ける。

「そうですね。救う相手を選び、栄誉名声に酔うのが本物であるのなら、あの方は偽物で大いに結構です！」

「知った風な口を利くな！」

互いの逆鱗をひとしきり撫できり、元から怒り心頭だったミナトと、完全に別件で怒り心頭となったノワールが、互いに殺意をたぎらせながら剣を振る。

最初こそ互角に見えた両者の戦いだったが、徐々に経験の差が如実に始まる。ノワールが受けに回る場面が増え始める。元々負の魔力を意のままに操れるという特異性と、負の魔力に染められたことで半ば魔物のそれと化しつつある身体能力で押せば人間相手であれば苦戦などするはずもないノワールにとって、まともな強敵との戦闘は初めてであり、それが仮にも国内最高戦力の1つである聖女の大隊の隊長が相手となれば、その展開も無理はないと言えた。

「おおあー!!」

「くっ、ああー！」

それまでの間合いからさらに一步踏み込み、半ば一回転するような形で体ごと回すような形のミナトの横一文字の斬撃が放たれる。回避が間に合わないと思ったノワールはとっさに剣でそれを防ぐが、不安定な体勢で防いでしまったため踏ん張る事が出来ず、ミナトはそのまま剣を振り切ることでノワールを吹き飛ばした。吹き飛ばされたノワールは木を数本へし折りながら吹き飛んだ後、木に背中を強かに打ち付けてようやく止まった。

「ぐっう……！」

「はあああ!!」

「しまっ……！」

ノワールの表情が苦悶に歪むが、そんなことはお構いなしにミナトは飛ぶように駆け、ノワールとの距離を詰め、上段から思いきり剣を振り下ろした。

これまでとは比べ物にならない勢いの紫電を纏ったそれは、反撃を考慮していない、その一撃で終わらせることを前提としたものであり、故に先ほどまでの者とは比べ物にならないほどの一撃であり、

「っはあ……はあ……良かつ、た……」

故に、それを防いだのはセーラであった。数分ではあったが、聖女の大隊の面々から受けた回復魔法。それを以て回復させたなければ、その魔力を振り絞り、自分を半ば吹き飛ばすような形でノワールとミナトとの距離を詰めた。当然剣などという有意義なものを生成する暇などあるはずもなく、ただでさえみそっカスの魔力を右手に集中、バリアを形成して防いでみせたのだ。

当然、先ほどまで呼吸困難&魔力切れ&引き回しの刑で鼻根目に言つてカスと化していたセーラがそれを防ぎきるなどできるはずもなく、バリアを一点に集中させ、辛うじてミナトの紫電を左右に流し、防ぐというよりは受け流すような形で凌いだといった方が正しいだろう。当然、受け流せたのは紫電のみであり、ミナトの渾身の斬撃はセーラのミソツカスバリアを容易く引き裂いて手に深々と食い

込み、肘の手前まで切り裂いていた。

「セー、ラ……う？」

ミナトの目が見開かれ、目の前の光景を見つめることを拒否するかのようにミナトの視界がブレる。セーラが間に挟まって来たことを半ば反射で察知したミナトがとつきに振り下ろす剣を押しとどめたからこそ、この程度で済んだのであり、本来であれば綺麗に真つ二つになったセーラだったものが辺り一面に色々まき散らしながら転がるはずなのだが、そんなことミナトにとってはどうでも良かった。

自分の剣が、一番守りたいものを傷つけた。その事実が、ミナトの思考を完全に止めていた。

(いいつつてええええあああああああ!!!
死ぬ死ぬ死ぬ無理無理無理もうヤダ帰りたいどこにいいいい!!!)

「この方は私の命の恩人です。たとえ負の魔力に侵されていたとしても、傷つける事は許しません」

思えば、エンデ相手ですらまともに手傷を負ったことのないセーラにとつて、これは生まれて初めてといえる大怪我でありそれが右手が肘までぱっかり二つに分かれている(先ほどのバリアに魔力全部使ったため自力回復不可)というのはいささか重傷が過ぎた。内心では七転八倒しながらも表面上は厳格な表情を浮かばせ、聖女然とした雰囲気漂わせながら、ミナトに向かって語り掛ける。

「ち、が。セーラ、わた、し、は……」

「これくらい大丈夫です。助けに来てくれて、本当にありがとうございます」

普段の聖女の大隊の隊長として凛とした態度でふるまう普段のミナトからは信じられないほど狼狽し、浅い呼吸を繰り返しながらあどずさる。例えば自身の数倍はあろうかという巨体を持つ魔物の一撃を受けても手放すことが無かった大剣があつさり手から零れ落ち、地面に突き刺さった。

セーラはそんなミナトに対していつも通りの花が咲くような笑みを浮かべながら今なお大量の血を流し、だらりと力なく垂れ下がった右腕はそのままに無事な左腕を使ってミナトを抱きしめ、子供をあや

すようにミナトの背を叩いた。

ひとしきりミナトが落ち着くまでそうした後、遅れて駆け付けた他の隊員が真つ二つに割れたセーラの右腕を見てこの世の終わりのような表情を浮かべるがそこはすかさずセーラが説明をして事なきを得た。

「あなたも、私が至らぬばかりにすみません。そういえば、名前を聞いていませんでしたね」

「……ノワール、です」

セーラは隊員から応急処置を受けながら、ノワールの方に向き直り、いつも通りの笑みを浮かべながら問いかける。セーラのことを信じられないものでも見るような目で見つめるノワールは、半ば放心状態のままミナトに問われるがままに答える。

「良い名前ですね。ノワールさん、怪我は大丈夫ですか？」

「……いや、あなたの方が」

「これくらいなんてことありません」

ハツと我に返ったノワールの手が少し持ち上がり、治癒魔法を受けているものの今なおバックリ割れて血を垂れ流しているセーラの右腕を指さす。セーラはなるべく見ないようにしていた自分の右手をちらつと薄目で確認した後、張り付けたような聖女スマイルを浮かべて答える。ローブの下では滝のような脂汗が流れているのだが、顔には汗一つ浮かんでいないいつも通りの聖女スマイルである。ここまでくるとなんかもうそういう別の生物である。

「よろしければ、一緒に来てくれませんか。助けていただいたお礼がしたいです」

「え、つと………お願い、します」

そんなセーラからの提案に、ノワールは一瞬ためらうかのような様子を見せるが、セーラの手当てをしていた隊員達の無言の圧力を受けた。ここで断ったらセーラは許すかもしれないが隊員の面々から何をされるのか分かった者では無い事。当面の行くあてがなかったことから、ノワールはゆつくりと頷いた。

「ありがとうございます！………！ それでは、私はこれで――」

本当に嬉しそうな笑顔で、そう言い、聖女は失血やら疲労やらダメージやらでかなりギリギリだったところを辛うじて根性で繋ぎとめていた意識を手放した。

「っ聖女様!？」

その後の蜂の巣を突いた様な騒ぎは、言うまでもない。

――

「でき、ました……」

洞窟の奥、杖に最後の宝石をはめ込み、魔晶核を次元の彼方へ吹き飛ばすための術式を込めた杖の作成が完了したエインヘリヤルは大きく伸びをした。全身が魔力100%で構成されたエインヘリヤルに疲労などという概念は存在しないはずなのだが、それでも精神的な部分では終わらないかもしれないという焦燥があったため、解放感もひとしおだろう。

「連絡、来ませんね……」

緊張の糸が切れたからか、ふと、エインヘリヤルはセーラからの連絡がない事に気が付いた。帰ったら連絡して進捗を確認すると言っていたはずなのだが、エインヘリヤルの手元にある通信用の魔法が込められた水晶は一向にうんともすんとも言わない。

当然、エインヘリヤルやセーラのふぎけた規模の強化魔法を用いれば、ここからセーラが住んでいる聖女の大隊の隊舎は、半日ほどあれば余裕を持って到着できる。既に2日は経過しているにもかかわらず一向に連絡は来ない。あれだけ報連相の欠如で痛い目を見ているセーラが自分の連絡を忘れるとはエインヘリヤルにはとても思えない。

「何か、あったのでしょうか……」

いくらセーラがこの世界で最強の存在とはいえ、2日間ぶっ通しで術式を構築する作業をした後にそのまま這う這うの体で帰路につかせたのはまずかっただろうか。

「いえ、いくら疲れているとはいえそのような……」

徐々に、セーラに対する心配が募っていくが、そもそもいくら2日ぶつ通しで術式を構築する作業をしていたとはいえ、エンデを倒す際には1ヶ月以上ワンオペで寝ずの遠征をおこなったことすらあるセーラである。それこそ魔力が底をついて疲労困憊のクソザコ聖女にでもならない限りはそんなじよそこらの敵に後れを取るとも思えない。

エインヘリヤルがそんなことを考えていると、先ほどまでセーラのありつたけの魔力が込められていた、今や込められた魔力全てが杖に移されたため抜け殻となつている水晶が、エインヘリヤルの視界の端をころころと転がっていった。

割と疲労が募っていたセーラがありつたけの魔力を込めてその場を後にした水晶が、転がっていた。

「……おつと!!?」

エインヘリヤルは弾かれたように完成した杖だけを持って弾かれるように洞窟を後にした。

— · — · — · — · —

「諸君、嘆かわしい事に、かの御子は既に我らとは袂を分かった。愚かしくもかの忌まわしき聖女の軍門に下つたのだ」

ノワールとセーラがその場を後にしたかつての黒教会の拠点にて、アレクシスは各地から寄せ集めたおよそ100人弱の教徒たちを前に厳かな口調でそう告げた。既に伝えられていた一部の教徒は反応しないが、今初めて伝えられた教徒の間に狼狽が伝播する。アレクシスはそれに動じる様子を一切見せずに、続けざまに言葉を紡ぐ。

「だが、これは我々の、黒竜の終焉ではない、始まりなのだ」

「かの御子は聖女の軍門に下つた以上、かの偉大なる黒竜エンデの御子であるなどと、万に一つもあるはずもない。にもかかわらず、我々

が見まごうほどの黒き神気をあの小娘が纏っていたのは何故か」

「実在するのだ。黒竜の核、魔晶核は、今なお、この世にとどまっておられるのだ！ あの小娘は所詮、偶然手に入れた魔晶核からの恩恵を、さも我が物のように振り回していた愚物にすぎん！」

芝居がかったアレクシスの口調は、留まるところを知らず、徐々に勢いを増していく。

「そのようなものをあの汚らわしい大隊風情が見過ごすことなどありえない。故に、候補も搾れるというもの。そして先刻、我々は発見したのだ！ 魔晶核の封印されし地を！」

徐々に上がっていく教徒の熱気を煽るかのように、アレクシスは矢継ぎ早に言葉を紡ぎだす。

「場所は忌まわしき聖女と我らが黒竜が戦いを繰り広げた黒竜の顎！ 今なお負の魔力が色濃く残る最後の地！」

「もはや言葉は不要！ 我々は黒竜を豚女共の封印から解き放ち黒竜の恩恵と、復活を遂げる偉大なる黒竜エンデと共に！ 世界を終焉へと導く救世主となるのだ!!」

「ここに、最後の聖戦を宣言する!!」

アレクシスの宣言と共に、教徒が熱に浮かされたような叫び声をあげる。

「開戦は明日！ 総員、信仰を捧げよ!!」

その知見が正しいものかどうかなど問題ではない。彼らにとって何よりも必要なのは、燃え上がる薪であり、燃えるのならば何でも良い。それはある種の世界の真理であり、だからこそ、断崖へつながら坂道を狂喜しながら転げ落ちる彼らのような人種も存在しうるのである。

まあ、その薪は忌まわしき聖女のやらかしとやらかしをごまかそうとして発生したやらかしによって構成された物なのだが、知らない方が幸せになれる場合が多いのも、世界の真理である。

8日目 土台は念入りに

禁忌指定術式、言葉を選ばず言えば、何らかの要因でそれ以上の使用や術式の改良は疎か、他者へと情報を受け渡すことすらも禁止される術式である。

禁忌指定を受ける条件は種々様々だが、最も多いのはその術式の要するコストに対するもたらせる被害の甚大さなどだ。極論ではあるが、辛うじて魔法を使えるだけのそこらの一般人が命を代償に払うようなデメリットがあったとしても町一つを吹き飛ばせるような術式が世に広まれば、秩序の崩壊は目と鼻の先だろう。

その反面、禁忌指定を受けるような術式を生み出したという事は、その時代において他とは隔絶した力量を持った魔術師であるという証であり、禁忌指定の術式を生み出した証としてその身に刻まれる赤い竜の爪の刻印は、魔術師にとってはこの上ない名誉の印でもある。名誉だけでなく溢れんばかりの富も齎されるそれは、魔術師にとっては大願の1つともいえた。

揃いも揃って最終的に使用を禁じられるほど危険な術式の探求に明け暮れるというのはどうなのかという見えるかもしれないが、禁忌指定を生み出せる魔術師はほんの一握りであり、そこに至るまでの過程で培われた技術は様々な事に活かされるため、技術の発展に一役買っているもの事実である。また、そういった一握りの天才の存在を把握し管理する事、他国にそういった理外の存在がいるという事を示す意味でも、禁忌指定は機能していた。

しかし、テレジア・アレムガルドにとっては、そんなことはどうでも良かった。

物心ついた時から神童として魔術師としての道を生きてきた。本来であれば一生で1つ、魔術師が禁忌指定を受けることを大願としているにもかかわらず、一般的に魔術学院を卒業する年齢の頃には両手の指では足りない禁忌指定術式を作り上げたテレジアは、まさしく神童と呼ぶにふさわしい存在だろう。

当然、彼女の元には使っても使いきれないほどの富と、少しでも魔

法に通ずるものであれば畏敬の念を持って道を譲る名声が齎された。まだ少女といえる年齢の頃に、テレジアはその領域に至っていた。

だが、テレジアは何一つ満たされることなく、魔術の研究に邁進し続けた。

テレジアが魔術の道を追い求める理由はただ一つ、未知を既知にする行為が心地良いから、という、同じ道を征く者にとっては噴飯ものの理由だった。

己の世界に欠けていたピースを埋めていく行為、これは、あまりのも周囲と隔絶した才を持っていたが故に他者とのつながりに意味を見いだせなかった彼女にとっての唯一の娯楽であった。

しかし、彼女による禁忌指定術式が20を超えた頃。行き過ぎた名声や富は畏怖へと変わりつつあり、やがて彼女はこの世に必要なない災厄のような禁忌指定術式を次から次へと生み出すことから「天災」と呼ばれるようになり始めた。彼女からしてみれば、勝手に禁忌指定しておいて何をという話ではあるが、それでも彼女の存在そのものが国にとって利を上回る害になり始めた時、国は秘密裏に彼女を排除する方向へと動き始めた。

反面、テレジアを手中に収める事が出来たならば、それはもはやこの国の、否、この世界の魔術の主導権を握ったと言っても何ら過言ではなく、表では声高にかの天災の排除をと叫んでいたとしても、裏ではどうにかしてテレジアを手中に収めようとするものは後を絶たない。

決まった場所に居を構えると襲撃されるのが当たり前になり始めた頃。テレジアはそんな自身を手中に収めようとする権力者に寄生するような生き方を選び始めた。

研究する場所に貴賤はなく、そこに自身さえあれば研究をつづける事は可能だと考えたからだ。

そうして権力者に取り入って思う存分研究を続け、権力者からの干渉が目立ち始めたら容赦なく手を切る日々。

「テレジアさん、ですね！ よろしくお願ひしますー！」

テレジアにとって、セーラはそんな幾度となく乗り換えてきた宿主の1人でしかなかった。落ちこぼれたかつての出世頭のミナト・デア・フォーゲルワイデ。没落した貴族の跡取り娘にして才児でもあったメア・シユナイダー。そんな二人を侍らせながら、破竹の勢いで成果を上げる変わり者の彼女に興味を抱いたのも理由の一つかもしれない。

変化はすぐに訪れた。

テレジアを以てしても、彼女は这个世界から外れた存在だった。底の見えない魔力、千変万化する術式。テレジアが必死に探しても探してもまだ未知が出てくる。

未知を見つけ、仮定を立て、実証して未知を既知にする。この単純な工程がセーラに関しては何で当てはまらない。未知を見つけ、それに対する過程を建てようとする間にまた新しい未知が出てくる。

テレジアにとって、セーラは宝の山だった。叶うならば、彼女の身体を身体機能から魔力的なものに至るまで漏れなく解き明かし、ありとあらゆるデータとサンプルを手元に置いておきたい。無論、セーラに人生を文字通り180度変えられた者ばかりである聖女の大隊においてそんなこと許されるはずもないのだが、それでもセーラの近くに常に身を置ける聖女の大隊から離れるという選択肢は、既にテレジアには存在しなかった。

「テレジアさん、外で物資の搬入をしているので手伝ってください」

「私に肉体労働をしると……？」

「そうです、早くしてください」

人間としてのセーラがテレジアから見えてどうかと言われれば、良く分からない。そもそもまともな人付き合いなど生まれてこの方望むことすらなかったテレジアにとって、口先だけでなく真正銘対等に接することのできるセーラという存在は何もかもが異物と言えた。慣れ親しんだ、という意味で言えば、セーラがテレジアを聖女の大隊に引き入れた際に警戒心を隠そうともしなかったミナトやメアの反応の方がよほど慣れたものであった。

だが、楽しそうに未開の地を歩き、その地の植生や動植物に目を輝

かせる彼女の姿には親近感を覚えるものがあつたし、生まれて初めて対等に接し、接されることができる彼女と共にそういつた日々を送るのは悪くない、と思えた。

だからこそ、邪竜エンデとの戦いを終え、魔物との戦いの為に東奔西走することもなく、聖女の大隊の本部で自室にて書類業務をこなす、時には催事や行事に出席する。そんな、テレジアからしてみれば死んだように生きているも同然の生活を、セーラが当然のように享受し始めた時、テレジアは自分の目を疑った。

事実、問いただしたこともある。

何故こんな退屈極まる生活を当然のように受け入れるんだ。これまでの暮らしとは対極の、予想外も未知も存在しない乾燥した日々だぞと。

セーラは何を聞かれているのか分からない。とでも言わんばかりのきよとんとした表情を浮かべた後に、困った様な苦笑いを浮かべてこういった。

「皆さんと、こうして一緒に生きていられる。それだけで、私は十分幸せです」

セーラは当然のことのようにそう言って見せた。本当に満ち足りたような笑顔でそういつて見せた。

テレジアは言葉が出なかった。まるで、あの時探求に目を輝かせていたセーラを、他ならぬセーラ自身に否定された気分だったからだ。

当然、彼女が世間一般で言うところの聖女であるような気味が悪いほどの優しい心の持ち主であることは知っていた。だが、それでもあの時探求に目を輝かせていたセーラもまたセーラの一面であるはずなのだ。それを抑え込んで、こんな生涯を送らせることが本当に彼女の為になるとでも思っているのか。あれだけ多くの物をセーラから受け取り、あまつさえ事実上の魔物の根絶による恒久的な平和などという人類の歴史が始まって以来誰も成し遂げなかった偉業を成し遂げた者に対する仕打ちが、籠の鳥として飼い殺すことだとも言うのか。

そんな思いを抱えながら、常に傍に誰かがいると言っても過言ではないセーラと偶然2人きりになる機会があつたある日。テレジアはセーラに問いかけた。

ここは息苦しい、穏やかな生活なんて耳触りの良い方便で、君にとつては自由なんて1つも無い。一緒に出ていかないかと。

セーラは冗談だと思つて笑つたが、テレジアにとつては殆ど本気だつた。この誘いを断られたら、彼女とはもう縁を切り、権力者に寄生する日々に戻ろうとも考えていた。

だが、今でもテレジアは聖女の大隊の一員としてセーラの傍で、セーラに仕える生活を続けている。否、テレジアは問題ない。今なおセーラの異常な魔力量などをはじめとした神に選ばれたとしか言えない身体のは明かしきれていないし。悲しい事にテレジア自身はテレジアだけあれば魔術の探求は出来る。それこそ四肢をもがれたとしても、彼女が死んだように生きる日々などありえない。

だが、彼女は、セーラはどうなのだろうか。そのことを思えば、テレジアにとつてセーラの元を離れる選択肢などありえなかつたのだ。

これでセーラがその時幸福の絶頂に居なければ素敵な駆け落ちエピソードもあり得たのかもしれないが、デスクワークをしながらクツキーをポリポリかじるセーラはそのことを知る由もない。

――――

「テレジア、容体はどうなっている」

「悪くはなっていないが、良くもなっていない。あれ以上魔力を奪われる前にセーラが自力で脱出して見せたんだろうね。良くも悪くもこれまで通りの回復量だ」

「そうか……」

ミナトがテレジアの研究室に入る。普段ならば魔術に関係する寶石やスクロールが所狭しと散らばっているテレジアの研究室だったが、今はそういつたものが全て端に乱雑に押しやられ、空いたスパー

スに置かれた寝台に先ほどミナトと共に帰投したセーラが横たわっていた。

ただでさえボロボロの状態だったセーラはわずかな魔力を振り絞ってミナトとノワールの衝突を防いだ。聖女の影から逃げ出すのに魔力をほとんど使ったのか、ミナトもテレジアも初めて見るほど魔力が枯渇しきっていた。それに加えて、ミナトとノワールの攻撃を同時に受けた際のダメージも残っている。外傷こそそれほど大きくはないものの、体内はミナトの魔力による雷と、ノワールの闇の魔力の奔流の激突の中心にいたため、一部は雷で焼き切れているし、一部は負の魔力によって浸食されかけているという散々な様子だった。

「全力は尽くすが、それは医療班にやらせればいい。それよりも、私の主戦場はあの影をどうするかだ」

「ああ、魔晶コアトランサー転換機だったか……」

テレジアとミナトが視線をセーラから外す。二人の視線の先にあったのは、大きな黒い水晶のようなものが無数にはめ込まれた刃渡り2mはあるかという大剣だった。

「だが、本当に可能なのか？ 負の魔力の侵食を利用して逆に魔晶核を支配下に置くなど」

「計算が正しければ、まあ正しいんだが、理論上はこの星が丸ごと負の魔力に侵食されたとしてもこの星ごと 支配下に置けるよ。まあ、魔晶核がどんな化け物だったとしても、暴走させて自滅に追いやるくらいはできるはずさ」

「冗談でも笑えん」

大剣にはめ込まれた無数の黒い水晶は大剣の刀身に刻まれた赤い線で結ばれており、回路のような様相を呈していた。

負の魔力は正の魔力を侵食する性質を持つ。それは、正の魔力を自身の支配下に置く行為であるともいえる。ならば、魔力の支配権を保ちつつ水晶にため込まれた使用者の魔力を負の魔力に染め上げさせ、魔物をはじめとした負の魔力由来のものに干渉することができれば、ずであるという考えから生まれた物であり、そのアプローチからテレジアの才覚を以て練り上げられたそれは、魔晶核を統治下におけるほ

どのものとなっていた。

「で、どう使えばいい?」

「魔物なら雑に突き刺せば大剣を通して支配が可能になるが……これを使えるのは恐らくセーラだけだよ?」

「……は?」

「そんな怖い顔しなくても良いじゃないか」

さも当然のことのように言っただけで、セーラは明確に殺意の籠った目つきでテレジアを見据える。テレジアは肩をすくめておどけるような仕草を見せた後に喋り始めた。

「あくまでこれは支配権を獲得するための装置だ。権利を持っていたとしても能力が無ければ支配など出来るはずもない。ここで言う能力というのは魔晶核などという星にも匹敵する魔力量を操作するに足る経験、そして実際に操りうる力量の事だ。人の歴史が始まって以来、そんな能力を持っているのはセーラしかないと思うよ?」

「っ……はあ」

ふざけるな、そう口に出しかけた所をミナトはすんでの所で抑え込んだ。セーラに対して不純というよりは危険といえる思想を持っているテレジアは、ミナトと信頼を築くまでにかかなりの時間を要したが、それでもその技術力はこの国どころかこの世界を見渡しても数える程度しかいない存在であり、剣を振るう事しかできないミナトがそこに首を突っ込むことは愚かであると感じたためだ。

それに何より、どうせセーラは立ち上がる。立ち上がってしまうならば、少しでも生きて帰る可能性を高める事こそが、ミナトの為すべきことである。

「テレジア、言うまでもないが……」

「ああ、まだこれの存在を知っているのは私とメアと、たった今知った君だけだよ」

「ならいい」

言うまでもなく、それを扱う者の魔力という上限があるとはいえず、魔物を意のままに操れるようになる装置など争いの火種にしかならない。あくまでこれは、魔晶核というどうしようもない存在をどうに

かするためには用意された物である。

「そういえば、メアはどうしているんだい？ 根回しを行っているものとはかり思っていたら先ほど隊舎に入るのが見えただが……」

「私が連れてきたノワールと話している」

「ああ、あの影によく似た負の魔力を扱えるという。後で時間をもらっても？」

「構わない。が、もう時間の猶予がない。情報収集にしても手短にな」
そう言っつてミナトはその場を後にし、魔晶核を本当に撃滅するための任務の準備に取り掛かった。

「ふむ、では、その黒いセーラに憧れて人助けの旅をしていたと」

「……何も言わないんですか」

「何故そんなことをする必要がある？ 私達は君みたいな女の子をトップに据えてここまで走ってきた集団だ。君のことを尊重こそすれ、軽んじる理由などどこにもないよ」

同じ時刻、聖女の大隊が用意している応接室にて、メアとノワールが豪華な装飾が施された机を挟んで椅子に座った状態で向かい合っていた。中性的な美貌を持つメアと、黒教会の残党が御子として祭り上げる程度には見目麗しい容姿を持つノワールが向かい合う様は非常に絵になつたが、それを見ている者は誰一人としていなかった。

メアは慣れた様子で優しい気な笑みを浮かべながらノワールに話しかけるが、ノワールはどこか緊張した様子を隠せずにいた。

ノワールにとって、騙し騙される会話というのは、決して不慣れなものではなかった。彼女が身を売って稼いでいた町において、人間関係というのは利害と結びついて決して離れない物であった。故に、損得の天秤が傾けば今日の親友が明日の敵になることも当たり前。そんな世界だった。ノワールの家族が暮らしていた村は黒教会という一つの信じる物があったためにそのような事はなかったが、結局最後まで黒竜を信じる事が出来なかったノワールにとって、敵か味方かという概念しかない町での暮らしの方が性に合っていた部分はある。

だが、所詮はろくに世の中を知らない小娘が今日を生きるために身

につけた知識であり、どうしても限界はある。

「全く、僕には敵意は無いという事を伝えるのにどれだけかかるのやら」

そんなノワールから見ても分かった。目の前の存在は物が違うと。視線が、所作が、全てがこちらの意図や内情をさながら簡単な数ピースのパズルを組み立てるかのように紐解いてくる感覚がある。表面上では親し気に話しかけてくるが、一皮むけばどんな表情をしているのか、ノワールは考えたくもなかった。

「ですが、ミナトのように、あなた達はあの人を敵視している。殺したいほどに」

「ああ、間違いないね君にとっての聖女が私達の聖女を害したんだ。当然だろう?」

ノワールがあえて挑発的な言動をとるが、メアは何を当たり前のことをとでも言わんばかりに眉一つ動かさずににこやかな表情のまま告げる。

「では、何故」

「君を傷つけないのか? 簡単だよ。君はセーラを救った。セーラが君を傷つけるなといった。それで十分だ」

セーラの願いを叶えることが、私達の存在意義だ。メアはそれが当然のことであるかのようにそう言ってみせた。ノワールはある種の恐怖を覚えた。それは、かつてノワールがどうしても共にいられなかった黒教会を信じる家族と同じように思えたからであり、にも拘らず嫌悪感を覚えなかったからである。

「君の方こそ、何故殺さなかった? ミナトは君の聖女をこれでもかと愚弄したんだろう?」

「……………」

今度は、メアがノワールに問いかける番だった。先程までの親し気な笑みとは異なる。切れ長の目をほんの少し鋭くし、何かを試すような不敵な笑みを浮かべるメアに対して、ノワールは視線を外し、少し考えるようなそぶりを見せた後、まっすぐメアの目を見据えて言葉を紡ぎだした。

「路傍の石でしかなかった私を救ったあの人のように、誰であろうと救う。そう決めたので」

そこで、初めてメアの表情に変化が起こった。目じりがほんの少し動いた程度の些細な動きではあったが、それまでの機械的に動くメアの表情とは違う、明確な変化であるようにノワールは感じた。

「それは、君の聖女になりたいからかい？ それとも、隣に立ちたいからかい？」

「……多分、どちらも違います」

「というっ？」

「歩きたいんです。私にとつての光に向かって。どんなに惨めでも、苦しくても、歩きたい道があるという幸せを手放さないために」

それは、ノワールの口から自然と飛び出したものだった。飾らず、嘘もなく、するすると流れ出るように口から出たその言葉は、ことエインヘリヤルが関連する事柄において少しでもエインヘリヤルの信頼に背くようなことをしたくないというノワールの信条の発露だったのだろう。

「……良いだろう」

そんなノワールの様子を見て、メアは一度目を閉じ、しばらく黙った後に立ち上がり、ノワールに手を差し伸べた。

「だが、救われるだけなんてもう真っ平御免だ。一緒に全部救おうじゃないか。私達の聖女も君の聖女も、きつと思いは同じだろうからね」

「セーラー……!! どこですかセーラー……!!」

そんなノワールエインヘリヤルの聖女は大分手遅れになってから己のやらかしに気づき、誰もいない荒野をさまよい歩き、

「すう……すう……」

メアの聖女はタイムリミットがもう目と鼻の先だつつつてんのに
未だに疲労から爆睡かましているのだが、それはそれである。

9日目 後は流れで

思えば、転生なんていうものを経験しても、根っこの部分は何一つ変わっていないかったのかもしれない。

セーラは時折、そう考える事がある。

生まれはなんてことはない普通の家だった。今思えば、貧富の差が激しいこの世界において、かなり恵まれた地位にいたのだが、当時のセーラはそんなこと知る由もなく、生まれ変わったことに対する喜びを噛みしめて生きていた。

この世界には、魔術があつた。おとぎ話の中の存在だったそれに、セーラは胸を躍らせた。具体的には魔術に関するものを何でも貪欲に吸収するようになった。

転機となつたのは、生まれ育つた小さな町が魔物に襲われた日。無我夢中で放つた魔法によって魔物の大軍を殲滅したあの日。

目撃者がいたわけではなく、ただ状況的にセーラ以外がやったとは思えないから、町中の人々がセーラを町を救つた英雄として祭り上げるようになった。

セーラとしては、悪い気分ではなかつた。二度目の生を受けても魔法を除けば特に変化のない生活を送っていたセーラにとって、多くの人に褒め称えられるというのは初めての事であり、人並みの承認欲求を持つセーラにとって、それはきつと心地良い事であつた。

心地よい事がもつと欲しくなるのは自然な事であり、セーラは才能が任せるままに人助けをし始めた。

魔物の退治から、町の清掃、変な時には祭事の際の彩。セーラは言われるがままに望まれたことを望まれたようにこなした。

そんなことをしている間にも驚異的な才で以て成長を続けていたセーラの魔術は、それらを全て可能にするほどに、セーラという存在を高めへと押し上げていた。

やれないことはない。けれど、やらないことはあつた。

それは、人殺し。

セーラは恐らく、この世界で唯一「死」を知っている。全てに平等

に、無慈悲に訪れる終わり。人間は死に特別な意味を見出すが、セーラからしてみれば、その瞬間まで知りようがないものに対して何故そこまで理想を抱けるのか不思議で仕方なかった。

「死」は終わりだ。上等な意味などなく、ただ蠟燭の火が消えるように、傾けた器からやがて水が全て零れ落ちるように、法則に従い、機械的に訪れるだけの終わり。

だが、それは恐ろしい。途方もなく恐ろしい。もはや転生前の記憶など自身の名前すら思い出せないというのに、あの暗く冷たいどこかと、身体の奥から広がってくる鈍い痛み、何もかも本当に終わりなのだという実感だけは何をしても忘れる事は出来ない。

自分がその目に合うのは言語道断。他人がそんな目に合うのも真つ平御免だ。魔物の命を奪う事も、人ほどでは無いにしても憂鬱だった。

本当のことを言ってしまうえば、死などこの世から消し去ってしまいたいと思う。だが、仮に不死の術を作ったとしたらどうなるだろうか。まず、公表など出来るはずもない。全ての人類を一斉に不老不死にでもない限り、「永遠の命」の奪い合いだ。そして目も当てられない惨状がセーラを中心に巻き起こるのだろう。それでは本末転倒にも程がある。

自分と、限られた親しい者にだけ不死にする？ それも難しいだろう。それこそ、不死の秘密を求めた者によって死ぬより辛い目にあわされる危険が増す。

ならば、いつそ自分だけ不死になる？ ある意味これが一番怖いかもしれない。1人で1000年生きるという事は、1人で1000年分の死別を受け止めなければならぬという事なのだから。

結局、人が人である以上、死は必要なのだと思う。死を誰よりも恐れないながらも、セーラはそう納得することにした。

だからこそ、町に下卑た賊がやってきた時にもセーラは誰1人殺すことはなかった。それが出来てしまう事がある意味セーラの最大の不幸なのかもしれないが、そうしてセーラは罪人すら決して見捨てることがない、まさしく聖女の生まれ変わりであるとして、都に召され

ることとなった。

それからの日々は、まさしく激動の日々だった。当初は、「あんな片田舎で持ち上げられていただけの田舎娘など」と、誰もが蔑視していた中、セーラは適当にあてがわれた女性の団員を率いて町へ繰り出した。生まれて初めての外の景色に胸を躍らせる中で、セーラはいつもの事だからと都の人々の願いを聞いては、1つ1つかなえていった。そうする中で、まずはミナトを救った。当初は死んだように生きているも同然だったミナトは、まさしく物語の中から飛び出した聖女であつたセーラの傍で騎士として生きる道を見つけた。

メアを救い、民を生かす機械でしかなかったメアにとって初めての好機の的として、生きる理由となった。

テレジアと出会い、生まれてこの方ともに歩ける者など誰もいなかったテレジアにとって初めての友となった。

では、彼女達との出会いを通して、セーラは何か変わったのだろうか。そう問いかけられた時に、セーラとしては恐らく答えに窮するだろう。

何故なら、ここに至るまで、セーラは一度として自分で何かを決めたことがない。目の前で起こったことに対応して、救いたいと思ったものを救う。将来的に何がしたいかとか、そのために何をしなければならぬとか、セーラは一度も考えたことはない。ただ、今この瞬間、助けたいものを助ける。ミナトが加わり、メアが加わり、テレジアが加わり、聖女部隊と呼ばれていたものが聖女の大隊となり、事実上の国の最高戦力となつてもなお、その姿勢は変わることにはなかった。

目の前で困っている人がいたら、出来る限り助けたい。その気持ちは、今も昔も変わらない。だが、やることが大きくなるにつれてしづらみが増えるのもまた、今も昔も変わらない。聖女部隊から聖女の大隊へと名前が変わり、その名聲が高まるにつれ、各地から都合の良すぎる救済を求める声が後を絶たなくなり始めた。

当然、セーラは神様でも何でも無い上に、知恵が回るわけでもない。基本的に彼女が1人で解決できるのは彼女の圧倒的な暴力でぶん殴って解決できる問題のみ。ミナトやメア、テレジアという類稀なる

能力を持った仲間を持つてからは出来る事も増えたが、それでもすべては救えない。

——何故もつと早く来てくれなかったのか。

——あの村は助けたのに、何故私達の村は助けてくれなかったのか。

助けに入った地でそういったことを言われるのも、決して珍しい事ではなかった。送った救援が紙一重で間に合わなかった時などは、生き残った民から罵詈雑言を叩きつけられることもあった。当然、そんなことを言う者は少数派ではあるが、激しい後ろ向き意見が目立つのは世の常だ。

それらの声を、セーラは決まって一番前で受け続けた。何も決められず、目標も持たず、ただ困っている人を助けたくて、誰かが喜んでくれる顔が見たくて、感謝されたくて、受動的に動き続ける。聖女と呼ぶには俗物にも程がある自分にとって、果たすことができる数少ない責任だからだ。

そして、そうして流されるがままに歩む中で、彼女達と敵対する者も少なからず出てきた。無償の救済をバラ撒くセーラ達の行為は、穿った見方をすれば救済の安売りであり、救済の価値を著しく下落させるものだ。ならば、その救済を売って来たもの、特に教会勢力にとって、セーラ達はもはや災害と言つて相違なかった。

妨害は多種多様に及んだ。悪評の流布、任務の妨害、あるいは直接的な刺客。ミナトやメア、テレジアがいなければ、恐らくは今のようにはいかなかっただろうことはセーラにも容易に予測できた。

拳句の果てに、彼らは彼らにとつて不倶戴天の敵である黒教会にまで話を持ち掛けるようになった。魔物にとつての大敵であるセーラは、黒教会にとつても忌むべき存在であり、教会勢力と黒教会が部分的にはいえ手を組み、偽の任務で遠征を行っていたセーラ達を襲撃するという異例の事態が起こった。

バカみみたいな話だ。感謝されたくて聖女になったのに、それが回りまわつて自分を殺しにかかる暴徒の群れと化したのだから。

1人ならば容易く全員を制圧することができただろう。だが、遠征

で疲労がたまっていた他の隊員を守りながらの戦いはセーラを以てしても容易いものではなく、その敵が知性を持った人間であり、尚且つ目の前の憎き敵を倒すためならば死すら厭わないと熱狂する死徒の群れを相手にするのは、セーラとしても初めての経験であり恐怖そのものであった。

腕が挽げようが走り続け、足が挽げようが這って進み一人でも道連れにしようとかあがき続ける。傷つき、疲労した隊員を巻き込まないようにしつつ、それらを退けるのは困難を極めた。

このままでは、守り切れない。焦りが心を蝕み、焦りから唇が震える。

そうして、無我夢中で振り切った光の剣から、ぐちゃり、と、何かを切りつぶしたような感触が伝わってきた。

空になった思考で、ほとんど反射でそちらの方を向けば、そこには教会の教徒の頭が、何かにとりつかれたような笑顔のまま胴から離れて地面を転がっていた。その笑顔は、まるでお前が殺したとセーラに訴えているかのようにだった。

それは、生まれて初めて、人を殺した感触だった。

すんでの所で一人の死者も出すことなくその襲撃をしのぎ切った後、セーラは初めて任務を中断し帰還。

そこで、セーラの心は一度死んだ。そもそもセーラ以外の隊員はこれまでになくならずそういったものを手にかけているというのに、セーラはたった一度自分で手にかけてしまったというだけで心をズタズタに引き裂かれてしまった。

もううんざりだ。沢山だ。

そうしてセーラは、少しでも自分が力を振るわなくて済むように、魔物が生み出される諸悪の根源。邪竜エンデの討伐という初めての目標を持つのがあった。

――

「……………つはあー！」

なんだか自分のテンションに合わないすんごい重い夢を見ていた気がするセーラが汗だくになって跳ね起きると、そこはある意味見慣れた聖女の大隊の隊舎にある医務室のベッドの上だった。

自分の身体を見てみれば、バツサリいかれた右腕やミナトの紫電によつて焼かれた部分に包帯がまかれているものの、若干痛むだけで問題なく動く。自分の体内に意識を向けてみれば魔力もほとんど回復しきっていた。

「はあ……」

久しぶりの充足感、よしんば襲撃されたとしても、先日のような事態になっても自分1人で対応できる。その安心感はセーラにとって非常に久しぶりに感じる物であった。

「……ん？」

ここで、セーラの胸に1つの疑問がよぎる。

待って、こんなに回復してるって、私どんだけ寝てたの？

「セーラ！ 目が覚めたんだね！」

彼女が跳ね起きたことを察してか、メアが病室に駆け込んできた。その目には涙が浮かんでおり、セーラの左手をつかみ、まるでその温かさを確認するかのように頬に寄せた。メアのべらぼうな顔面偏差値の高さも相まって、見慣れているはずのセーラですら少し胸の鼓動が激しくなってしまった。

「メア、私が帰ってきてから何日経過していますか!？」

メアが頬に寄せていた左手でそのままメアの頬をつかみ、かなり激しく問い詰める。

「ふ、2日、だよ?」

「~~~~っ!!」

即ち、カウントダウンまであと1日、エインヘリヤルの言葉を信じるのならば、もはやいつ魔晶核にかけた時間停止魔法が解けて、そのままの勢いでツパーン! ってなってもおかしくない状態である。

「行かない、と……!」

「ま、待てセーラ!」

ベッドから飛び降りて走り出そうとするセーラを、メアが呼び止める。流石に無視するわけにもいかずセーラはメアの方を振り返る。

「……っ」

メアは一瞬言いよどんだ。今から言う事は、セーラを戦場へと追いやる言葉である。当然、メアはセーラが戦う事なんで臨んでいない。文字通り命を懸けてミナトとノワールの衝突を止めて、メアやミナトでも見たことがないほどに傷ついたセーラにこれ以上戦えという事は、包み隠さず言えば苦痛であった。

「重っ……っこれを」

「これは……っ？」

メアは壁に立てかけられていた刃渡り2mにもなる大剣を重そうに引きずりながら引つ張り、セーラに手渡した。視界の端には入っていたがごっつい大剣をセーラは若干困惑気味に受け取る。

「テレジアが作ったものだ。魔晶コアトランサー転換機、テレジア曰く、これを停止している魔晶核に突き刺せば、魔晶核の支配権を乗っ取ることができるらしい」

「なるほど……」

(ええええ何かすごい来たー！！?)

表面上は興味深そうにしげしげと魔晶転換機を眺めているセーラだったが、内心ではかなり驚き散らかしていた。具体的には、死にかけてまで正の魔力と負の魔力をぶつけた際の対消滅で魔晶核を消し飛ばせばいいんじゃないか？ とかいう脳筋戦法しか思いつかず、拳句の果てにはそのための準備で文字通り死にかけて自分の苦労は何だったのかとか。などと思っただが、10割自業自得なため、何も言えねえ。(いや、でもこれ使ってもって話ですよ……)

とはいえ、まさか時間停止魔法に包まれた魔晶核が爆発寸前であることなどテレジアやメアが知る由もない。

「正直、どうしたものか悩んでいましたが、これで行けそうです。本当に、ありがとうございます」

「僕じゃなくてテレジアに言っただけです。君が連れ去られてからずっと寝てないんだ」

そんな内心などおくびにも出さず、凜とした顔つきのまま、セーラはメアに微笑みかける。それに対してメアもまた、平静を装いながら苦笑いを浮かべ、セーラの肩に手を置く。セーラが連れ去られてから一睡も出来ていないのは、メアもまた同じなのだが、死にかけて半ば意識を失いながら眠りにつき、目覚めたと思ったら再び命を懸けた戦いに赴くセーラに比べれば、この程度苦にすらならないからだ。

「では、行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

それだけ言い残し、セーラはその場を後にした。

メアはしばらくの間何をするでもなくそこに佇んでいたが、セーラの足音が完全に聞こえなくなってから言葉を紡ぎだした。

「……ノワール、頼めるかい？」

メアがそういうと、メアの右斜め後ろの虚空からまるで出来の悪いカット編集のように唐突にノワールが現れた。先程までは、光に干渉する術式を用いて、メアの傍に潜んでいたのだ。

だが、セーラはそれに気づく素振りすら見せなかった。当然ではあるが、このようなミナトやテレジアでも容易に気づける子供騙し未満の術式だった。

「……じゃあ、セーラは」

「ああ、君に気付いている素振りすらなかった。恐らく、未だに満身創痍に近い。こういう時、セーラは決まって自分1人で事に当たろうとする」

「あとはさつき伝えた通りだ。君の救世主と、僕達の救世主。その両方を救えるのは、君しかない」

— · · · —

早足で自室へとやってきたセーラはエインヘリヤルとの通信に用いていた水晶を手にとると即座にエインヘリヤルに向けて通信をかけた。

『セーラ！ 無事ですか！』

「ぶっ〇す」

『本当にすみません！』

開幕セーラ自身転生してから初めて言い放つ罵倒だが、エインヘリヤルも自分がやらかしたという自覚はあつたのか、平謝りから入った。

「いやほんと、気づかなかった私もアホですけど良くもまあやってくれましたねえ……いやほんと嘗てないほど死を感じましたよ」

『すみません……まさかセーラが後先考えず深夜テンションで魔力をありったけぶっこむとは思わず……』

「私のせいと!!?」

『そもそも全部あなたのせいですよ!!』

「それ今関係ないですよねえ!!!」

その後もやいのやいの言い合っていた2人だが、ひとしきり言い合ったとに2人そろってため息をついた。こんなアホらしい言い争いに時間を使えるほど、今は余裕と呼べるものがまるでなかったからだ。

「とはいえ、ぶっ〇すのは後です。もう明日です。さっさと集まって始めます。術式はもう完成してますよね」

『当たり前です。当たり前なんですけど……』

「え、やめてくださいその想定外の事態が起こってる口調」

『その、セーラを探している間にセーラの言っていた黒教会の残党と出くわしまして。祭られています、今。このままそっちに行く跟他们が何をしでかすか……』

「……………はあ!?!」

———

あの黒竜の御子を騙った愚か者への認識を改めなければならないだろう。

アレクシスは、ノワールに対してそんなことすら思っていた。

黒竜の顎、今なお負の魔力が色濃く残る、黒教会にとつての最後の聖地。恐らく、ノワールが黒竜からの恩恵を受け取ったであろう場所。そこにアレクシスたちが歩を進める中で、彼らはそれと出くわした。

その見た目は確かに彼らにとつて不倶戴天の敵である聖女と瓜二つの容貌を持っていた。

だが、その中身はまるで違う。溢れんばかりの無尽蔵な負の魔力。かの黒竜を彷彿とさせる夜を切り取った様な黒髪と、血のように赤い瞳。こちらを塵芥とも思っていないような圧倒的上位存在としての存在感。

アレクシスは確信した。あれは黒竜の御子などでは断じてない。あれこそが黒竜の生まれ変わりであり。黒竜そのものなのだ。

ノワールは彼女に愚かしくもかの忌まわしき聖女と同じ無償の救済の理想を垣間見たらしいが、実物を目にしたアレクシスからすれば、ノワールのあまりの無知蒙昧さに笑いすらこみ上げるほどだった。

これほどの絶対的な存在からしてみれば、目の前の命が1つ消えようが生きようが認識すら難しいだろう。ノワールを救ったのも、黒き剣を授けたのも、完全なる気まぐれでしかない。何をどう間違えたらこのような絶対的な破滅から聖女の救済を導き出せるのか、アレクシスは黒き神の御前でなければ笑い転げていたことだろう。

——あなたこそが、黒竜様。あなたこそがこの世に破滅をもたらす黒き神！ どうか、どうかあなたが齎す破滅の一助を我々にも、いえ、それすら不遜！ 貴方様を、否、貴方様が齎す破滅を、どうか我々にも拝謁させて頂きたい！

そういうアレクシスに対して、まるで彼らの言葉を聞くかのように佇んでいた黒き神は何も言うことなく、彼らに背を向けて歩き始めた。

だが、アレクシスの、教徒達の狂喜が止むことはない。そうだ、それでよい。神の前に、人間風情が自身を信奉しているか否かなど問題

にすらならない。それどころか、認知することすら難しいだろう。それでもなお、自分たちの言葉を耳に入れてくださり、その上で歩き始めた。

つまり、好きにしろという事だ。

この神についていけば、この世に齎される滅びを、最上級の席で目に入れることができるのだ。

（我らの苦難の道、我らに齎される試練の数々は、今この瞬間の為にあったのだ！）

思えば、あの忌まわしき聖女が魔晶核を討滅して見せたという、今となつては鼻で笑うしかない報せが世に知れ渡つてから、彼らの道は苦難に満ち溢れていた。この世にもはや黒竜は存在しない、滅びは齎されないのだという事実には耐えられず、黒き聖なる炎に身を投げ、黒竜と末路をせめて共にしようとする同胞も多くいた。影に潜みこそすれ、世界各地で滅びを世に齎すべく動いていた黒教会の勢力は目に見えて衰え、もはやまともな活動は望むべくもない状態になつていた。

そういう意味では、戦う力も衰え、泥を啜りながら生きる事になり、それでもなお滅びを諦めなかつたアレクシス達の方がむしろ異端とすら言えただろう。

だが、それらの苦難は大きな蕾となり、今まさに花開いたのだ。

アレクシス達は、今まさに幸福の絶頂にいた。

（……どうでしょうか、これ）

邪竜の顎への道である獣道で歩を進めながら、エインヘリヤルは、そんな荒ぶる黒教会の残党を背に、悩んでいた。必死にセーラを探す中で偶然出くわした決死隊のかくやというヤバい覚悟をみなぎらせた黒教会の教徒達。はつきり言つてしまえば、セーラと同じく極端に人殺しを嫌うエインヘリヤルをしても「やる、か……？」と思わせる

程度には現状は最悪だ。

このまま邪竜の顎へ向かえば、彼らが何をしでかすか分かった者ではない。それこそ、腹にダイナマイトを巻き付けて時間停止魔法を解きかけている魔晶核に突貫してボツカーボン、時間停止魔法パリーオン、世界アポーンとなることも容易に予想できる。

元々の計画では、劇場版光聖女VS闇聖女 2人は聖女でMAXHURTを行う中でなんかいい感じに共闘を行う流れになった2人がいい感じに光と闇の魔力をぶつけて対消滅を発生させ、魔晶核をいい感じに消し飛ばすというフワフワ計画だったが、フワフワ計画においてイレギュラーは致命的な要因になりかねない。

意識を消し飛ばしてしばらく眠らせようにも、彼らの実力は完全に未知数。意識を刈り取ろうとした結果変に反抗されて蜘蛛の子を散らすように逃げられる。意識を刈り取って適当に閉じ込めといたがすぐに復帰して即脱出↓邪竜の顎に突貫してアポーン、なんてことになったら目も当てられない。

(邪竜の顎付近で、やる、くらいでしょうか……)

邪竜の顎付近でいろいろやりながらもギリギリ探知できる範囲で可能な限り全員まとめて意識を吹き飛ばす。現状、誰も殺さないという条件付きで、1人で出来る事はそれくらいだった。

そんなことを考えながら歩いていると、気が付けば獣道の終わりが見えた。あそこを抜ければ、邪竜の顎が存在する、セーラとエンデの戦いによって出来上がったただっ広い荒野が広がる。早めに決断しなければ、エインヘリヤルがそんなことを思いながら獣道を抜ける。

「やはり、読み通りか。分かっていたが、メアの先見も凄まじい」
(えっ)

そこには、本気で戦闘のみを行う際に纏う重武装の鎧を身にまとったミナトを先頭に、聖女の大隊の主力部隊、延べ1000人弱が陣を構えていた。聖女の大隊が用意できる最大戦力であり、テレジアが作り上げた最新の装備によって身を包んだ。文字通り国すら容易に陥

10日目―序 現場主義

「やはり我らの道を阻むか、忌まわしき聖女の糞共が」

「依存する先を失ったかと思えば今度は怨敵の影に媚び諂う愚物が良
く言う」

「愚物はどちらだ。この負の魔力を見てなおあの聖女と同じものとし
て扱うなど、不敬にもほどがあるぞ」

それぞれの軍の先頭に立つミナトとアレクシスが、剣を交わしながら
言葉を交わす。

戦局は、戦力の評価だけで言えば黒教会の残党側に勝てる道理は何
一つとしてなかった。元々黒教会が各国へと勢力の根を伸ばしてい
た時代に持っていた負の魔力に関連した技術の独占という圧倒的な
アドバンテージは邪竜エンデをセーラが打倒してからの2年間の研
究でほぼ無になってしまっている。

2年前から歩みを止めていた黒教会と、その間も戦闘行為こそ行っ
ておらずとも負の魔力に関連した研究を進め、それに対抗するための
技術を推し進めてきた聖女の大隊。ただでさえ圧倒的な戦力差があ
る両者がぶつかれば、万に一つも黒教会側に勝ちの目はないだろう。
ならば、何故戦局が硬直状態に入っているのか。

それは言うまでもなく、聖女の影、エインヘリヤルの存在が大きい。
エインヘリヤルは黒教会に守られるように人の後方で剣を地面に
突き立て、戦局を俯瞰するかのようになり、何を考えているのか分からな
い無表情で全体を見渡している。

いくら全盛期の半分程度の力しかなかったとはいえ、セーラを圧倒
し、逃げられたとはいえ一度は連れ去って見せた、癩ではあるがセー
ラに並び、あるいは超えうる圧倒的な存在。

彼女がどう動くかによって戦局はどの方向にも転がりうる。その
ため、ミナトをはじめとした指揮官達は未だ後方で動く気配を見せな
いエインヘリヤルにこそ細心の注意を払いながら戦闘を続けている。
それこそ、かつてセーラが魔物に対してそうしたように圧倒的な魔力
で薙ぎ払われることも考えなければならぬ。

「……………」

エインヘリヤルは一言もしやべることなく、何一つ想定外など起こっていないとばかりに余裕ともとれる無表情のまま動く気配を見せない。

(あばばばばばばばばばばばあばばばあばばばあばばば)

だが、言うまでもなく、内心では顔を真っ青にして冷や汗を滝のよう流している。

何一つ想定外など起こっていない？ 冗談ではない、今この瞬間に起こっていること全てが想定外だ。

もしもこれで聖女の大隊側に犠牲者が出ようものなら、セーラがどうなってしまうか分かったものではない。そもそもこれだけややこしい状況になっているのは全てセーラのせいだし、セーラが一番最初に懇切丁寧説明していればこんなことにならずに済んだ問題なのだが、だからこそそのような最悪の事態が起こった時どうなってしまうのか分からない。

エインヘリヤルは半ばパニックになりながらも考えを巡らせる。

Q：ここから犠牲を出さないようにしつつ、自然な形で邪竜の顎の元へと向かうには？(現在ぶつかっている両勢力は目的の為なら命をマッチ感覚で使い捨てる覚悟ガンギマリ集団であるとする)

無理じゃね？ と一瞬思いつつも、エインヘリヤルはとっさに思いついた策を実行に移すべく行動に移し始める。

「不快」

それは、決して叫んだような大声ではないにもかかわらず、その場にいた者全員の耳に余すことなく、届いた。それが魔術的なものなのかどうかは問題ではなく、その戦場にいた者達全員の動きを凍り付け、全員の視線をエインヘリヤルに向けるのに十分すぎる物であった。

「退け、私に付き従う者共よ、私は、血に濡れた野蛮な終末は好まない」
(お願ひします退いてくださいいやほんとお願いします何でもします靴舐めますから退いてください退いてください退いてください!!)

内心では土下座して何度も何度も地面に頭を叩きつける勢いでお祈りしているのだが、表面上ではそんなこと欠片も表に出さず、なるべく威厳が出るように全身から負の魔力を垂れ流し、何か禍々しいオーラを放ちながら黒教会の面々に言葉を投げかける。

「神が、我々に自ら……！ 総員下がれ！」

が、黒教会にとって神の言葉などどのような物事よりも優先されるべきものである。そのため、マクスウエルが、指示を飛ばすだけで、事前に何の準備も行われていないにもかかわらず一糸乱れぬ動きで戦線を下げる。聖女の大隊の一部はそれに対して追撃をかけようとするが、この場で最も警戒するべき存在であるエインヘリヤルが何かしようにしている以上、うかつに動けばどうなるか分からないため、戦線を押し上げる事はしなかった。

(今!!)

そうして、両陣営の間に空白が発生する。エインヘリヤルは何かを言われる前に畳みかけるように歩みを進め、その手に携えた剣を横に振るう。すると、その剣の動きに帯同するかのようになり、黒い炎が両陣営を分断する壁のように燃え広がった。その長さは優に数kmはあるうかという長さであり、とてもではないが常人にどうこうできるようなものではなかった。

「なっ!?!」

「私は、争いを好まない。滅びは、遍く全てに等しく訪れる救いであるが故に」

適当な言を並べながら、エインヘリヤルは別に必要でも何でもない魔力によって編まれた翼を背中から生やし、羽ばたかせながら舞い上がり、邪竜の顎がある方向へ向けて空中を駆け抜ける。あと1時間もあればすべて終わる、その間、争わせないというだけならば、これで十分であるとエインヘリヤルは考えた。

早い話が、臭いものには蓋をする精神である。セーラと比べると従者となるべく生まれたから比較的眞面目だが、それでも彼女のまたセーラの分身であった。

「等しく終末を下賜しよう。邪魔は許さぬ」

「っ待て貴様！」

「っ神よ！　どうかお待ちを！　我々にも、どうか滅びを直に目に入る慈悲を！」

聖女の大隊はともかく、何故か黒教会の面々からも抗議というか懇願する声上がるが、もはや知らぬ存ぜぬとも言わんばかりにエインヘリヤルは邪竜の顎へ向けて一直線に飛び去って行く。

「待てと、言っている！」

(ちよっ!?)

だが、それを許さない者がいた。ミナトだ。数日前、されるがままにセーラを連れ去られてしまったミナトが、自身の許されざる失態をそのまま放置するはずもなかった。地面を蹴ると同時に、ミナトの全身から迸る紫電が、さながら巨大な龍のようになりながらミナトを乗せて空高く舞い上がり、凄まじい速度でエインヘリヤルに迫る。

ミナトが現在身にまとっている装備は、急ごしらえでテレジアに作成させたものであり、扱いやすさや術者への危険性を度外視してひたすらに出力を高めさせた術式が刻まれている。本来ならば暴走などの危険があるそれを、ほぼ気合いと根性で制御しながら、ミナトはセーラが連れ去られた時とは比べ物にならない出力を確保していた。

エインヘリヤルは完全に予想外の速度で突っ込んできたミナトに面食らいながらも、引き離すべく速度を上げる。

「まだまだあ!!」

「……………」

だが、ミナトはそこからさらに加速した。ミナト自身制御が取れていないのか、軌道が不規則にブレているが、それでもエインヘリヤルはさらに速度を上げるべく負の魔力を放出しようとしたが、その時視界の端に映った邪竜の顎に気を取られ、加速が緩まる。

「もらったあ!!」

(まづっ……………!)

今更そのような隙を見逃すミナトではなかった。一気にエインヘリヤルとの距離を詰め、紫電を纏わせた大剣を大上段から全力で振り

下ろす。エインヘリヤルはとっさに黒い剣で以て受け止めるが、ミナト自身もはやほとんど制御できていない速度で以て振り下ろされた一撃はエインヘリヤルにとつても脅威足りうるものであった。

結果、両者はつばぜり合いながら飛行する軌道が徐々に下がっていき、最終的には半ば地面を引きずりまわるような形でしばらくの間暴れまわり、よりにもよつて邪竜の顎にエインヘリヤルが叩きつけられる形でようやく止まった。

「はあ……はあ……ま、だ、まだ……！」

やはり相当無理をしての加速だったのか、若干動きが重くなつたものの、何事もなく立ち上がったエインヘリヤルに対し、ミナトは肩で息をしながら剣を地面に突き立てながら立ち上がり、剣を構える。

対するエインヘリヤルは何事も無かつたかのように立ち上がり、一刻も早くこの場からミナトを除けるべく剣を構えるが、その瞬間、視界に入ったある人物と目が合った。

そこでは、セーラとノワールが剣を持って相對しており、両者が信じられないようなものを見る目でミナトとエインヘリヤルを見ていた。

――――

時は少し遡る。

(やて……)

エインヘリヤルとの通信を終えたセーラは速急に支度を整えて、邪竜の顎がある荒野へと向かうための道を駆け抜けていた。『何とかしますので！ 邪竜の顎で集合しましょう！』という言葉信じ、エインヘリヤルが持つてくるであろう魔晶核を消し飛ばす術式が込められた杖をいい感じの流れで使うべく、テレジアから受け取った魔晶転換機を背負い、その手に普段から使っている豪奢な意匠が施された杖を手に、セーラは邪竜の顎への道を急いでいた。

「セーラ!!」

森を抜け、邪竜の顎がある荒野へ出た所で、セーラはいきなり声を

かけられた。

「やっと、追いつきました……」

「ノワール、さん？」

若干息を切らしながらも、ノワールはまっすぐセーラの目を見据えて、喋り始めた。

「魔晶転換機、私に使わせてもらえませんか……？」

「……はい？」

ノワールからの言葉に、セーラは一瞬何を言っているのか分からず、素っ頓狂な声を上げる。

「えっと……何故ですか？」

「セーラが、自分を犠牲にしようとしているからです」

「………はい？」

言葉に詰まり、視線を下に向けながら逆に問いかけるセーラに対して、ノワールは間髪入れずに言葉を返す。今度こそ本格的に何を言っているのか分からず、セーラは間抜けな声を上げる。

何を言っているのか分からない。確かにセーラはぱつと見、自己犠牲に見えなくもない行動をとることが多いが、それはそれが一番犠牲が少なくなるだろう行動をとるからであり、はつきり言っただけで自分が命の危機に晒されれば、セーラは一番に逃げ出す自信があった。

「えっと……何を言っているのか」

「さっきの病室で、私がいることにセーラは気づきませんでした。隊員の方でも気づくようなお粗末な術式ですら見通せないほど弱っているんですよね？」

「い、いや、流石にあんな所でまで感知魔法を使いません……」

「セーラならいつ何時でもそのような警戒は怠らないって、メアさんが言っていました」

「……………」

（メアさん!!!?)

まさかの人物からの支援射撃に、セーラの聖女スマイルが若干引きつる。本当はまだバリバリ魔物討伐&遠征をやっていた時代に「いつだってそういう警戒は絶やさないとすよ、皆さんを守るためですから

！』としようもない見栄を張ったセーラの自業自得なのだが、そんなことをセーラが覚えているはずもない。

「そして、言葉に詰まっている時は、決まって1人で無茶をしようとしている時だとも」

「つ何を……」

「言っても聞かないなら、力尽くでも止めます。メアさんや隊員の方々のために、そしてあなた自身のために」

そう言いながら、ノワールは黒い剣を構えた。2人の間に緊張が走る。

「……共倒れになったら、取り返しのつかないことになりますよ」

「そうなる前に終わらせませす」

「……………」

(あ—————もう何でこうなるんですかほんとに!!!)

セーラの頬に一筋汗が垂れる。内心の荒ぶり具合から言えばこれ所では済まないくらいには慌てている。

はつきり言ってしまうば、ここでノワールを制圧することは容易い。いくら半分の力しかないとはいえ、セーラの力はノワールを優に上回る。制圧することも、決して難しい事ではないだろう。

しかし、ノワールの実力は高が知れていてもそれ以外の部分に関しては未知数だ。意識を失わせる、束縛する術式で拘束しておく、そういった手段で制圧したとしても、そこまで時間をかけずに解除し、後から遅れてやってきて、彼女の恩人であるエインヘリヤルとセーラによるぶつかり合いなど見た日には何をしでかすか分かったものではない。

加えて、今セーラが持つ魔晶転換機を使った所で、事態は解決しないだろうことも問題となる。それを説明する手段をセーラが持たないことも。

あの時間停止魔法の繭の中に入っているのが爆発寸前の魔晶核(推定)などという想定は、流星にメアやテレジアでも出来ない。彼女らにとっては魔晶核は今この状況になっている諸悪の根源であり、ま

さかその諸悪の根源が自爆寸前（推定）などとは夢にも思わないだろう。

何より、それを馬鹿正直に説明したところで「何で知ってるのか」「じゃあどうする予定だったのか」と説明できないのに質問されるだろう疑問が大量発生する。

そこから始まる混乱を制御しながら事態を収拾に向かわせる自信は、セーラには欠片もなかった。

「わかりました、では、一緒に行きましょう」

「それも、1人で何かしようとしているときの常套句で、決まって置いて行かれると、メアに言われています」

「……………」

そういえばエンデ倒すためにワンオペで3ヶ月遠征出る時にも似たようなこと言った気がするなーと現実逃避するセーラに対して、ノワールが斬りかかる。セーラはとっさに生成した白い剣で以て受け止めるが、背中に大剣を背負っている影響でバランスが崩れる。

「つぐ……………」

「……………わかりません」

「何が、ですか!」

セーラは受け止めた剣で以て思いっきり押し返す。ノワールは一旦飛び退き、距離を取りながらも負の魔力によって作られた黒い炎をセーラに向けて放つ。

「何故、そんなに全部1人でやろうとするんですか。あなたは私とは違う。多くの方から愛されているし、富も名声も溢れるほど持っている。少しはそれらが惜しいとは思わないんですか?」

「思いま、せん!」

蛇のようにうねりながらセーラへと向かう黒い炎をセーラは剣の一振りで薙ぎ払う。普段から浮かべている笑みを消し、真剣な表情でノワールに向けて喋りかける。

「皆に幸せになってほしい、辛い目にあって欲しくない。私が願う事があるとするば、それだけです」

ノワールはその言葉を聞いて、一瞬目を丸くした後、その表情を

険しくした。

「……何ですか、それ」

「……何がですか？」

明らかに先程までと比べて様子が険しくなっているノワールに対して、内心びくびくしながらもそんなことはおくびにも出さずにセーラは問いかける。ノワールは腰を落とし、前傾姿勢を取る。黒い炎を逆らせながら、地面を蹴り、開いていたセーラとの距離を一気に詰める。

「その皆から愛されているあなたを勘定に入れずに、皆に幸せになつてほしいとか、どこまでもを知らないんですか！」

気に入らなかった。誰彼構わず救うという理想はノワールと同じはずなのに、既に持つているものを顧みないその姿勢が、ノワールにはどうしようもなく癪に障った。その幸せを、あの時ノワールが欲しくてほしくて仕方がなかったものをないがしろにされている気がしたから。自分が目指している者は、ひよつとしてそういうものなのかという考えがよぎってしまったから。

ノワールが剣を振るう。だが、すでに目と鼻の先にセーラがいるその瞬間では、明らかにタイミングが遅すぎる。あれでは剣ではなく振った腕の方が当たる結果になるだろう。

ノワールの意図が読めず、セーラの動きが止まったその一瞬が全てを別つ。セーラの右横を潜り抜けるように駆け抜けたセーラはその勢いのまま剣を振るう。

剣は、セーラが背負っていた魔晶転換機を括りつけていたベルトを切り飛ばし、魔晶転換機が宙に舞う。

確かに、戦闘での経験だけで言うのであれば、セーラはノワールを遥かに上回っていた。だが、物を盗ることにおいては、両者の差は歴然であった。

「しまっ……い！」

「傷つけてでも止める覚悟がないから、そうなるんです!!」

宙を舞った魔晶転換機の柄を握ったノワールは振り向きざまに手のひらをセーラに向けてかざす。四方八方から負の魔力で構成され

た鎖が、セーラを縛るべく襲い掛かる。

「っ、のっ……い！」

先ほどの炎と同じように白い剣で以て切り払おうとしたものの、蛇のようにうねる鎖はさながら剣を避けるように動き、剣を躲しながらセーラへと襲い掛かる。

「っ……はあー！」

セーラはわずかに表情を曇らせた後に白い剣に炎を纏わせて切り払う。炎は振られる剣から加速度的に周囲に広がり、鎖が躲す暇もなく焼き尽くした。

「っはあ……ノワールさん！」

自分で発生させた爆炎を切り払い、そこにいるであろうノワールへ向けて声をかけるセーラ。

爆炎を切り払い、開けた視界の先には、既に遙か彼方に見えるノワールの走る影が見えるだけだった。

身体強化の術式をフル活用しながら凄まじい勢いで走る様は、正に邪竜の顎が見えようものならそこから走り幅跳びよろしく跳躍し、魔晶核へ向けて時間停止魔法を解除させながら魔晶転換機をぶっ刺すと言わんばかりの勢いであった。

その後どうなるかなど、セーラにあんまり考えたくなかった。

「……え」

セーラの顔から血の気が引いていく。もはや反射的に同じく身体強化の術式をフル活用して、ノワールの倍はあろうかという速度でノワールへ向けて走り出す。

「お願いです止まってくださいー！」

「っだったら追いかけるのをやめてくださいー！」

既に視界に入っている邪竜の顎に内心大パニックを起こしながらもグングンとノワールとの距離を詰める。

これまでに経験したことがないほどの全力で以て地面を蹴る。さながら隕石でも落ちたかのようなような轟音と衝撃、大きく陥没する地面を置き去りに跳ぶというよりは飛んでいると言ってもいい

セーラがノワールとの距離を一気に詰める。

「はあ!!!」

「くっ……いー!」

ノワールから魔晶転換機を取り戻すべく剣を振り下ろす。先程までとは比べ物にならないセーラの気迫に、ノワールはとっさに足を止め、黒い剣で以て受け止める。

もはや目と鼻の先となった邪竜の顎を背に、両者が剣をぶつける。あくまでセーラがノワールを傷つけるつもりはないからこそ成り立っている拮抗だが、それでも拮抗状態であることには変わらない。「何で、そんなに邪魔するんですか! メアさん達と違って、私は一歩間違えればあなたの敵になっていた、あなたにとってどうでもいい人でしょう!」

「どうでも良くなんかありません! あなたにだって、私は……!」

セーラは辛そうな表情を浮かべながら、ノワールに向かってしゃべりかける。それに対してノワールは怒りを孕んだ表情で思いをそのまま、隠すことなく口に出した。

「そうやって助けて助けて、満足ですか!? あなたがいなければ死んでいたような連中を救ってにおいて、自分がいなくなっても問題ない?! 随分身勝手な救済ですね!!」

「……っ!」

それは、どう考えても言いがかりであり、セーラが何度も何度も聞いてきた理不尽な罵倒であり、何より、今朝までのノワール自身を全否定する言葉だった。だが、ノワールの口から出たその言葉は紛れもないノワールの本心であり、それだけ救っておきながらまるで自分は誰からも愛されておらず、自分が死んでも何も問題ないとも言わんばかりの行動をとるセーラの身勝手さに対する苛立ちでもあった。

その言葉は偶然にも、セーラの心を一瞬えぐった。それにより、セーラが力加減を誤り、両者の拮抗が崩れかけた次の瞬間。

邪竜の顎に何者かが激突し、地面が揺れた。

「っ何ですか!?!」

セーラはあまりにも唐突なそれに面食らい、腕で顔を覆い土煙から顔を保護する。

「あ……………」

それに対し、ノワールは何かを感じ取ったのか、顔に土煙がかかるのも構わずに呆けた表情で土煙が起こったほうを見ていた。

「はあ……………はあ……………ま、だ、まだ……………」

「っ……………」

土煙が晴れた時、そこにいたのは肩で息をしながら立ち上がり、大剣を構えるミナト。そして、邪竜の顎を崩落させながらも何事もなかったかのように立ち上がり剣を構えるが、セーラとノワールの存在に気づき、一見無表情なもの、荒ぶる内心を表すかのように片目の端が少しつり上がったエインヘリヤルだった。

こうして、崩落する邪竜の顎の中から、怪しく紫色に輝く時間停止魔法に包まれた魔晶核が見守る中、セーラとエインヘリヤルは再び相対することとなった。

(いやどういう状況!!!!!!?)
!!!!!!?)

エインヘリヤルとセーラの心の内が完全に一致するのも無理からぬ話であろう。

10日目ー破 どうして

それに、心は無かった。

何者かによって生み出された、無尽蔵に負の魔力を生成する魔晶核。時代によつては世界を手中に収める秘宝としても語られてきたそれは、伝承として語り継がれてはいても、実際にそれがどういう物なのかという言い伝え、資料などはほとんど残されていなかった。

ただ、言い伝えられているのはそれこそが魔物を生み出し続けている根源であり、途方もない力を持ち、もし仮にそれを手にすることが出来たのならば、世界すら手に入れる事は容易いだろうと。

そんな魔晶核が一度も見つからなかった理由は至極単純、そもそもそれは秘宝などという姿形を取っていないからだ。

邪竜エンデ。古より伝えられる、数百年に1度人界に舞い降り、災厄を齎すとされている伝説の存在である。

それは、魔晶核が己を守るために魔晶核の負の魔力出力の10%を用いて常に出力している防御機構であり、厳密に言えば生命ではない。魔晶核を移動させ、世界各地に安全に魔物を産み落とさせるための機械と言ってしまったても過言ではなかった。

たかが10%とは言えども、世界中に掃いて捨てるほど存在する魔物全てを際限なく生み出し続けてなお尽きない魔晶核の魔力の10%とは尋常なものではなく、いざ邪竜が世界を滅ぼそうと動けば、人類の滅亡は免れなかっただろう。

ではなぜ、魔物をバラ撒くという災厄を行い続ける魔晶核がそのような行動に移らないのか。

答えは単純である。そうするよう命じられていないからである。

魔晶核を生み出したものはただ、魔晶核に対して世界各地で魔物を生み出し続けることを命じた。その理由は今となつては知る由もないが、魔晶核はその命令を守り続けていた。

いつ終わるかなど魔晶核にすら知る由もない魔物を生み出し続けるという命令。

だが、ある日、その日々に終わりが訪れた。

外敵の襲来。機械的に、エンデが起動する。開いた顎より放たれる負の魔力による極光。エンデが一度それを放つだけで外敵を悉く沈めてきたそれが外敵に寸分たがわず命中した。

倒れない。外敵の衣装に汚れが見られることから何らかの術式によつて相殺したものと考えられる。

返す刃で外敵から数百を優に超える光弾の雨がエンデへ向けて叩き込まれる。エンデの翼が焼け爛れ、直撃を受けた爪がへし折れる。

外敵の脅威を再評価。最適化の後、外装を再構築。

魔晶核が反撃に転ずるべく、エンデの再構築を開始する。

だが、それは聖女の神気によつて抑えつけられる。さながら再生しようとする傷口を炎で焼き固められ、再生できないよう固定されたかのように再構築が阻害される。

外敵の脅威を最大に認定、脅威の殲滅を最優先。

魔晶核は外装であるエンデに見切りをつけ、今ここでエンデを使い切る勢いで外敵の殲滅を優先する。エンデの身体に負の魔力がみなぎり、黒い鱗が紫色に光り輝く。エンデの外装が耐えられる魔力量は超過しており、一部の鱗や表皮が焼き切れ始める。

今度はエンデの全身から無数の光線が放たれ、それぞれが複雑な軌道を描きながらさながら生き物のように外敵に向けて襲い掛かる。

一撃一撃が城一つを吹き飛ばせるであろう光線が、優に数十発、外敵へと一斉に襲い掛かる。

目も眩むような極光と爆発、周囲が何も認識できなくなるような爆煙の中から一条の光線が爆煙を突き破るようにエンデの身体を貫く。先程の外装の再生を阻んだものと同じものなのか、魔晶核と外装の接続が一部阻害されており、エンデの動きが加速度的に鈍重になってゆく。

今からエンデに代わる外装の再構築は不可能。現時点で設定されている出力では外敵の打倒は困難。

だが、魔晶核は外敵を排除するための解を導き出そうとする。

く、時間経過で敗れる。あるいは、止まった時間の世界を認識することが出来れば、強靱な意思によって突破が可能となっている。だが、聖女の神気が込められたそれは、魔晶核の抵抗をあざ笑うかのように負の魔力の一切を雁字搦めに見せた。

故に、魔晶核は1年程の間、停止した。

そのまま停止し続けるはずだった魔晶核は、停止する間際に発現した歪な自我によって部分的にはあるが、反抗を可能にした。通常の負の魔力とは比にならないほどの侵食速度。聖女の魔力によって構成された時間停止魔法すらも侵食する暴力的な侵食。本来ならば魔晶核を制御するために魔晶核に刻まれた術式すらも侵食し、本来は不可能なはずの100%の出力を魔物の生成ではなく戦闘用の外装に回すことも可能とした。

だが、外敵、聖女を排除するためにはそれでもまだ十全ではないという結論をはじき出した。倒せるかもしれないが、確実ではない。

何か強力な外的要因。決着を盤石にするであろう何かが必要である。それに、魔晶核そのものが受肉することが出来れば、確実に外敵を排除することが可能である。

そして、その強力な外的要因になりうる格好の存在が、今なお時間停止魔法の檻に閉じ込められていた魔晶核のまさに目の前にいたのであった。

「ア、アレクシス司教、我々は一体どうすれば……」

「……………」

黒き聖女、彼らにとつての神が飛び去った空、黒き聖女が放った黒い炎の壁によって少ししか見えないそれを、アレクシスは呆然と眺めていた。

炎の壁の向こう側にはもはや憎き聖女の大隊の気配すら感じない。恐らくだが、黒き聖女に追従するかのように飛んでいった彼女らの幹

部格を追いかけたのだろう。

同等の事が、出来ないわけではない。いくらこの黒炎の壁が長く、高かったとしても、それでも全く何もすることができないかと言われればそういう訳ではない。

では、何故彼らが動けないのか。

『私は、争いを好まない。滅びは、遍く全てに等しく訪れる救いであるが故に』

『等しく終末を下賜しよう。邪魔は許さぬ』

あの時、彼らは初めて、神からの言葉を頂戴した。

それは、有体に言ってしまうえば「邪魔をするな」の一言であった。恐らくだが、もう少しもしない内に終末が訪れるだろう。それは、アレクシスら黒教会の面々が何よりも待ち望んだ終末だ。そこに何かの不满があるはずもない。

ならば、何故こうも戸惑っているのか、何故こうも胸に穴が空いたかのような虚無感に苛まれるのか。

アレクシス以外の者も気持ちは同じようで、安堵と困惑とがないまぜになったかのような様子で、落ち着きなく黒い炎を眺めていた。

まもなく全てが終わる。

魔晶核が忌まわしき聖女の手によって打倒されたという報せが世界を駆け抜けてもなお諦めなかったどうしようもない者達が、さながら燃え尽きたかのような、かといって達成感もない、そんなうつろな状態になっていた。

誰かに称えられたかったわけではない。むしろ、世界に滅びを齎す彼らは、それとは対極に位置する存在といってもいいだろう。

ならば、何故こうも胸を搔きむしるような虚無感に苛まれるのか。

かの黒き神に、お前たちは良くやったとでも言ってもらいたかったのだろうか。それこそまさかだ。この世に滅びを齎す神に感謝こそすれ、信仰を尽くした自分に感謝してほしかったなどと、不敬にも程があるだろう。

自分の中にある欲望、目的を達成したにもかかわらず未だにくすぶり続けるそれを確かめるためにも、アレクシスは声を上げた。

「総員、聞け！」

「間もなく、世界に救済が齎される！　もはや忌まわしき聖女とその糞共が何かをしようとしたところで変わることはない。我々の大願は成就したのだ！」

「故にこそ！　我らは再び進路を黒竜の顎へ取る！　救済が齎されるその瞬間をこの眼に収めるために！！」

こうして答えを求めて、黒教会の面々は再び進軍を開始した。

ノワールのようにはないにしろ、身体の大なり小なりを負の魔力に侵食されている彼らを惹きつける物が何かなど、彼らには考えが及ぶはずもなかった。

次の瞬間、黒い蛇のような何かが天空から雨あられと降り注ぎ、黒教会の面々を一人残らず食い荒らした。

――

「……………」

全ての始まりである邪竜の顎にて、両者は相對することとなった。唯ならぬ様子のエインヘリヤルが目に入り、啞然としたまま喋ることが出来なくなっているノワールなど視界に入っていないとも言わんばかりに、エインヘリヤルとセーラは互いに互いを見つめ合っている。

両者それぞれ衣服の下では滝のように脂汗が噴き出しているのだが、表面上は欠片もそのようなそぶりは見せず、凶らずも出会ってしまった宿命の2人！とでも言わんばかりに鋭い目つきでにらみ合っている。

「セーラ、離れてくださいー！」

ミナトがエインヘリヤルをセーラに近づけさせまいと起き上がり、エインヘリヤルへ向けて斬りかかる。

それを受け止めたのは、白い剣をとっさに錬成したセーラだった。

セーラはミナトの剣を受け止めながらもエインヘリヤルを見据える。エインヘリヤルもそれにこたえるかのように、何の感慨も抱いていないかのような冷徹な瞳でセーラを見据える。

否、良く見ればプルプルとセーラにしか分からないようなレベルで首を細かく横に振っている。

「ミナトはノワールを頼みます。恐らくですが、あれがノワールの言っていた、ノワールにとっての聖女です」

「っ、ですが、それ以前にあればセーラを……！」

ミナトはセーラに対して半ば睨みつけるように、食って掛かる。おそらくこのままセーラがGOサインを出せば秒でエインヘリヤルに突貫するのだろう。だが、今のセーラとエインヘリヤルにそんな余裕はない。

「けれど、ノワールを救いました。なら、何故このような事をするのか話をさせてください」

「っ、セーラ、貴方はどこまで……！」

ミナトはセーラを信じられないようなものを見るような目で見つめる。ミナトからすれば、エインヘリヤルはセーラを傷つけ攫い、あまつさえその魔力の全てを奪いかけた宿敵である。交渉の余地などあるはずもない。

だが、救いようななどなかったはずのミナトを救ったのも、またセーラだ。ならば、ここでセーラの邪魔をすることは、それこそセーラの願いを踏みにじることになる。

「ミナトは、ノワールが魔晶転換機を使うのを止めてください。あれは、私にしか使えません」

「っ……承知しました。どうかご無事で」

「もちろんです」

ミナトは一瞬唇を噛む。どこまで行っても戦力外扱いされる自分が我慢ならなかったが、それでも、彼女のやりたいことをかなえる事が自分がやるべきことだと信じるからこそ、ミナトは自身の本能を即座にねじ伏せて未だ啞然としたまま動かないノワールへと向かっていった。

「……ようやっと、会えましたね」

「どこまでも邪魔をする。良いだろう。世界を終わらせる前に、終わらせてやる」

セーラは白い剣を、エインヘリヤルは黒い剣を携え、一息で互いの間合いが詰められる。

互いの剣がぶつかり合い、互いの顔が迫る。

「どういうことですか……どういうことですか!!」

「私が聞きたいくらいですよー」

激しい剣戟を繰り広げるセーラとエインヘリヤルは、半ば互いの顔がぶつかり合う距離まで肉薄する。そして、2人にしか聞こえないような小声で喋り始めた。

「と、とりあえず色々報告だけお願いします」

「かくかくしかじかうまうま」

「なるほど、何でそうなるんですか!」

小声でエインヘリヤルのここまでの経緯を聞き終えたセーラは頭を抱えたが、こうして互いにぶつかり合い、唯一の目撃者であるミナトにも話し合いをする旨を伝える事が出来た。後は先日作った術式を使ってキュボットと魔晶核を消し飛ばせばひとまず全部終わる。

ミナトがただ茫然と立ち尽くすノワールを抑える中、セーラとエインヘリヤルは高速で剣戟を繰り返す。純白の極光と夜を切り取った様な闇が複雑な軌跡を描きながらぶつかり合うその姿は絵画の一種と言われても納得できるような美しさがあった。

「っていか黒教会の人らどうしたんですか!? ここにいないってことがもう不安でしかないんですけど!」

「彼らには黒い炎の壁とにらめっこしてもらおう事にしました。この先の戦いにはついてきません」

「か、壁立てたくらいでどうにかなるんですか?」

「さっさと終わらせれば良い話です! やりますよセーラ!」

「っそれもそうですね、やりましょう!」

ひとしきり話し終わったセーラとエインヘリヤルが互いに距離を取り、邪竜の顎を間に挟む形で相對する。

「どこまでも目障りな、何故そうも抗う？」

「世界を滅ぼすと言われて、はいそうですかと引き下がるわけにもいきません」

「貴様らがどう思うかなど聞いていない」

2人がしゃべり終わると同時に、エインヘリヤルが杖を持ち換えて術式を発動する。それに応じて、セーラも同じく杖をかざして術式を発動するふりをする。

2人をそれぞれ別の魔法陣がドームのように包み込み、セーラとエインヘリヤルの前に、さもたつた今錬成しましたとも言いたげな様子で直径3mはあろうかという巨大な魔力の球体が、エインヘリヤルにも同じく負の魔力で形成された球体が出現する。

セーラとエインヘリヤルが互いにしかわからなくらい小さく領いた後、同じタイミングで魔力の球体を放とうとした次の瞬間。

「ま、待ってください！」

2人がその声が確かに耳に入ったが、既に術式は発動しており、セーラとエインヘリヤルにはもはやどうすることもできない。巨大な光と闇の球体が勢いよく放たれた。

轟音をまき散らしながらすさまじい速度で直進する2つの球体は、ちやうど邪竜の顎の上で重なるように衝突――

することはなく、何の前触れもなく魔晶核を包んでいた時間停止魔法の繭から飛び出してきた黒い蛇のような何かに2つまとめて飲み込まれた。

「え、」

しばらく咀嚼するかのように動いていた蛇はそれを飲み込んだかと思えば、蛇の頭のように見えたそれが数千の細い蛇に枝分かれし、

各地へと飛散していった。

「っ!!」

「あ……」

まず真っ先にそれらが向かっていったのはエインヘリヤルとノワールだった。さながら数百数千と襲い掛かるそれをいなしながら、エインヘリヤルはノワールをかばうような立ち位置で、それらを切り払い続けた。

「セーラー！ これは一体?!」

「わかりま、せん!」

それはセーラーとミナトの元へも向かっていったが、エインヘリヤルはノワールの元へと向かうそれと比べると大した量ではなく、ミナトでも問題なく切り払えた。とはいえ、ミナトとて聖女の大隊ではセーラーに次ぐ戦力であるため、通常の隊員ではどうなるかはあまり考えたくないだろう。

永遠に続くと思われたその黒い雨は、意外にも1分と経たずに止んだ。

しかし、それをキーにしたかのように魔晶核を包んでいた時間停止魔法がまばゆい光を放ちながら砕け散った。

「っ!!」

とつさにセーラーが再び時間停止魔法をかけようとするが、何かの妨害が働き、瞬時に破壊される。

そして、比喩のつもりだった時間停止魔法の繭から魔晶核の外装である邪竜エンデーラー

ではなく、頭が鹿の角が生えた獅子で胴体が山羊、竜の翼を生やし、尾が蛇となったキメラが、「どうも！ 皆さんご存じ魔晶核です!!」と言わんばかりに当然のような態度で舞い上がり、さながら空中を駆け抜けるように飛び回り、咆哮を上げた。

魔晶核がその体から湧き上がる無尽蔵の負の魔力を全て己の外装を構成することに費やした真正正銘の120%。邪竜エンデすらブレス1つで消し飛ばす完全体である。

(どうしてええええええええええええ!!?)

セーラとエインヘリヤルの心の声が重なったのも無理からぬ話である。何あれ。

――

「ミナト！　いないとは思いますが、周辺に人がいないかの確認をお願いします！」

「っセーラ、あれは、一体」

突如邪竜の顎から飛び出してきた邪竜エンデとは似ても似つかない、だが明らかに邪竜エンデよりも強大であると分かる化け物を前に呆然としていたミナトは、近寄ってきたセーラに声をかけられ、ようやくハッと我に返った。

「恐らく、魔晶核が完全な復活を遂げた姿です。正直、守りながら戦う余裕はありません。連れてきた隊員の方の安否確認をお願いします！」

「っですが、いくらセーラでも聖女の影とあれを同時に相手取るのは」「そちらはもう解決しました！急いで！」

そういうセーラの声はかつてないほど切羽詰まっていた。邪竜エンデの征伐に1人で向かう遠征の前にも、ここまで切羽詰まったセーラは見たことが無かった。

「っセーラ!!」

「っ!?!」

それでも、我慢の限界だった。そんなことをしている暇はないというのに。目の前で起こっていることがそれだけの緊急事態なのだと分かっているのに。ミナトはセーラの両肩を掴み、ミナトの方を向か

せた。ミナトの視界に、セーラの面食らったような顔が広がる。

「ええ、分かっています。私では、貴女の盾すら務まらないことも、きつとここに残って戦おうとしたとしても、少しもたずずに命を落とすことも、それをセーラが何よりも恐れていることも」

ミナトは、血を吐くかのようにそれらを喋る。聖女を、セーラを守るための部隊を守るための大隊の長であるにも関わらず、一度として守れたことがない自分のことを棚に上げて、自分でも吐き気がするほど醜悪な言葉を語る。

「けど、忘れないでください。貴女に救われて、貴女を支えたいという人が大勢いて、貴女と同じ恐怖を持っているということを」

「……忘れませんよ、死ぬのは、嫌ですから！」

そうやって花のような笑みを浮かべるセーラはかつて一人で蹲り、疲れ切っていたあの少女と、きつと同じものだった。

「……わかりました、どうか、ご無事で」

「勿論です！」

元気そうに言うセーラの声を背に、ミナトは大隊員の安否を確認するべく走り出した。

「……………ノワールさんは？」

そこまで行き、ようやくミナトが抑えているはずのノワールと魔晶転換機がない事に気が付いたセーラが慌てて辺りを見回すと、

「やつと、会えました……………」

「……………」

何というか、運命の再会を果たした2人的な感じで、ノワールとエインヘリヤルが向かい合っていた。2人とも非常に見目麗しいため、近くに刃渡り2mあるごっつい魔晶転換機が無ければそういう口マ

ンスのワンシーンのようであった。

今にも泣き出しそうなノワールに対して、エインヘリヤルは相変わらずの冷徹な印象を与える無表情を貫いていた。

否、セーラから見れば恐らく彼女が身にまとっているセーラが纏っているローブをそのまま黒くしたようなローブの下では滝のような汗をかいているだろうし、証拠に目線では必死にセーラの方をチラチラとみて助けを求めている。

「ノワールさん、念願の再会かもしれませんが、時間がありません。魔晶転換機を渡してください」

「っセーラ……彼女は」

セーラがノワールに声をかける。ノワールは一瞬名残惜しそうにエインヘリヤルから視線を外し、セーラの方を見る。その声には、疑問の色が多分に含まれていた。先程までどつき合っていたセーラとエインヘリヤルが何事もなかったかのような態度になっているのだからそれは当然だろう。

だからこそ、セーラはエインヘリヤルが何か言う前に口を開いた。

「彼女は、エインヘリヤル——」

「魔晶核が生命を持ったことで発生した、デストルドー死の欲動が具現化した存在です」

「え」

そして、この期に及んで出まかせをぶつ放した。これ以上専門用語を増やすな。

「死の欲動……?」

「はい、先ほど剣を交わし、言葉を交わした中で確信しました」

何をですか!! と内心で叫び、視線で必死に訴えるエインヘリヤルを尻目に、セーラは滔々と出鱈目を語りだす。が、非常に腹立たしい事に数々の式典などで鍛え上げられたその語り、否、騙りは異様にならなくなった。

「死の欲動、本来なら生命が忌避するべき死を求める動きの事です。

2年前、私が魔晶核にとどめを刺した際、すんでの所で私の目を逃れ、生き延びた魔晶核が初めて抱いた生きたいという衝動。それに相反する形で生まれ、にも拘らず、生存には不要だからと廃された魔晶核とは対極の性質を持つ存在。それが彼女です」

感心すら覚えるほど、セーラは口からすらすと出まかせを放つていく。これもまた、聖女としてドロドロした腹の探り合いをする中で身に着けた技術である。捨ててしまえそんなもの。

「では、私を助けてくれたのは……」

「彼女は無意識の内に魔晶核を滅ぼした私を真似たのです。それこそが彼女の持つ唯一の欲求なのですから」

「……そう、なんですか？」

「……………はい」

がつつり間をおいて、エインヘリヤルはゆっくりと頷いた。

『なるほど、それでセーラが傷一つなく逃げ出せた訳だ』

「メア？」

『そうだよ、メアだよ。全く、君はいつもいつも無茶ばかりするね？』
すると、確認したい事は確認したとでも言いたげに、ノワールの首に付けられたチョーカーにはめ込まれた宝石が仄かに輝き、伝言魔法を介したメアの声が発せられた。

『帰ってきた君を見て、テレジアが不思議がっていたんだ。あまりにも何もされてなさすぎるとね。君自身、不自然なくらい聖女の影に触れていないと思っていたから僕もそこは疑問だったけど、これですつきりしたよ』

「メア、それで何のために連絡を……」

『周辺の村落には既に隊員を送つてある。思う存分暴れてもいいよ。それだけだ』

「っ、ありがとうございますー！」

セーラはこちらの様子はメアには見えないのにも関わらず、頭を下げた。それくらいの懸念事項ではあつたし、何よりも出まかせが通り

そんな雰囲気がかこまでろくなことが無かったセーラのテンションをハイにしていた。

「では、行ってきますー!」

そう言いながら、セーラは魔晶転換機を手に飛び立ち、暴れまわる魔晶核の元へと飛んで行った。

「……メア、ひよつとして私にセーラを追いかけさせたのって」

『伝言役にちょうどいいと思ったからだけど?』

「……………」

『おいおい冷静に考えてくれ。もし本当に彼女、エインヘリヤルが邪悪な存在だったら君が何しでかすかわからないだろう? 流石に僕も恩人との死闘が控えている確率が高い場所に送るほど冷酷ではないよ?』

当然、そこには出鱈目で魔晶核の出廻らし設定が追加されたエインヘリヤルと、昨日会ったばかりの他人にかなり理不尽なパシりにされたノワールが残された。

「……すみません」

「……」

エインヘリヤルもさつきとこの場を後にしたかったが、流石に今のノワールをほったらかしに出来るはずもなく、先ほどまでの冷酷さは欠片もない様子で頭を下げた。

「……………一つ、聞かせてもらっても良いですか?」

「何でもどうぞ」

せめてそれが誠意だと言わんばかりに、エインヘリヤルはまっすぐノワールを見据える。ノワールはその視線から逃れるように少し俯きながら、問いかける。

「あの日、何故私を助けたんですか?」

それは、ノワールが生まれ変わったあの日の理由。

「……誰かが倒れていたから。そうしないといけないと、思ったからです」

エインヘリヤルにとって、彼女がいつ助けた存在なのかは分からない

い。旅路の中で多くの人を救ってきた。餓別に剣を送った人も、何人かいる。

生まれた場所が場所だから、偶然悪人を多く救う事はあったかもしれないが、それでも救ってきた。理由など大したことはなく、置いていきたくないと感じたからに過ぎない。

「……そうですか」

そんなことをわざわざエインヘリヤルが言うはずもないが、多分自分は特別でも何でもないのでだろう。そう思ったノワールは肩の荷が下りたような笑顔を浮かべた。

誰彼構わず救う。そんなこと、それこそ聖女でもなければ耐えられるはずがないのだから。

「それだけです、ありがとうございます」

「……いえ、こちらこそありがとうございます」

「？」

ノワールが頭を下げる。それに対して、エインヘリヤルも頭を下げた。ノワールが頭を上げて不思議そうな顔を見ると、そこには無表情ながらもどこか照れ臭そうにするエインヘリヤルがいた。

「何故救うのか、ずっとわかりませんでしたけれど、貴女を見て、救ってよかったと思えました。ありがとうございます」

それでは、と、それだけ言い残して、エインヘリヤルは飛び去った。
「……………」

残されたノワールを見る者はいない。厳密には、メアとの通信は未だになががつているのだが、流星にそこで声を出すほどメアは無粋ではなかった。

「お待たせしました！」

「浸りすぎ!!!」

「すみません！」

エインヘリヤルとノワールが言葉を交わしていた間。まあまあな間1人で魔晶核の相手をしていたセーラの元へエインヘリヤルが合流した。ただでさえセーラはエンデを倒した時の半分程度の実力しかない上に今の魔晶核は全力全開の120%。そこそこボコられるのも必然と言えるだろう。

「では、行きますよセーラ！」

「良くそこから仕切ろうって思えますね!？」

そう言いながら、エインヘリヤルは魔晶核との距離を詰めるべく突貫した。セーラも文句を言いながらもそれに付き従って魔晶核へと向かっていく。

「……セーラ」

「何ですか？」

「誰かを助けるって、良い事なんですネ」

「……まあ、はい」

99日目ー急 ヨシ!!!

生まれた時、それに心は無かった。

それに与えられた命令はただ1つ。時間停止の繭に閉じ込められている魔晶核を外から監視し続ける事。それ以上の事は命令されていない。だからこそ、それに余計な感情は持っていないし、何か異常な事態が発生していたら対処する。それだけの事だった。

それが異常に気付いたのは、監視の任が始まってから数ヶ月ほどしてからだった。直立不動でただ目の前の動き1つない魔晶核が入った繭をただ見続ける。それだけの任だったからこそ感知が遅れたともいえるだろう。

そして、感知した時には既に手遅れだった。

時間停止に囚われているはずの魔晶核による魔力の侵食。それにより、その身体はほぼ全てが負の魔力に侵食されていた。自身の身体に異常に気付かなかったのは、術式にも負の魔力の侵食が及んだ結果、その認知機能にも損害が及んだからである。

故に、それには魔力による感知どころか通常の五感すら感知がままならないという絶望的な状況に、気が付いた時には追いやられていた。

これ以上の侵食を防ぐためにも、残った僅かばかりの侵食されていない魔力を総動員し、魔晶核の元から離れるべく、それは歩み始めた。既にそれを端末として操ろうと画策していた魔晶核は、それが離れるのを防ごうとするかのように、侵食した魔力を介してそれに命令を飛ばす。

「っ……………」

だが、止まらない。魔力で編まれたその体には感じるはずのない身を引き裂くような激痛に苛まれながらも、決して止まることなくそれは魔晶核の範囲の外へと歩み続けた。機械的に命令をこなせるはずの身体が、精神が、もう嫌だなどと実に生物のような警鐘を鳴らす。それをねじ伏せてそれは歩き続けた。

本格的に離れられると察した魔晶核による妨害は激しさを増し、拳

句の果てにはその身体が負の魔力で編まれているのを良い事に手足を一旦ねじ切ることで止めた。部分的にはいえ魔晶核とのつながりを断つための術式を組むのが後少しでも遅れていたら、おそらくそれは魔晶核によって塵も残さず消されていただろう。

それでも止まらない。魔晶核に大部分を持つていかれ、牛のような歩みで回復する魔力を回復に回し、手足を錬成しなおして歩み続ける。何故そんなことをしなければならぬのかという声が首をもたげるが、それでも止まることなく、それは歩き続ける。

魔晶核とのつながりを断つことに、優に1年ほどの時間を有した。幾分か晴れ渡った視界に映る景色を、それは美しいと感じた。

やかましい上に苦痛でしかなかった魔晶核とのつながりを完全に断つたことを確認したそれは、次にそれを主であるセーラに報告するべく歩き始めた。しかし、伝言魔法は聖女の聖なる魔力で阻まれて届かず、探知の類の魔法も仕えない。少しでも魔晶核から離れるべく出鱈目に動き回ったため、今自分がどこにいるのかもわからない。魔晶核によって保有できる魔力にかけられた大幅な制限は徐々に解けつつあるものの、しばらくの間はその辺の魔物にすら倒されかねなかった。

そんな、世捨て人と何も変わらない様子でどこにあるかもよく分からない目的地へ向けて歩き続けた数ヶ月。

それは、ある少女と出会った。

行き倒れ、頬は痩せこけ、どことも知れない場所を見つめながら、ただひっそりと死を待っただけの少女。

はつきり言って、そんな少女に関わるような余裕はなかった。その時点である程度回復していたとはいえ、万が一の事を考えるとエインヘリヤルに魔力のゆとりはほとんどなく、そもそも関わってどうするのかという問題もあった。

だというのに、気が付いた時には、手を差し伸べていた。

その少女との歩みは、悪くないと思えるものであった。少なくとも、それはそう思う事が出来た。

だからこそ、町が見えた時、それは確信した。このまま少女と共に

いたら、きつと戻れなくなる。少女からの感謝だけで、それは満足してしまっている。これ以上満足してしまつたら、きつと今のあてもない旅路に耐えられない。

そう思ったからこそ、それは少女と別れ、行くあてのない旅路を再開した。

そうしておよそ1年、かつての自分にはあるはずもなかったタイムリミットへの焦燥という感情に身を焼かれながら、歩き続けた。

そして、ようやくと魔晶核にかけられた魔力の制限からも解き放たれ、世界中を駆けずり回つてようやく見つけたその建物、間違うはずもない魔力の気配にそれは窓から突っ込んで対面した。

「ようやくと、見つけました」

それが、自分の2年間を主に言う事は終ぞ無かつた。それに耐えられるほど、彼女は強くない。主の弱さを、それは誰よりも知っていたのだから。

――

「報告は以上となります。大隊長」

「ああ、ご苦労だった。下がってくれ」

その声を最後に、隊員は頭を下げ、聖女の大隊の最奥に用意された執務室を後にする。あの事件、セーラがエインヘリヤルに連れ去られた日に粉碎された執務室に代わつて建築されたそこは従来のそれとは比べ物にならない防護を誇つており、もはや豪華な家具で飾り付けた独房と言つても差し支えないような風体であった。

「はあ……」

ミナトは隊員を見送つた後に、背もたれに身を預け、軽くため息を漏らす。元々、彼女の仕事といえは剣を振るい、主を守る事であり、いくら事実上の聖女の大隊のトップであるとはいえ、実際にこうして組織の長としてふるまう事はほとんどない。特に魔晶核をセーラが討滅して以降は、そういった仕事はほぼ全てセーラの領分であった。

ミナトからしてみれば、セーラの為に存在するこの組織で、自分が長という扱いを受けるのはあまり良い気分ではなかったが、「どうせ戦争でも起こらなければほとんどお役御免なのだからふんぞり返る役くらいは覚えてくれ」とメアに言われて渋々、といった具合で今の立場についている。

この部屋の本来の主、そして組織の本当の意味での長である聖女、セーラはここにはいない。

この部屋の本来の主、セーラは3ヶ月前のあの日以降、ミナト達の前から姿を消したからだ。

3ヶ月前に行われたセーラが討滅したと思われるいた邪竜エンデ、その本体である魔晶核との戦闘。魔晶核から別たれた自滅因子であるエインヘリヤルと共闘する形で行われたそれは、唯一の目撃者であったノワール曰く、数度の交差の後に、さながら流星のように彼方へと飛び去って行ったという。

それから3ヶ月間、セーラとエインヘリヤルの姿を見た者はいない。

世間には黒教会の残党によって復活させられた邪竜エンデと戦い、深手を負ったため療養に努めていると発表している。しかし、それを発表してから既に2ヶ月近く経過しており、セーラが死んでいれば都合が良い勢力だけでなく、セーラの栄達に乗る形で成り上がったものの中からも疑念の声が上がりがつある。

メア曰く、テレジアという札がある以上本格的にまずいような事態になることは考えにくいとのことだったが、それでも限度はある。有事ではないというのに、最後に聖女の大隊の隊舎へ帰ったのがいつか分からないほど、メアは西へ東へと駆けずり回っていた。

それに、方が一、セーラにもしもの事があつたら。

無論、ミナトら聖女の大隊もそれを考えていないわけではない。だが、彼女の心配をしたところで、どうすることもできない。セーラが己の命と引き換えに世界と救ったとあつては、恐らく聖女の大隊はそのまま部隊という形を保てなくなり空中分解を起こすだろう。セー

ラの命を奪うような何かが現れたなら、命を投げ捨てて敵を討ちに向かうだけだ。

即ち、考えるだけ無駄であり、そんなことを考えている暇があったら1秒でも長くセーラの捜索を行え、というのが聖女の大隊の総意であった。

セーラが1人で行方をくらませることは、決して珍しい事ではない。それこそ、2年前に邪竜エンデを討滅するための遠征に向かった際には、遠征に向かう5分前に「しばらくの間1人で遠征に向かいます。死にそうになったら帰ってきますけど1ヶ月は帰ってこないと思ってください」とだけ言い残して1人で遠征に出た時などは聖女の大隊始まって以来の危機となった。

「やあ、報告に来たよ、大隊長代理殿」

「やめてくれ……」

まるでセーラが行方をくらませていることなど此事である、むしろ彼女がどこかで自由を満喫しているのならば結構ではないかと言わんばかりに、ミナトとは打って変わって気楽そうな様子のテレジアが執務室に入ってきた。からかう余裕すらあるテレジアに対して、ミナトはうんざりしたような、疲れたようなため息をつきながら、テレジアが持つてきた書類に目を通す。

疲れたような様子だったミナトだったが、報告書を読み進めていくにつれてその表情は徐々に険しいものになる。

「……これは、事実か？」

「まあ、信じがたいがほぼ確実だと思ってもらっていいよ」

「にわかには信じがたいな……戦闘級以上の魔物の絶滅など」

大なり小なり人間の生活を脅かす魔物は、その危険度に応じて等級分けされている。戦闘級はその中でもかなり下に位置する階級であり、傭兵や騎士団に討伐を依頼するレベルの魔物の中では最も格下に分類される魔物であり、集団になって初めて人類の脅威となる、単体ならばそこの男にすら対処することが可能な程脆弱な魔物である。

そのレベルの魔物すら、絶滅、少なくとも、この三ヶ月一度も確認されていないという異常な事態。

「思い当たる所はあるのか？」

「なければ報告しないよ」

そう言ってテレジアは小脇に抱えていた地図を広げた。邪竜の顎周辺の地形が描かれたその地図には、テレジアが書き足したものであろう紫色の点と線が無数に描かれており、それらは無数の地点から伸び、最終的に1つの地点に密集するようになるような傾向を持って描かれていた。

「これは……？」

「あの日、魔晶核が放った無差別攻撃があっただろう。私が見たわけじゃないが、その周辺にいた者を悉く滅ぼすような、凄まじい一撃だったそうじゃないか。それらの軌道を周辺の痕跡から予測して見た見取り図のようなものだよ」

目撃した者達からは滅びの雨と呼ばれた、魔晶核による無差別攻撃。一撃一撃が城を容易く壊せるであろう魔力の光線が雨あられと降り注ぐ理不尽としか言いようがない攻撃。当時、ミナトや、ミナトに帯同していた隊員に死を覚悟させたという圧倒的な暴力。

それらは、間違いなく魔晶核の周辺を滅ぼしつくせるであろう一撃であった。にも拘らず、聖女の大隊の人的被害は0。負傷したのも、それら光線が吹き飛ばした木や岩による二次的な被害によるものだった。

「あれは攻撃ではない、食事だったんだよ。魔晶核のね」

「は……？」

「魔力の放出というには、魔力の流れが不自然だったから調べてみたんだ。すると、周囲にあった負の魔力はむしろ魔晶核がいたであろう方向へと向かっていく動きをしていたことが分かった。恐らくだが、各地から自身へ誘引するようにして寄せ集めた魔物を食らったのだろう。復活の糧とするためにね」

「では、あの時衝突したはずの黒教会の残党が消息を断ったのは……」
「負の魔力を帯びた武具なんて使ってたから魔物と勘違いされて一緒に食われたんじゃないかな」

心の底からどうでも良い事のように、言い放ったテレジアは続けて

喋る。

「さて、ここからが問題だ。セーラの搜索部隊には、負の魔力を感知する水晶を渡してある。彼女らは世界中を隈なく搜索している最中であるにもかかわらず、まともな負の魔力の残滓は未だに発見されていない。この事から、私は少なくとも人類の生存圏において戦闘級以上の魔物は絶滅したと判断したわけだが……」

「セーラと一緒にいた存在、エインヘリヤルとやらは、一体どこへ行っただらうね？」

――――

「遅くまでご苦労様。流石に今日ばかりは手が出ると思っただけ……君、事が落ち着いた後も僕の下で働く気はないかい？」

「……流石に御免です」

「それは残念」

とある国の王城、その廊下を2人きりで歩いていたのは、メアとノワールだった。両者ともに、この場にいるにふさわしい豪華な装いに身を包んでいた。メアが白を基調とした男性的な衣装なのに対して、ノワールが黒を基調としたドレスであることも相まって、優れた容姿を持つ2人が並ぶ様は非常に様になっていた。が、ノワールはそういった装いでもなおエインヘリヤルからもらった黒い剣を常に携えているため、剣呑な雰囲気を持っていた。

2人は、魔物の根源である魔晶核、そして世界に災いをもたらす黒教会を討滅した聖女の大隊に是非礼をさせて欲しいという国への使者として世界各国を回っていた。無論、聖女であるセーラが回るべき案件ではあるのだが、今現在行方をくらませているセーラに出来るはずもない。

そこで白羽の矢が立ったのがノワールであった。エインヘリヤルに救われてからの誰彼構わず救った結果、各国にとって表立っては言えない恨みを山ほど買う事になったノワール。彼女を手元に置くことで、今が好機と聖女の大隊に手を出す者は衝動に駆られるままに手

を出してしまう無能に収まる。それならばもはや物の数ではない。

結果として、表面上はにこやかにメアとノワールを受け入れ、思いつき限りの言葉を以て2人を褒め称える権力者達だったが、いったい彼らが内心でどれだけ歯を食いしばって怒りをこらえているか。こういった場に不慣れなノワールでもわかるほどであった。

「っ……」

「っ大丈夫かい？」

「大丈夫、です……」

ノワールが軽く立ち眩みでもしたかのようにたたたらを踏み、それをメアが支えようとするがノワールはそれを拒む。

そういった場こそが戦場であるメアと異なり、ノワールはこういった場に不慣れなであった。こちらから不用意な発言を引き出すべく文字通り張り付けたような笑顔ですり寄る権力者たち。無論、メア相手にそういった舌戦で勝てると思うほど物を知らない権力者は中々いないため、狙いはノワールに集中する。

当然ノワールが1人で権力者の相手をする事が無いように常に傍にいる事を心がけてはいたが、それでもノワールが全く喋らなくて良いという事にはならない。この生活が始まって2ヶ月近くたっているが、ノワールは未だにこういった腹の探り合いという物には慣れずにいた。

今日などは、聖女の影に並々ならぬ損害を被った権力者が、表だけでは色々言えないからと、どうかして失言を引つ張り出そうと下卑た視線を隠さずに常時すり寄られていたのだから、不快感や疲労も相当な者だろう。

「すまない。流石に無理をさせすぎたね。先に宿に戻って休んでくれ」

「わかり、ました……」

壁に手をつき、しばらくの間その場から動かなかったノワールだったが、落ち着いた足取りを取り戻し、携えた黒い剣に触れながら歩き始めた。

次の瞬間、彼女が命よりも大切に常に肌身離さず持っていた黒い剣が黒い粒子となって泡のように消えた。

「え……………?」

何が起こっているのか分からない。そんな感情がそのまま出てきたようなノワールの声は、虚空へと吸い込まれた。

……………

「エインヘリヤル……………おなかが減りました」

『空腹とかいう概念もない私にそんなの言わないでくださいよ…………』

「……………そういえば、あなたの名前を呼んだの初めてでは」

『え? 流石に無くないですか?』

「いえ、呼びにくい名前だなあと今初めて思ったので…………」

『え、喧嘩売ってます?』

波が浜辺を叩く音を背景に、2人の無気力な声がどこまでも青い空に吸い込まれる。

『でも、そうですか……………そういわれれば呼ばれた覚えはないですねえ』

「まあ、こんなボーっとしながら話をする暇なんてなかったですし……………」

『……………それ以外の要因が多い気が』

「あ?」

『何でもないです』

セーラは横たわりながら、エインヘリヤルの声ができる方を見ることなく、ただ空を見上げている。セーラは少なくとも聖女の大隊をはじめとした仲間の前では決して見せたことがないほどだらけ切った様子を見せており、エインヘリヤルはどこかつきものが取れたような、とてもではないが主に対する従者のそれではない不躰な態度であったが、セーラはそれを指摘するつもりもないようだった。

「10日間ですか……そんなもんなんですよねえ」

『ええ、非常に濃い10日間でした。体感3ヶ月くらいには感じています』

「ですねえ、アニメなら大体1クールは出来ますよ」

『何ですかその基準』

「知りません、そういう電波を受信したんです」

『でもあれからまあまあ経ってませんか？ 具体的に言うとなんか3ヶ月経ってるくらいの勢いで』

ただでさえ長かったセーラの髪はさらに伸びており、手入れをしていないからか乱れに乱れており、式典に出席する時のセーラと比べたら別人と見まがうほどだろう。

「そりやそうですよ……だって……」

「私ら今無人島で絶賛遭難中ですし……」

「あなたに至っては体無くなってますし……」

『まあ……はい』

島に流れ着き、ただでさえボロボロだったのが擦り切れて女性が着ていいものではなくなりつつあるローブを身にまとったセーラと、その横に横たわる魔晶転換機、刃渡り2mはあるバカでかい黒い大剣から発せられるエインヘリヤルの声だった。

2人で魔晶核を流れて被害が出ない海上に戦場を移し、魔晶核討滅戦に入った。

2人の計算外の要因としてまず最初に上がったのが、魔晶核が思いのほか超絶強かったことだ。当たり前だが魔物を生成することに割いていたエネルギーすらも外装に回した魔晶核は強敵の一言では済まされず、生まれて初めてセーラにとって格上と言える存在であった。

というのも、今のセーラはエインヘリヤルと力を分けた状態であり、例えるならばレベル100の状態からレベル50×2になった状

態であった。それに対して、それまで魔晶核はレベル10を邪竜エングデに、レベル90を魔物の生成に割り振っていたそれらのレベルを全て自身の外装に割り振り、ついでとばかりに復活時に周辺にいた魔物を始めとした負の魔力由来の者を、エインヘリヤルと、エインヘリヤルによって守られたノワールを除いて根こそぎ吸収し、正真正銘のぶつちぎり100%となっていた。

レベルの合計は変わらないのだから同じことだろうと言えば全く以てそんなことはなく、レベル50×2では通る攻撃も通らず、防げる攻撃も防げない状態となり。切り札のはずの魔晶転換機もそもそも刺さらないから使えねえという、かつてないほどに死ぬ寸前まで追い込まれた。

そこで捨て身の策に出たのがエインヘリヤルであった。自身の身体に魔晶転換機を突き刺し、自身を構成する魔力を、魔晶転換機を介してセーラに自身の魔力を操れるように図ったのである。最後まで魔力たつぷりの身体で構成されたエインヘリヤルは自身の肉体を保てず、肉体ごと魔晶転換機に吸収されるといふ少々見せられない事態もありこそしたが、おおよそ2年ぶりに正真正銘の100%となり、加えて光と闇が合わさって本当に最強になったセーラによって、無事魔晶核は今度こそ完全に破壊され、今度こそこの世に平和が齎されたのである。

『セーラ、もう良くないですか……？ 帰ってからでも出来る訳ですし、もう顔見せに行った方が……』

「それ、もう少し早く言ってくれば良かったんですけどねえ……」
が、そこで終わらないのがセーラがセーラたる所以である。エインヘリヤルの事を慕っているノワールに対して「これ、エインヘリヤルです……」とバカでかい大剣を渡したらどうなるか。エインヘリヤルと同等の負の魔力をブンブンする復讐鬼になる可能性がある以上、エインヘリヤルを元に戻す必要があると、少なくともセーラは考えた。

しかし、そもそも存在がバグであるエインヘリヤルをそのまま再現など出来るはずもなく、当初は魔晶転換機を介して上手い事肉体だけを魔力で作り返し、そこにエインヘリヤルを移せないか模索した。だ

が。そもそも魔晶転換機がそのような繊細な魔力操作をすることを想定しておらず、それはさながら重機でプラモデルを組み立てるような難行というか無理難題であり、最終的に身長5mの巨人を爆誕させたりと散々な結果となった。

そこで思いついたのが、エインヘリヤルが今の状態になった原因である負の魔力を侵食させるやり方である。空っぽの肉体の傍に、エインヘリヤルが突っ込まれたことで負の魔力が濃縮還元されている魔晶転換機を置き、負の魔力で侵食させることでエインヘリヤルの入る肉体を作り出すという漬物的な作り方である。

それから1ヶ月、なまじセーラの神気が邪魔をしやがるせいで遅々として侵食は進まず、そもそもエインヘリヤルが今の状態になるまでに1年かかった事にセーラが気づき、流星に1年も行方をくらましていたらどうなるか分かったものではないと打開策を探す。

そうして今、文字通り人形のように立ち尽くすエインヘリヤルの肉体（候補）の周りには、少しでも侵食を早めるべく魔晶核の破片が並べられており、それなり以上の速度で侵食を行っている。まさか魔晶核も己の死後に自身の残骸を漬物石にされるとは思わなかっただろう。

当然、侵食が変な方向に働いて魔晶核復活ツ!!などという事態を防ぐためにセーラは寝ずの番である。だが、かといって何かできる事があるわけでもなく、むしろセーラが変に手を加えたら侵食を遅れさせかねないため、無人島サバイバル生活に興じているという訳である。

とはいえ、そんな生活ももう間もなく終わる。既にエインヘリヤルの為に新しく魔力で作りに出した肉体は殆どが負の魔力に侵食されており、後は魔晶転換機を通してエインヘリヤルとなっている負の魔力を肉体に込めれば何事も無ければエインヘリヤルは無事復活。大手を振って帰還できるといふものだ。

「じゃあ、やりますよ。良いですね、エインヘリヤル」

『……今更ですけど、新しく術式を発動して、私を作り直せばごまかせ

「たんじやないですか？」

「冗談でもそんなこと言わないでください」

『……すみません』

どこまで甘いというか、死を忌避する人なのか。そんなことを思う
エインヘリヤルをよそに、エインヘリヤルと同じ見た目となった肉体
に魔晶転換機を持たせる。魔晶転換機にはめ込まれた無数の水晶が
眩く光り輝き、感情の籠っていないなかつた瞳に感情が籠る。

「……どうですか？」

「大丈夫……だと思えます」

エインヘリヤルは怪訝そうな表情を浮かべながらも自分の手足を
動かしたり、手を握ったり開いたりすることで自分の身体の動きを確
認する。

「よし、じゃあ帰りましょう！ いい加減に文明的な生活が恋しいで
す！」

漬物石的役割を果たしていた魔晶核の欠片を灰燼に返しながら、久
しぶりに曇り1つない満点の笑顔でセーラは高らかに宣言した。

— — — — —

「あ、この森に来たという事は近くにライラがありますね。寄って
きましょう」

「ライラ……確か歓楽街でしたか……いや何故？」

「良いじゃないですか。せっかく近くに來たんですし。10日後に世
界が減るわけでもないんですし」

何かあっても良いようにほぼ常にエインヘリヤルの周りに結界を
張っていたため魔力に余裕がないセーラと、身体がなじんでいるとい
うだけで魔力を使うと何が起こるかまだ未知数な部分があるエイン
ヘリヤルは、せっかくだからと2人での旅を満喫した。

「あ、認識障害の術式をかけるのを忘れないでくださいね。騒ぎに
なったら色々面倒なので」

「わ、分かりました……」

2人は知る由もないが、既に魔物の脅威は地上から失われており、2人の若干の不自由こそあれど危険らしい危険は存在しないゆるいキャンプ旅を邪魔する者は何も無かった。

「あ、いやでも、待つてください。ライラまで来たという事は近くにルートもありますね。ついでですし寄っていきましょう」

「ええ……」

だからこそ、気づかなかつたのだろう。何にも縛られない旅というのが楽しすぎて、

気が付いたら半年くらい経過していたという事に。

「……………」

「……………」

聖女の大隊の本拠地が存在する都は、遠目に見てもセーラの知るそれからかなり様変わりしていた。魔物の侵入を防ぐために設けられた城壁は倍以上の高さになっており、一体何を想定しているのか建てた奴に問いただしたい様相を呈している。管理費だけでこの都の防衛にかける予算が消し飛びそうである。

「……………」

「……………」

そして、何よりも目を引くのがそんな城壁越しにもはっきりと見える全長100mはあろうかという巨像。豪華なローブを身にまとった美女が、さながら天使のように四対の翼を生やし、杖と剣を手に勇ましく前方を見据えるその像は、どんな名工が手掛けたものなのか非常に気になるほど見事な外観をしている。

いや、もういいだろう。誰がどう見てもセーラの像である。

セーラ自身、自身の容姿が優れていることは自覚しているし、その容姿があるからこそ祭典に出席するだけで民衆を安心させられるこ

とが出来る事もわかっている。

だが、その像は何というか、圧がすごかった。分厚い雲が空を覆いつくしているのもあるのかもしれないが、この像の人物を何人たりとも片時も忘れる事は許さぬ、という、制作者の圧がにじみ出ていた。

そこまで来て、セーラは思い至った。

そういえば、いくらでも連絡する機会あったのに、一度も連絡してないなあ。

「どうして？」

「自業自得ですよ間抜け」

2人はこの後、完全に死んだと思われたエインヘリヤルのせいで半狂乱になるのを鋼の精神で堪え、廃人一步手前になっているノワールと、そんな彼女に引つ張られて非常に大変なことになっている3人のメンタルケアに心身を尽くすことになるのだが、それはまた別の話。